

プロローグ

「それでカイ。魔法^{まほう}院^{いん}の人とはもう会ったの？」
シエルが尋^{たず}ねると、カイが答えた。

「いやまだだ。近日^{ホーリー}中^{ーリース}に着任されると聞いている」
ここは神聖職訓練校^{エキスパート}。放課後。

下校中の生徒たちが自然に彼女を目で追う。長く、美しい銀^{ぎん}色の髪を耳の上にかきあげた彼女は、神聖アステレア王国・第四王女―シエルファ―・クランニアステリオである。

彼女はふうんとうなずくと、カイを見上げた。

「魔法院の人に迷惑をかけるのもほどほどにね？　力
イ」

「……なぜ俺が迷惑をかけることが前提なのだ？」

シエルはふふつと笑うと、鞆かばんを揺らす。

「あら？　だつて、カイはいつも騒ぎを起こすじゃない
の」

「そうだったか？」

そんな二人を見て横合ひとみいから声を掛けたのは、金色きんの
髪に青い瞳ひとみの女子生徒。神聖御三家筆頭ごさんけひつとうソレル家長女、
ミリア・ソレルである。

「シエル、もつとはつきり言わないとダメよ。――カイ、

また面倒ごと起こさないでよ？」

「面倒ごとを起こしているつもりはないんだがな……」

つぶやくように言うのは、カイ・ブラツディア。

最強の騎士、ロイヤルパラディン王宮聖騎士になるべく修練を続ける、王国最高レベルの暗黒騎士である。あんこくきし

そんなカイを見て、二人は顔を見合わせた。シエルが微笑みながら口を開く。ほほえ

「そうね……最近はおとなしくしてると思うけれど」
ミリアが続けた。

「まあ、あれだけの騒ぎを起こしたんだから当然よねえ」

むうとうなるカイを、二人は目を細め、眩まぶしそうに見

上げる。

先日、の演習地での事件は、国内的には「なかつたこと」と「^{ドラゴンジンビ}にされており、目撃した生徒もいたものの、カイが腐屍竜を倒したことは意外なほど噂^{うわさ}にならなかつた。

そんなことを言っても誰も信じなかつたし、本人の記憶もあやふやだつたからである。

王立魔法院は、カイが腐屍竜戦^{ドラゴンジンビ}で見せた力に興味を抱いており、彼を調査する手はずになつてゐるが、まだ魔法院からの調査員は姿を見せていなかった。

事件以来、三人は大通りで待つてゐる王家の馬車のことろまで一緒に下校するようになっていた。もちろん、シエル王女を守るためである。

カイもミリアも、いざという時に備え、ターニャ学長からたいとう帯刀許可をもらっていた。

二人は会話を続けながらも、常に周囲に目を配る。この二人の護衛を突破し、シエル王女を襲撃できる者はそうはいないだろう。

校門を出て右に折れ、通りに向かって歩き出したそのとき――

「む！」

迫ってくる風切り音に、最初に気づいたのはカイだった。背中に背負ったりょうてけん両手剣を抜きざま――「ふっ！――飛んできた棒状のものを叩き斬る。たた」

地面に落ちたものを見て、カイは息を飲んだ。それは

数本の矢^やだつた。

カイはすかさず、ミリアに叫ぶ。

「敵襲だ！ ミリア、シエルを頼む！」

「任せて！ —シエル、こっちへ！」

シエル王女をミリアに任せ、周囲に目を走らせた。学園前の道は並木通りになつており、その向こうは低めの^{かんぼく}灌木が生い茂^{おしげ}っている。

「下校中のみなさん、退避してください！ 襲撃を受けています！」

ミリアの叫びに、生徒たちがざわめく。

「えー！」「襲撃!?」「まさか……王女が!?」「私、先生呼んでくる！」「王女を守れ！」

しかしここは神聖職訓練校。ホーリーエキスパート生徒たちは毎日、実戦さながらの授業を受けているのだ。あわ慌てふためく生徒はおらず、それぞれ自分ができる最善の行動を取っていた。
カイはミリアたちにうなずくと、周りをにらみながら猛烈な速度で考える。

木々の向こうから矢を放ったのか……こんな学園の近くで？

追撃もない……不自然な襲撃だ。ようどう陽動か……？
カイは陽動の可能性も考え、深追いせずにその場で油断なく構えた。

「シエル！ ミリアと一緒に下がってくれ！」

「カイ……あれ……は？」

振り返ると、青ざめた顔のシエルが、街路樹の側を指差していた。カイは目を細める。

そこには何もない。誰もいない。だが――すぐに気がついた。

あれは……

ぶわあつとカイの髪の毛が逆立つ。

木の根の周囲の下草が――したくさ足の形に潰れている。

ミリアが叫んだ。

「まさか……透明化!？」

「うそっ!」「完璧な透明化じゃん!」「そんなのあり!？」

「どの系列の魔法なの!？」

□々に叫ぶ生徒たち。

そう、見えない敵が――そこにいる！

瞬間――

「そこかあああ！」

カイは街路樹の側まで移動していた。生徒たちが目を疑う。

予備動作なしに高速移動する暗黒騎士スキル――
シヤドウラッシュユ
「影走」である。

カイは一步踏み込むと、下段から斬り上げ、すかさず斬り下ろした。見ていたミアが目を剥く。その剣さばきの凄まじさに気づいたのは、ほんの数人だった。通常、二拍で出す剣撃を、カイは一拍で放ったのだ。その恐るべき剣速と練度。

カイは、先日の腐屍竜ドラゴンゾンビとの死闘をくぐり抜け、さらに強くなっていた。

しかし――

手応えがない！ ならば！

カイは辺りを薙なぎ払うように、豪快ごうかいに剣を振るう。チツと何かがかすった音がした。当たった！ その機を逃すカイではない。耳を澄すませ、気配を探り、見えない敵に対し、最短で、最速の刺突しとつ攻撃を――

「ひゅうう！」

――鋭い呼気すゐどとともに繰り出した。

何もない空間に、盛大な火花が散る。手応えあり！
しかし――カイにはわかっていた。これは防がれた感触。

カイは奥歯を噛^かみしめた。

いまの一連の剣撃を凌^{しの}ぐとは――敵は手練^{てだれ}だ！

カイは一瞬、シエルとミリアを振り返ると、ぐつと腰を落とす。

シエル王女がカイの意図に気づき、皆に向けて大声を上げた。

「カイが本気を出します！　みなさん、絶対に近づかないで！」

そう。本気でいかなければ――この敵は倒せない！

「^{アームズアルター}武装錬成――」

両手剣の刀身に指を添わせ、一気に滑^{すべ}らせる。

「来い――死^{デス}を招くもの！」

指を滑らせたところから、皮が剥けるようにして黒い刀身が現れ、カイの得物えものは見る間に無骨な両手剣に錬成れんせいされていった。

その剣の名は――死を招くまねもの。カイが錬成できる最強の両手剣である。

敵がどこにいるかわからない。だが、正面のどこかにいるはずだ――だから――

周りを囲めばいい！

カイはふうつと息を大きく吸うと、地面を強烈に蹴けり

――行けっ！

――分身ぶんしんした。

シャドウラッシュ

〈影走〉の合間に一瞬止まることで作り出す、ニンジ

ヤのスキルを真^ま似^ねた疑^ぎ似^じ分身である。敵がどこにいるかわからなくても、こうして囲むことはできる。

敵が身動^{ほんろう}ぎする気配――逃がすか！

相手を翻^{ほんろう}弄するため、さまざまなモーションで一^{いっ}斉^{せい}に剣を振るうカイ。じやりつと地面を踏む音が聞こえた瞬間――「見つけたぞ」――分身が消え、一つになる。

「……おい……いい加減に……」

何か声が聞こえたが、カイは躊躇^{ちゆうちよ}しなかった。踏み込む。握り込む。腕の筋肉が盛り上がり、黒い刀身が揺らめくと、かすれ、にじみ、やがて――見えなくなる。

その技――

「くらえええええええっ！」

超高速で、無数の剣撃を放つ暗黒剣技^{けんぎ}――〈無尽^{むじん}〉。
必殺の刃^{やいば}が、肉を斬り、骨を絶ち、すべてを斬り刻む――
―はずだったか――

「なに!？」

剣を高速で振るいながら目を剥いたのは、カイの方だった。すべての攻撃が――あらゆる方向からの剣撃が――弾かれる。

カイの豪剣^{ごうけん}を防いだのは、敵の周囲に無数に展開された、青く輝く魔法陣。それは――

「^{アンチ・マテリアルシエル}対物障壁^{アンチ・マテリアルシエル}」! 「なんて数だ!」 「あの精度で展開できるものなの!？」

周りで見ていた生徒たちが、□々に声を上げる。

アンチ・マテリアルシエル

スぺルキャスター

〈対物障壁〉

あつか

は魔術師が持つ基本的な物理防御手段で

あるが、扱いはかなり難しい。大きく展開すれば防御範囲は広がるが、その代わり防御力は低くなるからである。選択肢はおのずと、広く薄く守るか、狭く堅く守るかの二択となる。

しかし、カイの〈無尽〉は、一撃の強さと、攻撃範囲の広さの両方を併せ持っているのだ。

あわ

大きく展開すれば防御力が低くなり、威力ある一撃を防げない。

だが、小さく展開しても、広範囲の攻撃に対応できない。

ゆえに敵は、防御力を上げ、かつ広い範囲を守るため

—小さな^{アンチ・マテリアルシエル}へ対物障壁を、無数に展開することを選んだのである。

その瞬時の判断と、魔法構築の驚くべき精度。

カイは剣を振るいながら、奥歯を噛みしめた。

と……届かない！

次第に連撃^{れんげき}が鈍^{にぶ}り、腕が重くなり、足が震え出す。体

中の筋肉から酸素^{さんそ}が失われ、動かなくなっていく。へ無

尽の高速剣撃は、体内の酸素だけで放つ無酸素運動な

のだ。ゆえに長くは保^もたない。

くっ、ここまでか！

カイは最後の力を振り絞って背後へと大きく飛び、敵から距離を取った。大きく呼吸し、失われた酸素を素早

く取り入れる。荒い息を吐くと、額を大粒の汗が流れた。
強い……

高度な透明化魔法、正確な戦術判断、驚くべき魔法構築の技量――

敵は、カイがかつて出会ったことのない、超絶技巧を持つ^{スぺルキャスター}魔術師であつた。

――強敵だ！

周りの生徒たちが、次元の違う戦闘を目の当たりにして、静まり返っていた。

シエル王女が心配そうな表情でつぶやく。

「……せめて、相手の正確な位置がわかれば……」
しばしの静寂。^{せいじやく}そして――「ひゅっ！」――カイは鋭い

呼気とともに、一気に間合いを詰めた。敵は魔術師。攻撃魔法を使われたら近づけなくなる。相手が本格的に魔法を使う前に仕留めなければならない。

カイは、敵がいるであろう位置の手前まで来ると――「ふっ！」――剣を地面に立てて土を掘り起こし、盛大に砂を巻き上げた。辺りに薄く砂煙すなけむりが満ちる。

見ていたシエル王女が声を上げた。

「うまい！ 砂煙の中で相手が動けば――」
ミリアがシエルにうなずき、続ける。

「そうか！ 敵の位置が――わかる――！」
カイが砂煙の中に突進する。目の端はしの煙がふわりと動いた。

そこか！

ぎらりとカイの目が輝く。

たとえ、どれほど高い防御力を誇ろうと――

鋭く、踏み込む。

――それを圧倒的に上回る攻撃力を――

ぎりりと奥歯を噛みしめる。

――ぶつければいいだけだ！

カイは発動する。

剣を振りかぶりながら――スキルを発動する。

そのスキル――

己の生命力を使って、一撃の攻撃力を最大限に高める

そのスキルは――

「暗黒騎士スキル——
ブラッディソード
へ暗黒剣——」

カイの筋力が上がり、攻撃力が一気に高まった。

王国最高レベルの暗黒騎士が、己の生命力と引き換えに手に入れた最大攻撃力。

この一撃にすべてを掛ける！

その攻撃力を、最速で、最短で、一挙に、一直線に

I

[illegible]

—ぶつける。

なんの工夫もない、一直線の水平斬り。しかし、それ

こそが最善の太刀筋。たちすじ敵の退路ごと薙ぎ払う回避不能の

渾身こんしんの一振りである。だが敵は――

「ま、まさか！」「嘘うそでしょ!？」

シエルが、皆が、驚きの声を上げた。

大きな火花が飛び散り、辺りが眩まぶしくなる。

カイの剣筋を阻はばむように展開されたのは――五重の

アンチ・マテリアルシエル
〈対物障壁〉。

敵は術式を重ね掛けし、極小の〈障壁〉を、瞬時に五枚創り出したのである。

最強の盾たてが――五枚。

そして、カイ渾身の一撃は――
シエル王女が声を上げる。

「ああ……!」

――障壁を二枚破ったところで、阻まれていた。

「なんてこと……：障壁を五重にするなんて！」「あれは……：抜けない！」

シエルとミリアが悔し^{くや}そうに□にする。

だが――

カイは――愚直^{ぐちよく}なまでにまっすぐな暗黒騎士、カイ・ブラッディアは――

彼の□元が不敵^{ふてき}に上がった。

すべてを掛けると言ったら――すべてを掛けるのである。

そう。カイは再び発動する。振り抜きながら発動する。踏み込みながら発動する。

そのスキル――生命力を攻撃力に変換する暗黒騎士ス

キル――

その名は――

「^{ブラッディソード}暗黒剣」オオツ！」

「な――なにいいいいっ!？」

敵が初めて――驚きの声を上げた。カイの攻撃力が――
気に高まる。強大になる。膨れ上がる。

敵が術式を重ね掛けしたように、カイも決死の覚悟で、
スキルを重ね掛けしたのだ。

大きな火花が飛び散り、障壁と刃がぎりぎりと言を立
てる。

そして、青く輝く最強の盾が――

「く……く……くそおっ！」

三枚目の障壁が砕け――

四枚目が壊れ――

五枚目にカイの刃が喰い込み――ついに――

「うおりゃあああああああっ！」

最後の盾が――砕ける。

硬質な音を立て、障壁がガラスのように割れ、粉々こなこなになっ
ていく。カイが剣を振り抜いた瞬間――

「ぎゃっ！」

敵が吹っ飛び、学園を囲んでいる高い壁が大きな音を立てて崩れた。

一方、カイも苦しげにふらつき、思わず片膝かたひざをつく。スキルの使用で生命力をほとんど失ったからだ。青ざめ

た額には大粒の汗が浮かんでいた。

荒い呼吸をなんとか落ち着けると、ふらつきながら立ち上がる。

カイが警戒しながら敵に近づくと――

「……まったく、ムチャクチャしやがって……これだから物理攻撃職は嫌いなんだよ！」

「……な」

――瓦礫^{がれき}の辺りが歪^{ゆが}み、にじみ、次第に焦点が合うようにして、敵の姿が現れた。

透明化を解いて、姿を現したのは――

「……な……なぜ、下着姿なのだ……？」

けほけほと咳^{せき}き込み、体を起こしたのは――場違いに

もほどがある小柄こがらな女の子。なぜか服を着ておらず、下着が丸出しになっている。燃えるような赤い髪と、勝ち気そうに吊り上がった大きな目。頭あはになった白い肌はだを隠す素振そぶりも見せなかった。

女の子が、ぼそりとつぶやく。

「なぜ……だと……？」

顔を上げると、彼女は歯をむき出しにして、カイをにらみつけた。

「おまえがやったんだろぅが、このアホ暗黒騎士っ！

あの妙な剣技のせいで服が飛び散ったじゃないか！
くう……全部止められないとは……くやしいいつ！」

この子が――暗殺者………？

ぐぬぬと壮絶な顔でにらむ彼女を見て、カイは――改めて構える。

「しかし……半裸はんらの女子だからとて容赦ようしやせん！ 事情を聞かせてもらおうぞ！」

「……はあ？ なに言ってるんだ？」

矢が放たれたタイミングで透明化して潜んでいたのだ。この子が怪しいのは間違いなかった。

「問答もんどうむよう無用！」

カイが女の子を無力化するため、大剣を振り下ろそうとしたところで――

「おやめなさい、カイ・ブラッディア！ その人は暗殺者ではありません！」

「な！　――学長殿！」

びたりと剣を止めて振り向くと、校門のところにターニヤ学長が立っていた。騒ぎを見た生徒が学長を呼びに行っていたのだ。

「で……では、この子は？」

学長が彼女を見て、うなづく。

「彼女はヴィレッタ・パウリ。王立魔法院から派遣された――調査員です」

「……………え？」

カイは、胸を張ってえらそうな表情を見せた女の子に目をやり――

「えええええええっ!？」

大声を上げ、思わず後ずさりした。

「こ、この、半裸の女子が、調査員!？」

「半裸にしたのは――」

たたたたと走ってくると、彼女は――ヴィレッタ・パウリは――

「おまえだろうがあああっ！」

げほっ！

豪快な飛び蹴^げりをカイに食らわせると、見事な宙返りで着地した。

「……し……しかし、矢が――」

なおも口を開こうとするカイを見て、ヴィレッタは

「うるっさい！」

「っ！」

彼女が手を振った途端^{とたん}、声が出せなくなつた。呼吸はできるのに声が出ない。

学長やシエル、遠巻きに見ていた生徒たちも息を飲んだ。それは魔法の無詠唱^{むえいしょう}発動。相手の声を奪う魔法――サイレンス^{サイレンス}へ沈黙^{しんもく}を掛けたのである。

しかし、カイは諦め^{あきら}めない。なおも矢のことを問いただそうと、口をばくばくさせ、ジエスチャーで『矢を放つたのは、お前じゃないのか？』と尋ねようとするが――

「ええい、うっとおしい！　そこで固まってる！」

ヴィレッタが無造作に手を振ると――カイの足元が

凍りついた。カイも、皆も目を見開く。氷属性魔法――
フリージング
「氷結」である。

すたすたとカイの脇わきを通り、すれ違いざまにげしげし
とカイを蹴ると、ヴィレッタは学長とともに校舎へと
入っていった。

シエルとミリアが、うごうご言っているカイに近づき、
目を見合わせると――長いため息をつく。

シエルが気の毒そうに声を掛けた。

「あ……ありがとう、カイ。矢のことは……後で聞きま
しょう？ その……私を守ろうとしてくれたのは、もち
ろんありがたいし、嬉うれしかったのだけれど……」
言いにくそうなシエルに代わって、ミリアが引き継ぐ。

「半裸の女の子に本気で斬りかかったのは、ちよつと私でも――引いたわあ……」

「うごうごお！」

心なしが周りの生徒たちも、冷ややかな目でカイを見ていた。

半裸の女子にも容赦なく斬りかかる暗黒騎士――カイ・ブラッディア。

あまりよろしくない噂が学園中に広がるのに、そう時間がかからなかった。

一章 ヴイレッタが来た

「これがシエル王女？ ふうん……。で、こっちが、あ

あ、ソレルの」

ひともんちやく

校門での一悶着が済んだあと、学長室に集められたシエル王女とミリアは、着替え終わった女の子にじろじろと物色されていた。

「でー」

ぎろりと見上げる彼女を、カイも思わずにらみかえす。
「こいつが問題のカイ・ブラツディアか。……。おい、で

かいんだよ！ もっと縮こまれ！ オレさまの首が痛くなるだろ！」

カイは珍しく慄然とした表情で、片膝をついた。

「……これでいいか？」

「よしよし。なかなか素直じゃないか」

ペしペしと頭を叩かれ、カイは小さくうなる。シエルとミリアが、はらはらしながら二人を見ていた。

ターニヤ学長が困り顔でため息をつく、見かねて口を開く。

「ヴィレッタ・パウリ……そのくらいで」

「あ？ ああ、わかった、わかった」

彼女は離れ際に、カイのほっぺたをぎゅーっとつねる

と、ぎやははっと笑って学長の机に、飛び乗るように腰こし掛けた。学長が珍しく額ひたいの汗をぬぐう。

「さて……みなさんに改めて紹介しましょう。彼女は王立魔法院まほういんから来た調査員、ヴィレッタ・パウリです。透明化していたのは、この学園に目立たず着任するつもりだったからだそうですが――」

「おまえのせいで台無しだぞ、カイ！ お気に入りのもぼろぼろにしやがって……おまえの調査は念入りにするからな！ ひん剥むいてやるから覚悟かくごしとけ！」

学長の言葉を遮さへぎって、カイを怒鳴どなり散らす彼女こそ、王立魔法院はじまって以来の魔法の天才――ヴィレッタ・パウリである。魔法を志こころざす者で、彼女の名を知らない者

はいない。

ヴィレッタ・パウリ。十七歳。

小柄^{こがら}なこともあり、その年齢にしてはかなり幼く見えた。

シエル王女が思わず声を漏^もらす。

「あの魔法の天才が……私たちと同年代だっただなんて……」

「言っとくけど、オレさまの方が年上だかな！」

「……さきほどの……矢^やの件は……？」

カイがぼそりとつぶやくと、ヴィレッタは机から飛び降りて、盛大に舌打^{したう}ちした。

「さっきから、矢ー矢ーうるっさいな！　もうわかった

よ！ 矢だろ？」

ヴィレッタは、学長の机に置いてあつた矢を手に取り。抜かりなく回収していたのだ。

「矢じりに毒はなかつたぞ。材質は一般的で、矢羽^{やばね}だけちょっと特殊だな……しかしカイ、おまえ、どんだけ高速で斬^きってんだ？ 断面がきれいすぎて笑うわ！ げらげら！」

彼女が続ける。

「雑木林の方向から矢が飛んできたのは、オレさまもちらっと見たから間違いない。追撃もなかつたし、敵の目的は王女の殺害じゃないな……護衛の実力を確認したかつたとか、そんなとこだろ」

「……お前が射たのではないのだな？」

カイが尋ねると、ヴィレッタは――おもいきり目を剥いた。

「はあああ!? あたりまえだろっ！ どうしてオレさまが、こんな原始的な物理武器を使わなきゃならないんだよ!? オレさまならもっと、すごい魔法でトドメを刺してますー！」

ヴィレッタは、カイに顔を近づけ、歯をむき出しにしてにらむ。

「なんなら今ここで、オレさまの魔法がどれだけすごいか、お前の体で証明してやろうか？ んん？」

本人は凄^{すご}んでいるつもりだが、はた目には、かわいい

女の子が変顔をへんがおしているようにしか見えなかった。散々さんざん、
悪態あくたいをつかれたカイだった。が――

「そうか……疑ってすまなかった。服も吹き飛ばしてしまつて迷惑をかけたな。どうか許してほしい」

――そう言つて、素直すなおに頭をさげる。

「……う」

珍しい反応だったのか、ヴィレッタは小さくうなづてから、ふんつと荒い鼻息を吐いた。

「まあ……わかればいいんだよ……オレさまも鬼おにじゃないからな！ そうだ、カイを調べるついでに、その矢のことも調べておいてやるよ。オレさまがいる間に、王女になにかあるのも嫌だしな！ ――そういうわけだから、

ターニャン！」

勝手なあだ名で呼ばれて、ターニャ学長はかすかに嫌いやそうな顔をしながらうなずく。

「わかりました……。学園内では自由に動いてくださって構いません」

カイは改めてヴィレッタに頭を下げた。

「感謝する。ヴィレッタ・パウリ」

「ほんと……ありがとう。ヴィレッタさん」

シエルが言うのに、ミリアも口を開く。

「私にもなにかできることがあれば言ってくださいね。ヴィレッタ」

ヴィレッタはふんつと鼻息を荒くすると、ひよいと学

長の机に飛び乗った。そして、腰に手をやり、三人を見下ろす。世界のことはすべて知っているとでも言わんばかりの表情をしていた。

「まあ、任せておけ！ それと、オレさまは簡潔^{かんけつ}さを好む！ これから、オレさまのことは――」

にかりと歯を見せる。

「グイーと呼ぶがいい！」

* * *

グイーが学園に来てから数日後――

「おい、カイ！ あれは何だ！」

「ああ、あれは実技試験の準備だな。二年の先輩^{せんぱい}たちだろう」

「……ぐぐ、よく見えん……おい！ オレさまを持ち上げろ！」

廊下の窓際で騒いでいるのは、もちろん、魔法の天才ヴィレッタ・パウリである。カイをお供^{とも}に学園内を見学中のヴィーは、校庭で行われている実技試験を見たいというのだ。

カイは彼女の脇^{わき}に手を入れ、ふつと持ち上げる。その途端^{とたん}――

「ぎやははははっ！ このアホ！ 脇をくすぐるな！ 降ろせ！ きやははははは！」

大笑いして身をよじるヴィーを下ろすと、廊下を行き交う女子生徒たちがヴィレッタに手を振った。

「ヴィレッタちゃん！」「お菓子^{かし}あるよー、食べるー？」

「なんだおまえら、オレさまを気軽に呼ぶな！ ……で、どんなお菓子？」

あのあと、全校集会で生徒たちに紹介されたヴィレッタは、そのえらそうな態度^{たいど}と相反^{あいはん}する可愛^{かわい}らしさで、たちまち全校生徒の人気ものになっていた。

「んまい！」

ヴィーが焼き菓子を平らげると、すぐに別の女子たちが「ヴィレッタちゃん、はいこれ！」と飲み物を差し出

す。ヴィーはぺろりと□の周りを舐めると、「ん」と言
って、ガラス瓶^{びん}に入った透明な液体を飲み干した。その
途端――

「ぐおおおおっ！　なんだこれ！　しゅわしゅわするう
ううつ！　喉^{のど}が！　喉^{のど}がああっ！」

喉をかきむしるようにして大声を上げる。周りの生徒
たちが一斉^{いっせい}に声を上げた。

「あははは！」「もう可愛いすぎっ！」「なにこの可愛い
生き物！」「ふおおおお！」「ヴィレッタ殿、ばんざあ
ーっ！っ！」

ヴィーはげほげほと咳^{せき}込み、涙目になりながら、カイ
の腕に顔を押しつけ、□の周りを拭^ふく。

「うう……なんなんだ、これは」

「炭酸水たんさんすいだろう。……それより俺の服で□を拭くな」

「カイ！ おまえ、わかってて飲ませただろ！ この、しゅわしゅわするやつ！」

そう言っていると、ヴィーはもう一度、恐る恐る飲み物を□に含んだ。そして――

「ぎゃああああ！ しゅわしゅわするううっ！」

あはははは――またも一斉に周りの生徒たちが声を上げる。

ヴィーが□の周りをまたカイの腕で拭きながら、ガラス瓶に目をやった。

「んーむ。しかしこれは、けっこう癖くせになる味だな……

よし、今度、研究室で作ってみよ。ほんと外にはいろんなものがあるな！」

カイは、ヴィーをしばらく見下ろすと、気になつていたことを尋ねた。

「なあ、ヴィーはいつから魔法院にいるんだ？」

彼女は、空^{から}になつた瓶を女子生徒に放り投げると答えた。

「あ？ 生まれたときからずっとだ。オレさま、あそこで育つたからな！ あんまり外にも出たことないし！」

カイは驚いて、ヴィーに目をやる。

「ヴィーの両親は？」

「いないっていうか、知らん！ オレさま、拾われっ子

だから！」

「拾われっ子……そうなのか……」

おそらく両親に何かあつて、赤ん坊のころに魔法院に預けられたのだろう。ずっと魔法院で育ったとすれば、ヴィーがその年齢にしては幼く、世間^{せけん}知らずなものもうなずけた。

カイが小さくうなると、ヴィーはぎろりとカイを見上げる。

「おまえ……もしかして、オレさまが可哀想^{かわいそう}とか、不憫^{ふびん}とか思つたんじゃないだろうな？」

カイはすぐに首を振る。

「いや。ヴィーのご両親は、天才として育つたヴィーの

ことをきつと誇^{ほこ}りに思うだろう。俺が親なら間違いなく
そう思う」

ヴィーはしばらく驚いたような目でカイを見上げると、
ふんつと鼻から息を吐いた。心なし、彼女の表情が緩^{ゆる}む。
「なんだそれ？ 変な奴う！」

カイが納得したような表情でうなずいた。

「そうか……ヴィーはずっと魔法院にいたから——常識
にうといんだな」

「はああああ!？」

ヴィーが、思いきり心外そうな顔をして叫ぶ。

「おまえにだけは言われたくないよ！ オレさまのへ障
壁をスキル重ね掛けで破るようなムチャクチャな奴

が常識とか言うな！　ーおい！　ちよつとじつとしてろ！」

そしてー

廊下を歩いてきたミリアが立ち止まり、声を掛けた。

「……カイ、あんた何やってんの……？」

隣にいたシエルが眉^{まゆ}をひそめる。

「なぜ、ヴィーとー抱き合っているのかしら……？」

カイが苦々^{にがにが}しい表情で答えた。

「……言っておくが、これは抱き合っているわけではない。ーおい、ヴィー、登るな！」

二人に気づいたヴィーが口を開く。

「おう！　シエルとミリアか！　いまこつちやって……ん

しよ、んしよ……カイを登つてるところだ！　おいデカ物！　腕^{うで}を出せよ、登りにくいだろ！」

制服を引っ張り、カイの腕を足場にして、ヴィーはもぞもぞ動いていたが、やがてカイの肩^{かた}のところまで登りきると、頭を挟^{はさ}んで座り込んだ。いわゆる肩車^{かたぐるま}である。

「おお高い！　すっげー！　遠くまで見えるぞ！」
はしゃいで声を上げるヴィーと、珍しく不機嫌^{ふきげん}そうにうなるカイ。周りの生徒たちも、シエルやミリアも、なんとも言えない目でカイを見ていた。

ミリアがため息をつく。

「カイ、あんた、めちゃくちゃ目立ってるわ……恥^はずかしいから離れていい？」

シエル王女が続けた。

「また、よからぬ噂うわさが広まりそうね……」

二人が言うのに、カイはさらにうなる。

「仕方がないだろう。ヴィーの世話をするよう学長に言われているのだから……いて！　おい、耳を引っ張るな！」

「操縦そつじゆうだよ、操縦！　カイ、左に進め！　ぎやははははっ！」

ご機嫌でカイを操縦するヴィーに、カイは従いながらも尋ねた。

「なあヴィー、見学もいいが、俺の調査と、先日の襲撃の件はどうなってるんだ？　おまえ、仕事してるのか？」

ーいててっー！」

両耳を引っ張られて、カイは声を上げる。

「仕事してるかだって!? オレさまがただ遊んでるだけだと思ってるの!？」

「……違うのか?」「違うの? ヴィー」「カイで遊んでただけじゃん……」

三人に言われ、ヴィーはうーっとうなった。

「んなわけないだろおおっ! オレさま天才なのよ、天才! ーカイの件は、ここ数日で目撃者に改めて事情聞いてまーっす! ーそれと! シエルの方は、矢の素材を調べてんの! 矢軸やじく自体はどうってことなかったけど、矢羽はちよつと特殊だかな! あれはきつと出

どころがわかると思う！」

すらすらと言うヴィーに、三人は驚きに目を見開く。
さすがは天才。ここ数日、校内を見学しているだけだ
と思っていたが、やるべきことにはすでに着手していた
のだ。

カイはちらりと上を見て、うなづく。

「そうだったのか……すまん、ヴィー。俺は、おまえが
ただぶらぶらして、遊び呆^{ほう}けているだけだと思っていた
ぞ……」

「舐^なめてんのか、オレさまを！　ぶらぶらしてんのも意
味あるっつーの！」

そう言うのと、ヴィーはカイの耳にがぶうつと噛^かみつい

た。

「わかった！ わかったから噛みつくな！」

シエルとミリアが目を見合わせたあと、王女が口を開く。

「そうだったのね……私、学園を見学しにきたお上りさんみたいにしてたわ……」

ミリアがうなずきながら続けた。

「私も。カイをこきつかうのが楽しくなっちゃったのかなあ……。カイはいじりがあるから」

ヴィーが不機嫌そうな顔で口を開く。

「……おまえら、ほんとに、オレさまが天才だと思ってないだろ……？ ——まあいいや！ ——おーっし、今日は

カインち行くぞ！」

三人が目を見合わせた。カイが上を向いて尋ねる。

「……なんだって？」

「おまえんちに行くって言ってんだよ！ おまえのかーちゃんにオレさまが行くって言っとけ！ ごちそう用意すんだぞ？ ——今夜はオレさまの——」

ヴィーが満面まんめんの笑みを浮かべ、カイの背中で両腕を広げた。

「——歓迎会かんげいかいやるからな！」

三人はしばらく黙だまりこむと、渋しぶい表情でうーんとうなる。

皆の思いは同じだった。

歓迎会って……自分で言い出すもの……？

* * *

「でー」

ブラッディア家。カイの自室。

シエルとミリア、ヴィレッタと別れ、自宅に戻ったカイだったが一

部屋に入るなり、カイはベッドの上に目をやった。ぼりぼりとお菓子を食べ、口の周りを粉こなだらけにしているのは誰だろう一

「……なぜいる？ あとで来るんじゃないのか」

「あ？ オレさまは好きな時間に来るんだよ！ 自由なの！ なぜなら天才だから！」

ーついさきほど別れたばかりのヴィレッタである。

ヴィーは手で□の周りを拭くと、ベッドに大の字になり、くふふと笑った。

「おい、この家の対人結界強すぎて、ちよつとだけびびったぞ？ このオレさまが、二重の解錠かいじょう術式をぶん回さ

ないと解除できない結界って……あれ、おまえのかーちやんの仕業か？ 何者だよ！ オレさまが部屋に入るな

り、にこにこしながらお菓子持ってきたぞ？」

「窓から入ってきたのか……？ 普通に玄関げんかんから入れ

よ」

カイがジャケットを脱ぎ、椅子^{いす}に掛けながら続ける。

「それで？ 歓迎会の主役だから早く来たのか？」

「はあああああっ!? んなわけねーだろおおおっ！」

突然、枕^{まくら}をぶん投げて大声を上げるヴィーを見て、カイはむうとうなつた。

「……なぜキレる？」

「オレさまは忙しいんだよ！ 一分一秒を争う感じなの！ ああもう！ 大声出したらちよつと疲れちゃった……もう寝よ……明日も早いし。おやすみー、ぐう……」

毛布をかぶるヴィーに目をやったあと、カイが構わずベストを脱ぎ、シャツを着替えようとすると――

「起こせよおおおおっ！」

がばつと起き上がったヴィーに驚いたカイは、目を細めて彼女を見る。

「……なぜそんな小芝居こしばいをする？」

「う……うるさいんだよ！　その……あれだ！　友だちのいない哀れなおまえとちよつと遊んでやろうと思っただけ！　……はあ、もう寝よ……おやすみ……」

ぐうとまた毛布をかぶったヴィーを見て、カイはため息をついた。彼女は薄目うすめで、カイの様子をちらちらとうかがっている。カイはベッドに近づくと、毛布越しにヴィーの体を揺すった。

「お、おい、ヴィー！」

寝たらダメだ！

寝たら死ぬ

ぞ！　起きろ、ヴィー！」

がばつと毛布をはねのけたヴィーは、目を輝かせて、満面の笑みを浮かべていた。

「死ぬわけねーだろっ！　ここは冬山か！　遭難中か!?
そうなん

ぎやはははははは！」

げほげほと、笑いすぎて咳き込みながら、ヴィーはベツドの上で転げ回る。

「ぎやははは！　いてっ、いてて！　笑いすぎて……お腹_{なか}

いたい……あはははは！」

しばらくして落ち着いたヴィーは、「あーわらった……一年分くらいわらった……」と涙目で言うところ、はあはあ息を荒げたまま、ベツドの端_{はし}にちよこんと腰掛_{こし}けた。

きれいな髪の毛がぼさぼさになり、服も乱れ放題になっている。

「あ……ヴィー。もしかして、俺の調査に来たのか？」
「なんだ、やっとわかったのか……そうだよ！ 早めに来ておまえの診察しようと思ったの！ おまえも、自分の力のこと知りたいだろ？」

「そうか……小芝居までさせて悪かったな……」

「小芝居は関係ないんだよ！」

カイはヴィーの前にしゃがみこみ、彼女を見上げる。

「それで、俺はどうすればいい？」

「そだな。とりあえず――服を脱げ！」

そのころ一階では――

「これは、シエルファール王女！ お初にお目にかかります。カイの母ノーチエです。書状では御礼申し上げました。が、改めて息子の学園入学へのご助力、ありがとうございます。ございました。――それにしてもなんとお綺麗きれな……お召めし物もとてもよくお似合にあいですわ。さあ、どうぞ中へ」緊張した面持ちのシエルは、こほんと咳払いすると、腰を折り、淑女しゅくじょの礼を見せた。

「初めまして。シエルファール・クランニアステリオです。今夜はヴィレッタの歓迎会ということで、お屋敷やしきにお邪魔じやまさせていたいただきました」

シエルは上品な白いワンピースを身にまとっていた。

今夜は、家族を交えた^{まじ}気軽な歓迎会であり、あまりに華美^{かび}なもののかえって先方に気を使わせることになる――そう考えたシエルは、アクセサリも控えめにし、王族としては質素^{しつそ}な、しかし上質な装いを選択したのだ。

あくまでも上品に、それでいて可愛らしく――

シエル^{こんしん}渾身のベストチョイスである。

銀色^{ぎん}の髪は、珍^{めづ}しくアップにして頭の後ろでまとめ

いた。彼女の肌の色によく合う桃色^{もも}真珠^{しんじゆ}のネックレスは、北方^{ほっほう}でしか取れない逸品^{いつぴん}中の逸品である。

カイの母にお褒^ほめの言葉をもらい、彼女は心の中でガツポーズを取った。

うふふ、勝ったわ！

何に勝ったのかは不明だったが、彼女は心の中で勝利宣言をしつつ、静かに屋敷に足を踏み入れる――

そして二階では――

カイの傷だらけの体を見て、ヴィーは驚きに声を上げた。

「なんだこりゃ！ これぜんぶ自然治癒ちゆの跡あとか！ すげーな……神聖治癒魔法が効かないってのはほんとだったのか……。でも神聖魔法は使えるんだろ？」

ヴィーはカイに近づき、面白そうに、ぺたぺたと傷跡を触る。

「ああ。以前は詠唱えいしょうしたただけで気絶してたんだが……最

近は前よりは楽に使えるようになってきた」

「へえ……面白いじゃん」

ヴィーはそう言うのと、じつとカイの体を見つめた。幼い表情が消え、魔法の研究者としての真剣しんけんな顔がのぞく。あまりにじつと見つめてくるヴィーに、カイは体を引きつつ尋ねた。

「なにか見えるのか？」

「あ？ ああ、オレさま——賢者セージだから」

「……え？」

カイが珍しく大きく目を見開く。

「えええええっ！ 賢者セージ!? ヴィーは賢者セージなのか!?

賢者セージってあれだろう？ すべての属性の魔法を使えると

いうー」

「ええい動くな！ そーだよ！ オレさま賢者^{セージ}なの！
賢者^{セージ}を見るの初めてか？ ……ま、そりやそうか……世
界に数人しかいないスーパースーリアジヨブだしな！」

王立魔法院が誇る魔法の天才、ヴィレッタ・パウリ。
彼女は数世紀に一人しか適性を持つ者がいないという
超レアジヨブ「<.9賢者^{セージ}である。

あらゆる属性の魔法を使いこなすほか、対象の性質を
見極めることができる受動^{パッシブ}スキルや、数々の固有スキル
を身につけていた。

「□だけじゃなかったんだな……」

「……おまえ、ほんとにオレさまのこと舐めてるだ

ろ？」

彼女は一度毒づく、スキルを使つてカイの体内を探つていく。

「知つてると思うけど、体の中には、魔法力を循環じゅんかんさせる魔力経路つてのがあるわけ。例えるなら血液を運ぶ血管みたいなもんだな。——カイの場合、暗黒力の魔力経路は自然にできてたんだけど、神聖力の経路が使われてなくて、閉じたままになってたんだよ。——その閉じたところに、ぎゅーつて無理やり神聖力を流そうとしたから、痛みとか気絶とかの症状が起こつてたってわけ。ここまでわかった？」

カイはヴィーの説明にうなずいた。

「なるほど……。じゃあ、俺が最近、神聖魔法をすこしは使えるようになったのは、一度、強引に神聖力を流して、経路を開いたからか……」

「そーゆーこと。ーでもだからって、腐屍竜戦^{ドラゴンジンビ}で見せたような力が使えるわけがない。だから他に理由があるはずなんだけどーなんか心当たりのないのか、カイ？」

カイが思い出したように答える。

「そーいえば戦鬪の最中に、シエルやみんなから、^{アブソーブ}〈吸収〉を使つて、生命力をもらい受けたな……」

ヴィーが、むーっと考える顔になった。

「にやるほど……。んとな、生命力には、神聖力つてよく混ざるんよ。だから生命力と一緒に、すんごい勢いで

神聖力を吸い込めば、経路はさらにきれいに開くだろうな。……でも、そのことと、カイの力はどう関係するんだ……？　むー……」

彼女はあごに指を当てしばし考える。その表情は真剣そのもので、幼さはまるで感じられなかった。

「おーっし、^{ジャッジメント}〈鑑定〉使ってみつかー！」

「^{ジャッジメント}〈鑑定〉？　なんだそれは？」

ヴィーが息を吐きながら、すでに集中するそぶりを見せる。

「人とか物とかの、秘密の性質ってゆーか、正体ってーの？　そういうの見極める、オレさまの固有スキルよー！」
「……ほんとにすごいんだな、ヴィーは……」

「オレさま天才だって言ったる！　―おっしや黙れ、カイ。発動するぞ」

彼女は目を閉じると、詠唱した。

「―我が眼に宿れ真実の光―^{ジャッジメント}〈鑑定〉！」

ヴィーがゆつくり目を開くと、その瞳に赤く光る魔法陣が浮かんでいた。真実を見極める探索魔法陣〈真眼^{しんがん}〉である。彼女はその眼をもつて、カイの魔力経路を探つていく。

「うみゆう……やっぱり、神聖力の魔力経路は細っこいわりにはきれいに開いてるな……んで、これを辿ると

……ん……暗黒力の魔力経路が見えてきたぞ。その先は

―あ……？　えっ！　なんだこりや、交わってる!?

ウソだろ！」

「なんだ？ 珍しいことなのか？」

カイの問いに、ヴィーが大声を上げた。

「こんなんフツーありえんわ！ 神聖力と暗黒力っていののは相反する属性力だろ？ だから、経路が交わるな

んておかしいんだよ！ —うわ、神聖力の細っこい経

路に、暗黒力の太い経路が絡まってるぞ！ ……ん？

…あ…：…そうか！ こんな特殊な魔力経路してるから、カイには神聖魔法がダメージになるんだ！」

カイが驚いて尋ねる。

「なに！ ということだ？」

ヴィーがすぐに説明した。

「神聖魔法で治療したりするときは、神聖力の経路に魔力を注ぐことになるだろ？　だけど、カイの場合、暗黒力の経路が邪魔して神聖力が逆流しちゃうんだよ。それがダメージを引き起こしてたってわけ！」

カイが、自身の神聖属性アレルギーの秘密を知り、目を見開く。

「そ……そうだったのか……さすがは賢者^{セージ}だ！」

ヴィーが興味深い研究対象に興奮しながら、さらにカイの経路を探った。

「くふふ、面白くなってきたぜ！　この先、どうなつたんだ？　……うみゆう……二つの経路がらせん状になつて、絡^{から}まって……それから……ん……？　えー！　ーお

わああああっ！」

びくんっとヴィーの小さな体が大きく跳ね、彼女は目を見開く。

「ど、どうした!? ヴィー！」

「こ、これやべえ！ 魔法力が……吸われる！ うぐぐう！ ス……スキルを――強制解除おおっ！」

ばたりと勢いよくヴィーが倒れ、カイはすかさず彼女を支えた。

「ヴィー！」

体を大きく震わせ、苦しそうになるヴィー。カイに抱きつくのと、苦痛に耐えているのか、力いっぱい背中に爪を立てた。

「いててててっ！　グイー、大丈夫なのか！」
顔を歪ゆがませ、荒い息を吐いていたグイーは、しばらくしてようやく落ち着き、はあはあ言いながら、カイの胸に体を預ける。

「びびびびった……経路の先がーすんげー深い闇み
たくなつてて……ジャッジメントへ鑑定で同調しすぎた……なんかご
っそり魔法力うばわれたぞ……」

カイは、グイーの額に浮かんだ汗を拭き、彼女の震える体を支えた。

グイーは辛そうな顔をしながらも体を起こし、カイの胸元をにらむ。

「ど、どうということだ……？」　ー待てよ……考えにく

いことだけど……おまえの神聖力と暗黒力の経路って、
先の方で一つになってるんじゃないか？　だから、か
なりの深さまで神聖力を流すと、暗黒力と一緒になっ
両方が勢いを増し合う、みたいな……？　―あり得る
……ということは、腐屍竜戦ドラゴンズンビでおまえが見せた力は、お
まえ一人で起こしたって言うより―」

ヴィーがカイを見上げる。

「―おまえに神聖力を与えた奴が―鍵かぎを握ってる
……？」

「鍵を……握って……」

「―なにを握るって？」

突然の声に、カイが窓の方に目を向けると、そこにい

たのは――

「なんだ、ミリアか。お前、また窓から」

窓をがらりと開けて入ってきたのはカイの幼なじみ、
聖騎士の中の聖騎士ミリア・ソレルである。ベッドの上
には、上半身裸のカイと、はあはあ荒い息で頬を上気さ
せたヴィー。はた目には抱き合っているように見える二
人に目をやり、彼女は一度、あはつと笑うと――

――腰のレイピアを抜刀した。
ばつと

「……おい、落ち着け。なぜいきなり抜刀する？」
ミリアは目を丸く見開き、カイにレイピアの繊細な刃
せんさい
を向ける。
やいば

「……カイ……あんだ……ヴィーに何したの……？」

「勘^{かん}違いするな！　これは診察だ。なあ、ヴィー？」
ヴィーは急激に魔法力を奪われた影響で、ふらつき、
カイの胸にこてんと倒れた。

「うう……吸われすぎた……」

ミリアの髪の毛が――ぶわあつと逆立つ。彼女の猫の
ような目が、きゅうと吊^つり上がった。

「ああそう！　お医者さんごっごってわけ！　――カイ
……あんたはああああっ！」

「おい、ミリア！　話を聞け！」

彼女はレイピアを垂直に構えると――詠唱する。

「――穢^{けが}れなき我が刃に顕^{けんげん}現するは神なる輝き――」

ミリアのレイピアが、白く輝いた。

「魔法剣――〈光輪^{ハイロウ}〉！」

一方、一階では――

「あの、お母さま。私のことは、どうぞ気軽にシエルと呼んでください。それに――王女としてではなく、カイの級友として接してもらえると、とても嬉しいです」
シエルが言うと、カイの母ノーチエは、んーつと顎^{あご}に指を当てた。

「そう？　じゃあ、いつそのこと、シエルちゃん――つて呼んでもいいかしら？　私は準備があるから、その間、カイの部屋で待っててもらえる？　二階の奥だから」

「え！　カ、カイの部屋で!？」

カイの母、ノーチエにそう言われ、しばらく迷ったのち、シエルは――

「わ、わかりました、お母さま！ 行ってまいります！」

――決死の覚悟かくごでうなずく。

ノーチエは王女に微笑ほほえむと、台所だいどころに戻っていった。

リビングに一人残されたシエル王女は、数回深呼吸すると、部屋を出て階段に足を掛ける。

男の人の部屋に入るなんて……初めての経験だわ……
どうしよう……でも――

彼女はキツと顔を上げた。

がんばれ、私！

シエルは、さながら迷宮に入る冒険者のように、唇くちびるを

引き締め、体を硬くし、どくどくと脈打つ心臓しんぞうの鼓動を感じながら、階段を登っていく――

そして二階では――

「おい！ 部屋で魔法剣を使うなと言っただろ！」

魔法剣へ光輪ヘイロウ――邪悪なる者を退ける強力な神光をまとった魔法剣である。暗黒属性であるカイには、めっぽう効果があつた。

「カイ！ せめて一撃で終わらせてあげる！」

「殺す気か！」

そのとき――

「うるっさいなあ！ またゲス聖騎士パラディンが来てんでしょ！

「……って、えええええっ!？」

がちやりと部屋の扉を開けたのは、黒髪ツインテールのカイの妹、天才死ネクロマンサー霊術師クロエ・ブラッディアである。彼女は扉を開けたまま、口をあんどぐり開いて、上半身裸のカイと、なぜか兄と抱き合っている、ぐったりした女の子に目を向けた。

「誰!? ……っていうか、お兄、その子と何してんの!？」
ミリアが、クロエに目をやり、悲しそうに首を振る。

「クロエ……残念だけどカイは……その子とお医者さんごっこを――」

「お……お医者さんごっこ……うそ……お兄……」
クロエが目を見開き、思わず後ずさりした。

「私たちでカイを止めてあげるしかないわ……。クロエ、
ゴースト〈低級霊〉で足止めして！」

クロエの顔が、悲しみに沈んだあと――転、
げきど激怒の表情に変わった。

「お兄のーバカあああああっ！ 来いー
ドラウンド〈溺死霊〉！」

ぬうと床から現れたのは、びしょ濡れの長い髪を持つ、
青白い死霊。

「クロエ！ よりにもよって ドラウンド〈溺死霊〉を出すな！ 掃
除が大変なんだぞ！」

涙目でカイをにらんだクロエは、意を決したように兄
を指差した。

「〈溺死^{ドラウンド}霊〉——〈死^{デッド}の抱擁^{ハグ}〉！」

抱きついた者の周囲に水を作り出し溺死^{できし}させる、
〈溺死^{ドラウンド}霊〉の固有スキルである。

「追い詰めるわよ、クロエー！」「うるさい！ わかつて
る！」

カイがヴィーを抱えて立ちすくむなか、息の合った
連携^{れんけい}バトルに突入する二人——

そのときである。

「カイ、どうしたの!? 開けるわよ！」
扉を開けて入ってきたのは誰だろう——

「あれ？ シエルじゃないの！」

「なにその可愛い格好！」

ミリアとクロエが一旦手を止め、彼女に目を向ける。

―神聖アステリア王国第四王女、シエルファークランリアステリオであつた。

「な、なんだ……二人もいたんだ……そう……ま、まあいいわ。それで？ 歓迎会なのに何を騒いで―え？」

シエルは上半身裸のカイを見て、カイに抱きついてい
るヴィーを見て―魔法剣を構え、死霊を召喚しょうかんした殺やる
気まんまんの二人を見て―

「えつと―ええええええつ!? これ、どういう状況
!？」

そこで―ふらついたヴィーが倒れこみ、カイのスラ
ックスをつかむと―

ずるうつ。

グイーがそのまま倒れると、カイのスラックスが脱げ
—正面からそれを見たシエル王女は—

目を見開き、息をのみ、顔を手で覆^{おお}うと—「き」—

沈黙。そして—

「きゃあああああああああああっ！」

盛大な悲鳴を上げた。「あらら……」「お、お兄！」「
リアがにやにやし、クロエが指の間からちらちら覗^{のぞ}き、
シエル王女が卒倒^{そつとう}する。

カイはすかさずシエルに駆け寄った。

「シ、シエル！　大丈夫か！」

「#—\$%&*#ッ！」

シエル王女がわけのわからない悲鳴を上げた瞬間――

「なにやってるの……カイイイイイッ！」

「……え？」

カイが見上げる先にいたのは誰だろう――カイの母、ノーチエ・ブラツディアである。

手にお玉を持った彼女は、悪鬼あつきのごとき表情でカイを見下ろしていた。まさに、きついしつけをする前の母の顔である。

「女の子にいい！　なんてもの見せてるのとおおおっ！」

「い、いや！　母さん！　これは！」

「問答無用！」

ノーチエが、杖がわりにお玉を振り下ろす。瞬間――

「ぐううううううっ！」

カイがべちゃりと床に這はいつくばると、みしみしと床が鳴り、やがて床が抜け、カイは――

「ぎゃあああああっ！」

――階のリビングに落ちていった。

これは、グラビティフオール上級黒魔道士の持つ広域攻撃魔法――
〈重力崩落〉である。

この魔法を、このように一点に集中させるのは非常に難しいのだ。

* * *

「カイ。あんたがちゃんと言わないから、こういうことになるのよ？」

ミリアが言うのに、クロエもうんうんうなずいた。

「ほんと、ほんと！　ぜんぶお兄が悪いんだから！」

カイは、母の料理をほおばりながら、むうとうなる。

「だから話を聞けと言っただろ……」

いろいろな誤解がとけ、カイの家族や王女も揃そろったところで、ようやくヴィレッタ・パウリの歓迎会が始まった。

シエルが、やや気まずそうにしながらも、カイに話しかける。

「カイ、さつき二階から落ちたの……大丈夫だった？
怪我^{けが}してない？」

「ん？ ああ。体のあちこちは痛い^{問題}ない。それより……悪かったな……」

「……えっと……それはもう……ね？ カイ」

目を逸^そらしたシエルと、なんとも言えない顔のクロエ。
ミリアが二人をにやにやしながら見ていた。そこで――

「なんだ？ オレさまがふらついてる間に、なんか面白いことがあつたのか？ ―おい！ 教えろよ、カイ！」

大声を上げたのは、この歓迎会の主賓^{しゅひん}――傍若無人^{ぼうじやくぶじん}な

魔法の天才、ヴィレッタ・パウリである。椅子に立ち上がり、隣のカイを見下ろしている。賢者^{セージ}だとわかって皆

がたいそう驚くので、いい気分になっていた。

「食事中に立ち上がるなよ、ヴィー。あとで教えてやるから」

「あ？ 絶対だぞ！ —それにしても、おまえのかーちゃんの料理、うまいな！」

ヴィーは口の周りをべたべたにしながら、ノーチエの手料理を存分に味わっていた。ノーチエがサラダを取り分けながら、うふふと笑う。

「たくさん食べてね、ヴィーちゃん」

「おうよ！ オレさま、こーゆーの初めてだ！」

「こういうのというと、こういう料理のことか？」

カイが尋ねると、ヴィーは首を振った。

「料理もそうだけど、オレさま、いつも一人だから！
歓迎会っていうのは言葉としては知ってたけど、こ
うものだったんだな」

皆が、ヴィーに目をやる。カイが続けた。

「魔法院に、友だちとか仲間はいないのか？」

「は？ いるわけねーだろ。誰もオレさまについてこれ
ないからな！ 天才はいつも孤独なんだ！」

「そういうものなのか？」

「そーゆーものなの！ 別に仲間とかいらねーし！」

食卓にしばしの沈黙が流れたが、カイの母が雰^{ふん}囲^い気を

変えるように、気さくに王女に話し掛ける。

「シエルちゃんは食べてる？ お口に合うかしら？」

シエル王女が、王国では珍しい魚料理に口をつけ、顔をほころばせた。

「ん……おいしい！ 私、こつこつという料理、初めてですー！」

カイの母ノーチエは料理上手で、王国特産の肉料理から、^{へんきょう}辺境の郷土料理^{きょうど}まで、さまざまなレパートリーを誇っている。王族がこのような庶民^{しよみん}の料理を口にすることは滅多^{めった}にないのだ。

ミリアがうなずき、口を開く。

「でしょ？ おばさまの料理は最高よー毒さえ入ってなければね」

カイの父アツシユが目を細め、ヴィレッタを見た。

「それにしても、魔法の天才ヴィレッタ・パウリが、こ

れほど若い女の子だつたとは……」

「くひひひ！　驚いた？　ーカイのとーちゃんがめっちゃ

くちや強いのもわかるよ！」

「ほう……賢者^{セージ}のスキルか」

ヴィーは続いてノーチエを見て、□を開いた。

「カイのかーちゃんもすげーな！　さっきの

^{グラビティフォール}

〈重力崩落〉、精度調整してんだろ？　術式を二重にし

て最後に誤差^{ごさ}修正しないと、あの精度にはならないもん

な！」

ノーチエが甘みをつけた炭酸水^{たんさんすい}をヴィーのコップに注

ぎ、微笑^{ほほえ}む。

「あら、よくわかったわねー。ヴィーちゃんすごいわ

ー！」

「まあな、オレさま天才だから！ ……それにひきかえ

カイはー」

ヴィーは隣となりのカイを、哀あわれなものを見るような表情で見た。

「よわよわだのー、オレさまの〈障壁〉破るだけで精せい一杯いっぱいなんだから……。あー先が思いやられるわー」

「よけいな世話だ。ーん……。クロエ、どうした？
頬にソースをつけて……。」

ずっとむつつりとしていたクロエが、ヴィーに目をやり、ふんつと鼻から息を吐く。いつもなら、子ども扱あつかいする兄に反発する彼女だったが、いまはカイに頬を拭か

せて、勝ち誇ったような表情を浮かべている。

ヴィーがじとりとクロエを見て、口を開いた。

「あ？ 誰だおまえ？」

「……え？ あ、ごつめーん。小さすぎて目に入らなかつたー。ー私はクロエ。お兄の！ 妹！ なんですけど？ あー、お兄がいつも私の世話焼きすぎて困るわー、ほんと困るわあー」

クロエは、ヴィーにちらりと視線を送りつつ、兄に頼む。

「お兄、それ取って」

「目の前にも同じ料理があるだろう？」

「そっちがいいの！」

「わかった、わかった」

カイがクロエに料理を取り分けると、ヴィーが珍しく、むっとした表情になった。自分でもどうしてそうなったのか、わからないような顔をしている。

「お、おい、カイ！ オレさまにもその料理をよこせー！」
ヴィーが料理を指差すと、クロエがひょいとその皿を持ち上げ、ヴィーに差し出す。

「はいどうぞ。……なまえ、なんだっけ？ ヴィレ……チビれった？ ぷっ！」

「ちがーう！ オレさまはカイに頼んでるのー！」

「食事中に立ち上がるなよ、ヴィー」

また椅子に立ち上がったヴィーを、カイが注意すると、

彼女はうう……と歯をむき出しにしてうなり、おもむろにカイの腕に顔を押し当て口の周りを拭いた。

「ちよつと！ お兄になにやってんの！ このチビれつた！」

クロエが声を上げると、ヴィーは一層むきになつて、顔をこすりつける。

そんな二人を見て、ノーチエが微笑み、ヴィーに話しかけた。

「ヴィーちゃん、そんなにカイのことが気に入ったの？
じゃあいつそのこと——うちの子になる？」

「お母さん！」

クロエが母に噛みつくと、ヴィーが顔を上げる。

無然^{ぶぜん}

とした表情で答えた。

「……そいつと入れ替わりなら、なつてやつてもいい」

「私を里子^{さとこ}に出すつもり!？」

鋭く^{すねど}言い放つクロエに、シエル王女がぷつと吹き出し、

やがて――

あははははは――

釣られるようにして皆が笑いあった。

夕食後、皆はリビングに場所を移し、食後のデザートを楽しみながらくつろいだ。

カイが天井を見上げ、感心したようにうなる。

「それにしても、よく直せたな。ヴィー」

さきほど抜けた天井は、何ごとともなかつたように見事に修復されていた。

「まあな。オレさま、あんまり〈レストア復元〉うまくないけ

ど」

賢者セージの持つ〈レストア復元〉は、局所的に因果いんがを逆転させ、物体の修復などを行う時間干涉系魔法である。ヴィーは簡単に言ったが、それがどれほど高度な魔法なのかは、力イの母ノーチエが珍しく驚きの表情を見せたことでもわかった。

ヴィーの口数が徐々に少なくなる。お腹もいつぱいになつて、眠くなつてきたのだろう。

「……ねむい……もう、だめだ……」

こてんとカイの膝に倒れると、ヴィーはすぐに寝息を立て始めた。クロエが嫌な顔をしてヴィーを覗^{のぞ}き込んだが――あまりに無防備な寝顔を見て、ため息をつくとき、彼女に毛布を掛けてあげた。クロエの方がよほどお姉さんである。

一息ついた皆はさまざまな話題に興^{きよう}じ、楽しい時間は瞬^{またた}く間に過ぎていった。そして夜も更^ふけてきたころ、歓迎会はお開きとなった。

「カイ、ここまでで平気よ。ありがとう。今日は楽しかったわ」

シエル王女を馬車まで送り届けたカイは、周囲を見回して口を開く。

「屋敷まで送らなくて本当に大丈夫か？　もちろん護衛

の方々がいるのはわかってているが……」

彼女は微笑みながら首を振った。

「大丈夫よ。カイは心配性ね。……でも、いつも心配してくれてありがとう」

心地良い夜風が吹き、シエル王女は髪の毛を押さえる。淡い月明かりが彼女を照らし、銀色の髪が美しく輝いた。カイは珍しく、じつと彼女を見つめる。

「……なに？」

「いや。制服じゃないシエルは新鮮しんせんだと思っしんてな。その

髪型も、実によく似合っている」

シエルの表情がふわあつと緩ゆるみ、こぼれるような笑顔

になつた。それはまるで花がほころぶようである。

「あら、珍しい。カイが服や髪を褒めるなんて……気づかないんじゃないかと思ってたわ」

「気がつかないわけがないだろう？ 俺はいつも――シ

「エルを見ているのだから」

彼女がふと息を飲んだ。守るべき対象として目を配っているのだとしても――

「……もう……そういって……ろが……ずるいのよ……」

二人の距離が自然に縮まる。シエルが、恥はずかしそうにカイを見上げた。そして――

「……あのね……カイ……」

「なんだ？」

シエル王女はーじとりとカイの背中に目をやる。

「……どうしてヴィーを背負っているのかしら？」

カイがむうとうなった。カイの背中には、眠りこけたまま、ひしつとしがみついているヴィーの姿があつた。カイは長いため息をつく。

「仕方がないだろう……しがみついて離れないのだから」

「もう、雰囲気が出たわ……。まあいいですけどー！」
シエルは怒った振りをしてみせると、ふふつと微笑み、馬車に乗り込んだ。

「じゃあおやすみなさい、カイ。ヴィーを落とさないようにね」

「わかった。シエルも気をつけてな」

馬車の窓を開け、手を振るシエル王女。

こうして主賓のヴィーが眠りこけたまま、歓迎会は幕を閉じたのだった。

二章 それぞれの挑戦

カイが自室で目を覚ますと、ベッドには妹のクロエと
ヴィレッタが寝ていた。

「……そういえばヴィーはうちに泊まったのだったな
……」

あれからヴィーはどうやっても目を覚まさず、カイは
仕方なく一緒に寝ることにしたのだ。クロエがいつベッ
ドに入ってきたかはわからなかった。

カイは、腕うでに抱きつくように寝ているクロエとヴィレ

ツタから慎重^{しんちよう}に腕を引き抜くと、二人に毛布を掛け、起き上がる。今日は休日なので、二人を起こす必要はなかった。

日課の走り込みを終えると、カイは屋敷^{やしき}の裏手にある稽古場^{けいこば}へと向かった。

途中の水場で一口だけ水を飲み、稽古用の木刀^{ぼくとう}を手に取り取る。

稽古場の中央で、木刀を正眼^{せいがん}に構えたカイは、ふうと息を吐いた。

集中、そして――鋭い袈裟斬^{けさざ}り。すかさず踏み込んで逆に斬り上げ、次に大きく横に薙ぎ^な払う。体をふっと引くと、今度は目の覚めるような突きを連続で繰り出した。

滑らかな技の連携と、空間を斬り裂かんばかりの剣撃。
優雅な剣舞ではない。一振り一振りがすべて必殺の一
撃である。

気が済むまで一通りの型をやり終えると、カイは木刀
を置き、今度は魔法の練習に取り掛かった。

神聖魔法——それが聖騎士への道に立ちふさがる大き
な壁である。

目を閉じ、集中する。息を整え、体内に神聖力を循環
させていく。

「く……ぐぐ……くく……」

額に汗が浮かび、苦痛に顔がんだ。極度の暗黒体
質であるカイにとって、神聖力はまさに異物そのもの、

体は強烈な拒否反応を示すのである。

カイは一度歯を食いしばると意を決して――詠唱^{えいしょう}した。

「光……うう……慈愛^{じあい}……ともがら……ぐぐ……御心

……守護……くく――」

震えながら言い終えると、両腕をかかげる。そして

「神聖魔法――〈祝福^{ブレス}〉――！」

宣言すると、その体勢のまま、カイはしばらく待った。じりじりと時間が過ぎていく。五秒、十秒。カイが目を閉じ、唇^{くちびる}を噛^かみ締めたころ――

ふわっとカイの体が緑色の光に包まれた。その瞬間

「ぐく！」

カイは苦痛に思わず声を上げる。

これは、防御力を数ポイント上げるだけの超基本的な神聖魔法――^{ブレス}祝福。

カイの詠唱の遅さは、術式発動までの遅れとして現れていた。そしてなにより、この神聖魔法でカイの防御力は上がらない。神聖治療魔法ほどではないにせよ、単にダメージを負うだけであつた。

神聖魔法はそれほどに、カイと相性が悪いのである。額の汗をぬぐったカイは、荒い息を整えた。

「……よし……あと九十九回……」

休日の修練として、カイは己に百回の^{ブレス}祝福を課し

ていた。次の詠唱に入ろうと顔を上げると――

「おい……朝っぱらから無様な魔法を見せんなよ！」

カイの目の前に立っていたのは、魔法の天才ヴィレッツ・パウリであつた。

「起きたのか、ヴィー。――無様なのはわかつているが……練習する以外ないだろう？」

ヴィーはカイに目をやると、呆れた^{あき}ような顔を見せる。

「おまえなあ……そんなことあと九十九回もやるつもりか？ まったくの無駄^{むだ}だぞ！」

大声を上げるヴィーを見て、カイは小さくうなつた。

「そう……なのか？ しかし、それならどうすればいい？
^{パラディン}聖騎士になるには神聖魔法が必要だろう？」

それを聞いて、今度はヴィーがうなる。

「うみゆう……ターーヤんから聞いたけど、おまえ、
ロイヤルパラディン王宮聖騎士になりたいんだって？ ああ……さすが

のオレさまでも引くわ……むぼーすぎるだろ。この前も
言っただけど、おまえの魔力経路って特殊なんよ。神聖魔
法を覚えるのはムリだと思うぞ？ 早めに諦めれば？」
あきら

すぐにカイは首を振った。

「いや、それはできない」

ヴィーはなぜかムキになつて声を上げる。

「なんでだよ！ カイはあんこくきし暗黒騎士としちやほぼ王国最高

峰だろ!? それでいいじゃんか！ オレさまの〈障壁〉
破れる奴なんて、そうはいないんだぞ！」

カイはまた首を振った。

「いや……まだだ。まだ足りない。俺はシエルを守る――
振りの剣となるため、もっと強くなる必要がある。それ
に――」

カイはヴィーを静かに見つめる。

「俺は知りたいんだ。――最強とは何かを知りたい」
ヴィーが息をのみ、その目が見開かれていった。

なぜなら、彼女も同じだからである。

ヴィーも知りたいのだ。知りたいだけなのだ。

彼女は、魔法の真髓しんずいを――この世界の真実を――知
りた
い。

ヴィーは、静かに見つめてくるカイを見上げ、珍しく

ため息をついた。

彼女にはわかっていた。あの固く閉じていたはずの神聖魔力経路を開くのに、カイがどれほどの苦痛を味わったのかを。骨と肉の間に熱した鉄串てつくしを通されたような、想像を絶する痛みだったはずなのだ。それなのに――
ヴィーは、カイを見上げる。

――カイはその先に、さらに進もうとしている。
ヴィレッタはもう一度ため息をつく、珍しく――ほんとうに珍しく――考えた。自分のことではなく、他人のことを考えた。

魔法院でずっと一人だったヴィーは、他人のことを考えるのが苦手なのである。

それでもーヴィーは単なる研究対象だった、この
無謀な暗黒騎士^{あんこくきし}のことを考えた。カイがどうすれば
ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士になれるのか、どうすればもっと強くなれる
かをー

そしてーうみゆうとうなると□を開く。

「あのな、カイ。もう一度言うぞ？ 神聖魔法はやめと
け。お前にはームリだ」

「それでは王宮聖騎士^{ロイヤルパラデイン}になれないだろう！ 俺はー！」
ヴィーは、大声を上げるカイの足を蹴^けった。

「黙って聞け！ このデカ物！ いいか？ 聖騎士^{パラデイン}とー
番相性がいいのはもちろん神聖魔法だ。でもなー別系
列の魔法でも代用できるんだよ！」

カイが驚きの表情で尋ねる。^{たず}

「なに？ 別系列？ そんな魔法があるのか……？」

「ああ。聖騎士^{パラディン}を目指すような奴らは、そもそも神聖魔力経路が開いてるから、神聖魔法以外を選ばないだけなんだ！」

「その魔法とは……？」

「それは――」

カイが聞くと、ヴィーは不敵^{ふてき}に□元を上げた。

「光属性魔法だ！ 光属性には治癒魔法がないし、支援系も少ないけど、神聖魔法を覚えるよりはずっと可能性があるぞ？ ――いいか、カイ。聖騎士^{パラディン}になりたいなら、もっと強くなりたいなら、おまえが覚えるべき魔法系列

は――光属性。そして、身につけるべきスキルは――」

ヴィレッタが大きな声を上げた。

「光！ 属性！ まほうけん魔法剣だ！」

「ひ、光属性……魔法剣……」

カイが目を見開き、息をのむ。 ロイヤルパラデイン王宮聖騎士への狭き道 せま

に、別の可能性が開けたのだ。

カイは、ヴィレッタ・パウリに、目の前にいる魔法の

天才に、まっすぐに向き合い、そして―― ふかぶか深々と頭を下

げた。

「ヴィレッタ。頼む。俺に――魔法を教えてくれ」

ヴィーの口元が、自然にゆるむ。

カイは取引を持ちかけない。条件を出さない。ただ

すなお
素直に頼んだ。

いままで何人もが破格はかくの条件を出し、ヴィーの弟子でしにして欲しいと頼んできた。王族や貴族からの頼みもあつたが、ヴィーはいつも断つてきた。

ヴィーが欲しいのは、富や地位や名誉などではもちろんない。

彼女はただ、面白いことが好きなのだ。面白い奴が好きなのだ。きただけなのだ。

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士になりたい変てこな暗黒騎士——カイ・ブラッディア。

カイは、ヴィーの眼鏡めがねにかなう——超絶、変な奴なのである。

彼女は腰こしに手をあて、仁王立におうだちになつた。

「おーっし、わかつた！」

カイが顔を上げた。

王国最強の暗黒騎士と、王立魔法まほういん院が誇る天才ほこが、しばし見つめあう。

ヴィレッタ・パウリが口を開いた。

「いいだろう。オレさまを師匠ししょうと呼ぶなら——」
賢者セージがにかりと笑う。

「おまえに——魔法を教えてやる！」

翌朝。屋敷裏手の稽古場――

「ぐううううううっ！」

カイは地面に這^はいつくばり、歯を食いしばっていた。震える体を起こしながら、荒い息を吐く。裸の上半身は汗にまみれ、強烈な熱を帯びていた。体の内側から、ぎりぎり^ぎと肉をこじ開けられるような痛み^{ゆが}に、カイは顔を歪める。

ヴィーによる魔法特訓のはじまりである。

彼女の特訓は、その可愛らしい容姿からは想像できないくらい厳しいものだっ^た。

「おい、起きろ！ 魔力経路を開かない限り、魔法は教えられないんだよ！」

「……くく……わかつて……いる！ やってくれ、グイ
ー！」

グイーがカイの背中に手を当て、ぐっと押し込む。彼女の手ひらが輝いた。

「^{マーター}へ受難^{ター}！」

その途端^{とたん}――

「ぎゃああああああっ！」

カイが苦悶^{くもん}の声を上げた。

「^{マーター}へ受難^{ター}」は、白魔法系列の魔力供給魔法である。通常

は、仲間に魔法力を分け与えるために使うものだが、グイーは、カイに光属性の魔法力を注ぎ込むことで、短期間で魔力経路を開こうとしているのだ。手っ取り早いだが、

経路を強引に開くことになるため、激痛を伴う方法である。

グイーは鼻からふんつと息を吐くと、カイを見下ろした。

「あ？ オレさまのことは、師匠と呼ぶように言っただぞ！」

「そ……そうだった……師匠！」

「おーっし。じゃあ、もう一回！」

「ぐわあああああっ！」

再び、グイーが魔力を注入すると、カイはたまらず膝ひざ

をつき、地面に倒れた。全身を震わせ、土に爪を立てる。喉のどの奥から絞り出すようなうなり声を上げた。

ヴィーが、カイの体をぺたぺたと触り、ため息をつく。

「……あのなあ、カイ。おまえは、体も心もぎゅーっと固くしすぎなんだよ。魔力に抵抗すればするほど痛くなるの！ そんな単純なこと、なんでわかんないかなあ……」

カイは荒い息を吐きながら、顔を起こした。ヴィーが続ける。

「おまえはあれだろ？ いままでずっと剣の修行して、修練積んで、自分を追い込んで、がんばって、がんばって、がんばってきたんだろ？」

「……そうだ……俺は剣にすべてを掛けて生きてきた——」

「だ・か・ら、ダメなんだよ！」

カイは思わず眉根まゆねを寄せた。

「どういう意味だ？」

「どーゆーって、そのままの意味だよ！ おまえはがんばることがいいことだと思ってんだろーけどーがんばっちゃうダメなの！ おまえは息を吸うとき、がんばってるか？ がんばってねーんだよ！ がんばって吸おうとすればするほど息は入ってこないの！ わかる？」

がんばらない……がんばってはいけない……？

ますますわからなくなつて、カイは首をひねる。

ヴィーは、不ふ甲が斐いない弟子を見下ろして、うみゆうと

うなつた。

「いいか？ オレさまが見たところ、おまえは魔法について三つのカンチガイをしてる！」

三本の指をうまく出せずに、ぷるぷる指を震わせながら、ヴィーは続ける。

「一つ！ がんばりゃいいと思ってる！ ―がんばっちゃダメなの！ 革かわの水袋をぎゅーつと力いっぱい押さえてたら水が入るわけないだろ？ 布巾ふきんを固く絞ったら水を吸い込むわけないだろ？ ゆるつとしなきや入らないんだよ！」

カイは水袋や布巾を想像して、その意味がようやくわかってきた。

「そ……そうか……俺は体や心を固くして―逆に、魔

力を押し出そうとしていた……」

「そーゆーこと！ 次、二つめ！」

ヴィーが続いて、声を上げる。

「おまえはー魔法を否定してるー！」

カイがいぶかしげな表情で、師匠を見上げた。

「いや……それはないと思うがー」

「あ・り・ま・す！ ありまくりですううう！ おまえ

は心のどこかで、魔法で戦うことをずるいと思ってる！

剣だけで、自分の力だけで戦うことが正しいと思っ

るの！」

「……そんなことは……ない……はずー」

ヴィーが歯をむき出しにして、カイに顔を寄せた。可

愛らしい変顔である。

「ありますからあああ！　おまえは自分ひとりで戦うことがすばらしーって思ってるんだよ！　自分以外の力を信用してない！　だから精霊の力も、心のどこかで拒否してんの！　くれるって言ってるのに無視してんだよ！　それで魔法が使えるわけないじゃん！」

カイは思わず目を見開いた。ヴィーの指摘が、ずぼし凶星だったからである。

そ……そうか……

俺はまだ、一人で戦おうとしている……己の剣のみで戦うことが、ドラゴンゾンビ至上のものだと考えているんだ……一人で絶対には――腐屍竜には勝てなかったというのに――

カイは悔しさに、唇を噛み締めた。

俺は……なんて未熟なんだ……

「……グイー、いや、師匠の言うとおりだ……俺は一人で戦うことに、剣のみで戦うことに、まだこだわっている……」

彼女はふんつと鼻から息を吐く。

「よーやくわかったか。それじゃ精霊の力は受け取れないんだよ！　次、三つめ！」

カイがうなずき、グイーの次の言葉を待った。

「おまえは――魔力を少ないものだと思ってる！」

カイがまばたきし、首をひねる。

「……確かに、俺の魔力は少ないが……」

「ちがーう！ おまえはそもそも、魔力を希少なきしょうものだと考えてるんだよ！ 自分にもないし、この世界にもそれほどないって思ってる。違うか？」

カイがうむとうなずいた。

「そのとおりじゃないか。魔力は希少なものだろう？」

「それがまちがいなんですうううっ！」

変顔をして迫るヴィーを、カイは眉根を寄せて見上げる。ヴィーが得意顔で続けた。

「よく聞けよ、カイ。魔力は——無限にある！」

「む、無限に……？」

「そうだ！ 空気は無限にあるだろ？ 光も無限にあるだろ？ それと同じように——」

ヴィーは目を閉じて、両腕を広げる。彼女の体がぼんやりと輝いた。

「魔力も――無限にある――」

カイが目を見開く。ヴィーの周囲に、とてつもない力が漂^{ただよ}っているのを感じたからだ。

それはヴィーが集めたものというより、すでに、最初からそこにあつたように思えた。

「カイ。おまえは魔法を使うとき、必死こいて魔力を集めてるだろ？」

「ああ、そうだ……」

ヴィーは、目を閉じたまま続ける。

「その考えはぜんぶ捨てる。まったく逆だぞ！　いくら

でもあるものを、がんばって集めようとするな！ 湯水^{ゆみず}

のようにじゃぶじゃぶ使っていていーんだよ！ そーゆー意識にならないとー魔法は使えないー！」

カイは思わず息をのみ、若き賢者^{セージ}を見上げた。

「覚えておけ。オレさまの中に、カイの中に、魔力があるんじゃないー」

ヴィーが目を開ける。

「無限の魔力の中にーオレさまたちがいるんだ。世界は、そうなってる！」

「な……」

魔力の中に俺たちがいる……！

世界がひっくり返る感覚に、カイは目まいを覚えた。

魔法に関すること、魔力のこと——いままでの常識が、すべて間違っていたことに気づかされたのである。

これがヴィレッタ・パウリー魔法の真実を知る者——天才の名は、伊^だ達^てではないのだ。

しばらくして、カイは大きく息をつき、再びヴィーに尋ねた。

「しかし——では結局、俺はどうすればいい？ がんばらないというのは、俺にとって、かなり難しいぞ……」
ヴィーは、にかりと笑って答えた。

「笑え！」

「……笑え……？」

「そーだ！ 笑え！ 笑えば力も抜ける！ 笑いながら

がんばれないだろ？　しかめっ面^{つら}して一人でがんばってんじゃねーよ！　ーおら！　カイ、寝っ転がって笑え！」

カイは言われるままーふう……ー詰めていた息を吐き、大の字になつて地面に転がった。空は高く、心地のいい風が吹き、草の青い匂^{にお}いが鼻をかすめる。鳥の鳴き声がしていることに、カイは、そのとき初めて気がついた。

ヴィーも、どさりとカイの横に寝転がる。

「どうだ、カイ。世界はけっこー、いいところだろ？　とつとと笑え！　あははははは！」

カイは、大笑いするヴィーの横顔を、ちらりと見た。

長く息を吐き、カイは思う。

これがヴィーの
見ている世界……
魔力に満ちあふれた
豊かな世界……
がんばって一人で
どうにかするのでは
なく、誰かに、そし
て巨大な何かに、す
べてを委ねる世界

――

カイはふと笑った。

そうか……この意識が、魔法のコツ……

「ふ……ふふ……は……は……は……は……は——」

「お？ よーやく笑ったな、カイ！ くくつ！ くはは

は！

あはははははははははは――

二人は稽古場で大の字になって笑いあう。これが魔法の特訓だとは誰も思わないだろう。ひとしきり笑いあったあと――

「――と油断させて、いきなり〈受難^{マーター}〉！」

「ぎゃああああああつ！」

ヴィーが魔力を注入すると、カイは痛みに背中をのけぞらせ、大声を上げた。体をぶるぶる震わせて、顔を歪める。

そんなカイを見て、ヴィーはため息をつき、実に残念そうな顔をした。

「……おまえ、オレさまの言ったこと、ぜんぜんわかつ

てないだろ……？」

カイが振り返り、咳き込みながら口を開いた。

「……いきなりすぎるんだよ……」

* * *

「――っわけで、オレさま、カイの師匠になったから！

あー、弟子のできが悪くて困るわー、ほんと辛いわー」

「グイー、椅子の上に立つなーいてっ！」

カイの頭を叩くと、グイーは目をむいた。

「オレさまのことは、師匠と呼べと言ったろ？ ああ

ん？」

「わかった、わかった……椅子から降りろ、師匠」

「ん、よかろー。降りるぞ」

ここは神聖職訓練校^{ホーリーエキスパート}。北校舎の学生食堂。

カイたちは、揃^{そろ}って昼食をとっていた。

シエル王女に加え、ソレル家のミリア、魔法院のヴィレッタまでいるため、カイたちはすさまじく目立っていた。周りの生徒たちが遠巻きにカイたちを見ている。ヴィーが椅子に立ち上がって大声を上げたため、さらに注目を浴びてしまっていた。

そしてもう一人――

「……で？ おまえはなんでここにいるんだ？」

ヴィーが尋ねると、この学食でただ一人の黒い制服の少女が、じろりとヴィーをにらむ。

ツインテールの黒髪を肩の後ろに回すとー彼女が口を開いた。

「学食は、どちらの学校の生徒が来てもいいのよ？ 知らなかったの？ チビれった」

「ふうん……ところでおまえ、名前なんだっけ？ ココリ？」

「クロエよ！ わざとらしいわね！」

ダークエクストラ

暗黒職専門校の特待生、クロエ・ブラツディアである。

ネクロマンサー

彼女は天才死霊術師として名前が知れ渡っており、その愛くるしい容姿でファンも多かった。

ミリアが、カイとヴィーの二人を見て、口を開く。

「クロエに聞いたけど、朝から稽古場で大笑いしてるんだって？　どんな訓練なのよ……ねえ、シエル」

ミリアが呆れ顔で言うのと、シエルは――

「ふーん……そうなんだ……へー」

明らかに不機嫌ふきげんそうに口にした。彼女には珍しいことである。

ミリアが、カイに目で「なんとかしなさいよ」と合図を送った。カイは咳払いをすると、シエルに恐る恐る話しかける。

「あー、シエル。また俺が何かしてしまっただろうか？」
「別にいい」

「もしかして……ヴィーがうちに泊まっていることを怒っているのか？」

「違いまーす。怒ってませーん」

カイはミリア、クロエと目を合わせ、途方^{とほう}にくれた。
なんで不機嫌になっているのか、わからない。

そうこうしているうちに、シエルは手早く食事を済ませると、立ち上がった。

「ごめんなさい。学長に呼ばれているものだから、お先に失礼するわ。ごゆっくり」
「よし。俺もついていこう」

カイが立ち上がりがけると、シエルはやっぱりと手で制した。

「大丈夫だから。カイたちはゆっくり食べていて。じゃあ午後の授業で」

シエル王女はふとヴィーに目をやり、複雑そうな表情を浮かべると、学食を出て行く。その後姿を見て、カイはむうとうなり、尋ねた。

「……どうのことだ？」

ミリアとクロエが目を見合わせ、ため息をつく。

「わかんないの、カイ？　ほんと鈍いわね……」

「あのねえ、お兄。チビれったのせいに決まってるでしょ？」

カイが首をひねった。

「ヴィーのせい？　どういう意味だ？」

「あ？ オレさまがどうしたって？」

ミリアがもう一度ため息をつく。

「元々、カイに魔法を教えていたのはシエルでしょう？」

それを相談もなく、ヴィーに乗り換えられたら不機嫌になつて当然じゃない。私だつたら斬り刻んでるわ。

「もちろんシエルは、魔法を教えるならヴィーの方がいいつてわかつてるだろうけど……そう割り切れるものじゃないでしょう。そういうこと考えてあげた？」

カイはハッと気づいたように目を見開き、しばらくして深く息を吐いた。

「そうか……俺はまた、自分が強くなることだけを考えた……」

「あ？ どーゆーこと？」

ヴィーの問いに、ミリアが諭すように言う。

「そうね……たとえば、カイが急に『やっぱりコロリに魔法を教えてもらう！』って言い出したら、ヴィーはど
う思う？」

「コロリって誰よ！」

クロエのツツコミを完全に無視して、ヴィーはうみゆ
うとうなっただ。

「むー。なんだそりゃーって思うな！ ム力つく！ コ
ロリうぜえ！」

「コロリじゃないから！」

カイは二人のにらみ合いを眺めながら、深いため息を

つく。ミリアが見かねて声を掛けた。

「別にシエルだって、本気で怒ってるわけじゃないわ。あとでちゃんと謝っておくことね」

カイは、ミリアにうなづく。

「そうだな……わかった」

一方、シエル王女は――

彼女にしては珍しく、小さいため息をつきながら、廊下を歩いていた。

ひっきりなしに挨拶あいさつしてくる生徒たちに、薄く笑みを

浮かべ、返礼する。まるで初めてこの学園に来たときのような義務的な対応だった。

ああ……嫌な性格してるな……私って……

彼女は、学食での自分を思い出し、眉根を寄せて顔を伏^ふせる。

ヴィーは魔法の天才だもの。カイが強くなるためには、ヴィーに教わった方がいい……そんなことわかってるはずなのに……

彼女はまたため息をついた。

私ってけっこう……独占欲が強いのかな……やだな……

私……どうしたいんだろう……？

廊下を歩きながら、シエルは考える。

ミリアはカイの幼なじみで、鉄壁の防御スキルを持つ

聖騎士……。二人はお互いのことをよく知ってる。戦場

で、カイが一番頼りにするのはミリアだわ。

クロエは天才死霊術師……。カイに匹敵するほどの攻撃
力を持つ攻撃役アタッカーの要かなめ。

ヴィーは賢者……。魔法の天才。魔法に関して、彼女の
右に出る者はいない……。

じゃあ――

シエルは立ち止まり、窓の外に目をやった。

――私は？

私には、なにができるの……？　カイにとって、私つ
てなに？

彼女はぼんやりと校庭を見る。

私は、カイやみんなに守ってもらうだけの存在なの……？

このまま、暗殺者の影に怯おびえて暮らしていくの……？
そんなのは――

唇を噛んだ。

――いやだ。

そのとき――

「シエル王女……いえ、シエルさん？」

ハッとして彼女が振り返ると、目の前に、笑みを浮かべた男子生徒が立っていた。襟章えりしやうから見て三年の先輩せんぱいで

ある。彼の後ろには、二人の生徒の姿が見えた。

シエルはまばたきして、三人に目をやる。

「ごめんなさい、ぼんやりして……。なにかご用ですか？」

三人が顔を見合わせ、くすりと笑った。シエルは首をかしげる。

「なにか……？」

男子生徒が首を振った。

「いや、申し訳ない。王女でもぼんやりされることがあるのかと思ったものですから……申し遅れました、僕は三年のキース・クルーゼ。この学校の生徒会長を務めています」

シエルは、入学式のために学長から彼を紹介されたことを思い出し、うなずく。

「ああ、クルーゼ家の。一度お会いしましたね。ごぶさ
たしています」

思い出してくれたことが嬉^{うれ}しかったのか、彼は満面^{まんめん}の
笑みを浮かべた。

フルーゼは神聖系でもかなり上位の家名である。著名
な聖騎士^{パラディン}を何人も排出^{はいしゅつ}していた。この学校の生徒会長
になれるということは、家柄^{いえがら}はもちろん、成績も優秀で、
実技も相当の腕前だと知れた。

「それで……私にご用でしょうか？」

シエルが問うと、キースはうやうやしく手を差し出す。
「ええ、シエルさん。不躰^{ぶしつけ}は承知していますが、よろし
ければ――」

彼が微笑んだ。

「生徒会に入りませんか？」

* * *

翌日の放課後。ブラツディア家――

歓迎会以来、ヴィーはブラツディア家に寝泊まりしており、皆は放課後になると、なんとなくカイの家に集まるようになっていた。

みんなが集まった機会に、シエルから話があるという。その話というのは――

「生徒会に入りたい？ ……シエル、理由を聞いてもい

いか？」

カイが尋ねると、彼女は一つ息を吐き、静かに口を開いた。

「誰かが私の命を狙^{ねら}っているというのに、わがままを言つてごめんなさい……。みんながいてくれて本当に心強いし、心から感謝しています―」

シエルが顔を上げ、皆を見回す。

「でも、だからといって、怯えて暮らすのは違うと思うの。……。いいえ、私が、そう生きたくない。こんなときだからこそ、私は、前に進みたいと思ってる」

彼女の真剣^{しんけん}なまなざしに、皆は静かに続きを待った。

「キース会長に生徒会に誘われたとき、最初は私も断る

うと思ったわ。そんなことをしている場合じゃないと思ったし、周りの人にまた迷惑を掛けてしまいかもしれないから……でもー思い直したのよ。だって、これじゃ、暗殺者の影に怯えて生きているだけだから。最初から、私、負けてるって思ったの」

ミリアがうなずくと、シエルは小さく笑んで続ける。「私は暗殺者なんかには負けたくない。小さな一歩かもしれないけれど、新しいことに挑戦してみたいの」
彼女は皆を見回し、うかがうように尋ねた。

「ダメ……かな……？」

ミリアがすぐに賛同し、シエルの手に、自分の手を重ねた。

「ううん、私はいいと思う。シエルはちゃんと学生した方がいいわ」

シエルは、泣きそうな笑みを見せた。

「ありがとう、ミリア」

そこへヴィーが割って入った。

「あ？　せーと会ってなんだ？」

ヴィーが問うと、隣で、ヴィーが騒がないよう見張っていたクロエが答える。

「学生の面倒をみる集まりみたいなものよ。わかった？　チビれった」

「じゃあ、コロリは入れないな！　おまえは面倒掛ける方だし、ぎやははっ！」

「しつこい！　―あ、生徒会に入るのは、私も賛成。

屋敷と学校の往復だけじゃ、息も詰まるしね」

クロエが、ヴィーの口をふさぎながら答えた。そして

―

「カイは……どう思う？」

シエルが聞くのに、カイは一度大きく息を吸うと、長く吐いた。

「俺は……シエルがそんな風に考えているとは知らなかった……。シエルを守ることや強くなることに頭がいっぱいで、もしかして俺は、シエルの自由を奪っていたのかもしれない――わかってあげられなくてすまなかつた……」

頭を下げるカイに、シエルは慌あわてて手を振る。

「そんなことない！ カイは私のことを最優先で考えてくれているわ。いつもありがとう、カイ」

カイはシエルにうなずくと、ミリアやクロエに目をやった。

「うむ……学園の方がむしろ守りやすいかもしれないな……。俺は放課後、ヴィーと校庭で修行することにする。ミリアはどうする？」

「私は、そうね……学園の中でシエルを待つことにするわ」

カイがうなずき、クロエに目をやる。

「そうか、頼む。ークロエは、シエルを死しりょう霊で守って

やってくれ」

「りょーかい」

てきばきと、自分を守る算段をつけていく皆を見て、シエルは胸元を押さえる。

みんなには隠しごとをしたくない。ちゃんと打ち明けておこう……

彼女は、深く息を吸い込むと――

「あのね……もう一つ、みんなに聞いて欲しいことがあるのだけれど」

――自分の出生の秘密を話すことにした。

自分が婚こん外がい子しであること。母親が誰かわからないこと。それなのに継けい承いし権しょうけんを持っていること。王宮で陰口をささ

やかれていたこと――

話し終わると、ミリアが、静かにシエルの肩を抱いた。
「そうだったんだ……辛^{つら}かったね、シエル」
シエル王女が静かに答える。

「……いままで黙っていて、ごめんなさい……」
ミリアが首を振り、二人は肩を寄せあった。
クロエがぶんぶん怒りながら、声を上げる。

「ということは、シエルを襲っているのは王族関係者かもしれないってこと!? ひっどい！ 信じらんない！」
シエル王女が、クロエにうなずくと、また皆を見回した。

「この際だから、みんなに言っておくわ。もし、私が王

位継承権を持つているために狙われているのだとしたら——」

静かな、しかし決意を秘めた声でシエルは言う。

「——私は、継承権利を放棄^{ほうき}することも考^{だい}えてる」
皆が思わず息をのんだ。シエルは大胆^{だいたん}にも、そこまで考^{だい}えていたのだ。

「もちろん、それが可能かどうかはわからない。それに仮に継承権がなくても、私は王族には違いないから王家から離れることはできないわ——でも、もし継承権を放棄できれば、王家と少しは距離を置いて生きていけるかもしれない……」

シエルは顔を上げた。

「だから、私はすこしでも学んでおきたいの。王家から離れたとしても、一人で生きていくだけの力が欲しい……私は――強くなりたい」

皆が静かになる。彼女の決意に、その勇氣に、圧倒されたからである。

しばらくして、ミリアが口を開いた。

「そこまで考えていたのね。シエルは……うん……ほん
とすごいな」

カイも一つ息を吐き、深くうなずく。

「ミリアの言うとおりだ。見事な覚悟かくごだと思う。俺も見
習わねばな……」

皆は目を見合わせると、うなずきあう。カイが口を開

いた。

「生徒会で、新しいことを学べるといいな」

カイが言うのと、ミリアも――

「ほんと！ 応援してる」

そしてクロエが――

「なにかあつたら手伝うから！」

最後にヴィーが――

「……んが？ おわった？ シエルの話、むずかしーん

だよ……」

よだれを拭きながら目を覚ましたヴィーを見て、シエ

ルがむ――っとうなつたあと――我慢できずにぷつと吹き

出した。その拍子に――

あはははははは――

――皆も釣られて笑う。ひとしきり笑ったあと、シエル王女はみんなにうなずいた。

「みんな、ありがとう。私、挑戦してみるね！」

* * *

一週間ほど経った放課後。校庭――

「ぐぐ……くくく――」

歯を食いしばり、体を震わせ、体内の魔法力を循環させようと必死になっているカイを――

「あほおおおおおっ！」

「ぐはっ！」

ヴィーは豪快ごうかいに飛び蹴りして、中断させた。校庭に這いつくばるカイを見下ろし、ふんつと鼻から息を吐く。

「またか、カイ！　がんばるなっって言ってるだろ！　力を抜け！」

カイは額の汗をぬぐい、体を起こす。荒い息を吐きながら答えた。

「……コツが……搦つかめない……」

ヴィーは不出来な弟子を見て、ため息をつく。

「うみゆう……よーやく細っこい魔力経路が開いたって
いうのに、これじゃーなあ……」

カイは、新しいことに挑戦するというシエルに刺激さ

れ、毎朝の魔力注入訓練を増やし、ついに光属性の魔力経路を開くことに成功した。

それはまだか細かい経路ではあったが、ひとまず魔法を習得できる段階に至ったということである。しかし――

「むー……これ以上、簡単な光魔法はないんだぞ？」

もつとも初歩的な魔法すら、カイには使えなかった。ヴィーは、校庭に出してきた椅子にどすんと腰掛け、ふんぞり返る。

「おまえに教えてるのは、魔力をほとんど使わない超基本的な光魔法だ。おまえの魔力経路は開いたばかりだから、放出系の魔法はまだムリなんだよ。と――ぜん攻撃魔法はぜんぶムリ。ここまでわかってるな？」

カイは額の汗をぬぐいながら、ああ、とうなずいた。

「だ・か・ら、オレさまが教える魔法はただ一つ！ その魔法は？　せーの！」

「へ^{プリズム}偏光」

カイの返答に、今度はヴィーがうなずいた。

「そう！　へ^{プリズム}偏光」は光を曲げる魔法だ。ってゆーか、

光を曲げることしかできん！」

カイが続ける。

「神聖魔法で言うところのへ^{ブレス}祝福」と同じ基本魔法だなー」

「わかったような□を聞くなあああっ！」

突然大声を上げ、立ち上がったヴィーを、カイは驚き

の表情で見上げた。

「……なぜキレたんだ？」

ヴィーは鼻から息をふんつと吐き、ポンコツな弟子を見下ろす。

「同じ基本魔法でも〈祝福^{ブレス}〉と〈偏光^{プリズム}〉は全然ちがうの！　いいか、カイ。〈偏光^{プリズム}〉を完全^{とほう}に自分のものにしてみる。それだけでおまえは――途方もなく強くなれる！」

「そう……なのか……？」

ヴィーの言葉に首をひねりながらも、カイはまた、集中し、魔法力を循環させはじめる。

しばらくして、ヴィーが尋ねた。

「……なあ、カイ。ちよつと聞きたいんだけど……」

「なんだ？ 俺はいま忙しいんだが」

ヴィーは珍しく、言いにくそうに続ける。

「あー……オレさま、もしかして……シエルに悪いことした……？」

カイは驚いて顔を上げた。こんなしおらしいヴィーは初めてである。

「どうしたんだヴィー。変なものでも食べたのか？」

「食べてねーよ！ ーで……どーなんだ？」

カイが一つ息をついて答えた。

「……この魔法練習のことだろう？ それは、俺がシエルにひと言いわなかつたのが悪かつたんだ。ヴィーは悪

くない。だから、心配するな」

ヴィーが困ったような複雑な表情で、大きな声を上げた。

「し、心配なんかしてないんだよ！ 天才は心配しないの！ —ただ……ミリアが言ってたみたいに、その……気にいつてる奴を誰かに横取りされたら、やっぱり嫌かなって……」

カイはしばらくヴィーを見つめる。そして—

「大丈夫。ヴィーはいい奴だ。シエルもそれをわかつてる。だから大丈夫だ」

ヴィーがあんぐり口を開けたあと、大声を上げた。

「はあああああっ!? なんだそれ！ なにが大丈夫だ！

おまえの大丈夫はまったく信用でぎん！　ーま、い
ーや……おい！　さぼってないで練習を続ける！　この
ポンコツ！」

ヴィーが□元をもぞもぞさせながらも、むーつと
仏頂面ぶつちようづらを作る。

「わかった、わかった……」

「……まったく……なにが大丈夫だ……」

まだぶつぶつ言っているヴィーに目をやったあと、力
イは目を閉じー練習を再開した。

ふふ……やってるやってる……

シエル王女は、校庭にカイとヴィーの姿を見つけ、目

を細める。二人が魔法の練習をしているところを見ると、まだ少しだけ心がちくりとしたが――新しいことをはじめた今、彼女には、二人のことを見守る余裕ができていた。

「どうされました？　王女……じゃない、シエルさん」
「いいえ。さあ、資料を運んでしましましょう」

シエルは生徒会の女生徒とともに、部活動の予算資料を運んでいた。ひとまず彼女は庶務しよむとして生徒会に仮入会することになり、同じ庶務の生徒と一緒に仕事をしているのである。

生徒会に入って早一週間。

校庭や訓練場の使用許可、部活棟の管理など、生徒会

の仕事はさまざまだったが、どれも彼女にとっては新鮮だった。生徒会が、学園と生徒をつなぐ大きな役割を担っていることがわかり、シエルは驚きとともに、生徒会の仕事にやりがいを感じ始めてもいた。

規模は違うけれど、きつと王国も、こんな風にさまざま
まな組織が連携しあって、成り立っているんだわ……
「それにしても、シエルさんがこんなに仕事ができるな
んて……あ、ごめんなさい！　そういう意味じゃなく
て！」

「うふふ……いいんですよ。もつと世間知らずだと思っ
たのでしょう？」

シエルがふわりと微笑むと、庶務の生徒がほおとため

息をつく。

同じ生徒といっても、シエルはやはり王女であり、憧^{あこが}れの美姫^{びき}なのだ。

そんな王女と間近に接することができ、生徒会に参加している生徒たちの間ではシエルの人気は高まる一方である。

廊下を進み、一階から続く渡り廊下を歩くと、小さな別棟が見えてきた。

生徒会が業務を行う生徒会館である。

「予算の資料、運んできました」

シエルが会館に入ると、書きかけの書面から女子生徒が顔を上げた。

「ご苦労さま。ごめんなさい、重かったでしょう？」

彼女は書記のモニカ・アベル。まっすぐな長い髪を持つ、おっとりとした生徒だ。そこに割り込んできたのは

――

「なんだよ、シエルちゃん。言ってくれば俺が運んだのに」

王女をちゃん付けする優男は、副会長のリッツ・ロ―
エン。軽薄^{けいはく}に見えるが、実力は折り紙つきで女子からの
人気も高い。そして――

「こら、リッツ。王女をちゃん付けするんじゃない。
――でも彼女を特別扱いしなくていい。それをお望みです
よね、シエルさん」

正面に座り、優しい笑みを浮かべるのは、会長のキース・クルーゼである。

「ええ。ただの庶務として、存分にこき使ってくださいね」

シエル王女が答えると、皆が軽く笑った。

生徒会には、役員ではない一般生徒も数多く参加している。生徒会の活動に参加することは、この学園ではかなりの荣誉なのだ。

「さて……今日は頭の痛い問題を片付けておこう。お待ちかねの予算配分だよ」

キース会長が言うと、リッツ副会長が――

「げー……また夜までかかるな、こりゃ」

書記のモニカが口を開く。

「シエルさんにも手伝ってもらえるとありがたいんだけど……遅くなったらやっぱりまずい？」

シエルは少し考えたあと首を振った。

「いいえ、大丈夫です。お手伝いさせてください」

「さっすがシエルちゃん！」

キース会長がじろりとリッツをにらんだあと、ふうつと息をつく。

「助かるよ。それじゃ始めよう。――まずは資料を整理しようか」

「わかりました、会長」

シエルは箱から資料を取り出すと、さっそく仕事に取

り掛かった――

そのころ、カイとヴィーは――

「なんなんだヴィー？ 今日の練習は終わりか？」

「ああ。ちよつとやることがあるから、ついてこい」

切りの良いところで魔法練習を終えた二人は、校舎内をうろついていた。ヴィーはとろどろで立ち止まっては、外に目をやり、「ここじゃないな……」とつぶやく。ヴィーはとうやら校門の方を見ているようだ。

「なんだ？ なにか探しているのか？」

「これ、覚えてるだろ」

ヴィーが棒状のものをカイに放り投げる。受け取る

と、先日やばねの襲撃に使われた矢やだった。カイが斬ったので、矢羽やばねの方だけになっっている。

「調べがついたのか!？」

カイの問いに、ヴィーが歩きながら答えた。

「ああ。やっぱりちよっと変わった矢だったよ。――矢羽をしばらく握ってみな」

いぶかしげな表情のカイが、矢羽を握り込むと――

「む……曲がったままになる……これは……?」

ヴィーがうなずく。

「この矢羽は、南方なんぽう産の珍しい鳥の羽でできてることが

わかったんだけど……曲げて、しばらく熱を加えると

――そのままの形になるんだ。自由に形を変えられるって

わけ」

カイは手元の矢に目を落とし、口を開いた。

「つまり……？」

ヴィーが続ける。

「つまりだ……矢羽の形を変えることで——矢が飛ぶ軌道を変えられるってことだよ」

カイが驚きに声を上げた。

「なに？ そんなことができるのか？」

ヴィーが感心したようになる。

「すげースキルだよ。矢の軌道を自由自在に曲げられるなんてな。シエルを襲った敵は、間違いなく高レベルの射手だ。^{アーチャー}わかるか？ とゆーことは——」

カイが気づき、愕然^{がくぜん}とした。

「も……もしかして先日の襲撃は——雑木林の方向からではない……？」

ヴィーがうなずき、答えた。

「そういうこと。矢羽の形から逆算するのに手こずったけど、敵は——」

彼女が振り向き、目を細める。

「——学園の校舎方向から射てる」

カイが目を見開き、眉根を寄せた。

「なに!? ということは、まさか敵は——また教師か!?」
ヴィーが声を上げる。

「落ち着け！ 学園に出入りする者は多い。先生や生徒、

外部の講師や業者もいる。弓は折^ゆりたたんで小さくできるから、誰でも持ち込める。特定するのは難しい……だから――」

ヴィーがポケットから取り出した校舎の平面図を広げる。そこには細かく数式が書かれ、幾通りもの軌道が描き込まれていた。

「場所を割り出すしかない。先日の襲撃の時間――つまり今ごろの時間に、そこにいても不自然じゃないやつ――そいつが敵だ！」

カイが息をのむ。

「じゃあ、ヴィーが校内をぶらぶらしていたのは……」

「おうよ。校舎側から射られた可能性を検討してたん

だ」

「ほんとに天才だったんだな……グイー」

グイーがちつと舌打ちした。

「まだ疑^{うたが}ってたのか、おまえは……。まあ手こずったのは確かだけどな。——よし、残りの候補はあと五箇所だ。行くぞ！」

「わかった！」

二人は射出地点を探し、廊下を急ぐ——

生徒会館では——

「ちよつと一休みしようか……モニカ、お茶を淹^いれてくれないか？」

「いいわね……ちよつと待ってて」

一区切りついたところでキース会長が声を掛けると、書記のモニカが立ち上がった。

「あ、モニカ先輩。私も手伝います」

シエル王女が立ち上がろうとすると、副会長のリッツが声を掛ける。

「いーから、いーから。シエルちゃんは座ってて。モニカの淹れるお茶はおいしいから期待していいよ。な、モニカ」

モニカが手を上げて部屋を出ていった。一階の奥に給仕室があるのだ。

キース会長が書類をまとめながら、口を開く。

「それにしても、シエルさんが計算も得意だとは知らなかったよ。計算尺しゃくの使い方は王宮で？」

「ええ。王族は初等学校へは入りませんから、家庭教師がつくんです。朝から晩まで行儀作法から一般教養、さまざまな教科まで、みっちり教わりました」

リッツが口を挟んだ。

「げー、王族もたいへんだねー。遊ぶ暇ひまないじゃん」

「ふふ……私も昔はたいへんだと思っっていましたけど……いまはいろいろ習っておいてよかったと思っっているんです。こうして、すこしはみなさんのお役に立てますから」

キース会長とリッツが目を見合わせる。会長が口を開

いた。

「すこしどころではなく、大いに役に立っていますよ、シエルさん」

「ほんと、シエルちゃんはいー子やなあ……」

皆が笑いあっている、扉が開き、モニカがティーカップをお盆ぼんに載せて入ってきた。いい香りが部屋いっぱいになり満ちる。モニカは皆の前にソーサーとカップを置く。と、自分も腰を下ろした。

「さあどうぞ。今日は東方産とうほうのお茶を淹れてみたの。珍しいでしょう？」

「ほう、いい香りだ」

キース会長がカップに口をつけ、リッツが優雅ゆうがに匂い

を嗅^かいだ。

シエル王女は、カップを手にする前に立ち上がる。

「あ、そうだ。私、今日、お茶菓子を持ってきたんです。ちよつと取ってきてますね」

「お茶菓子？ いーねー」

リッツが声を上げると、モニカが微笑んだ。

「じゃあ私たちは先に頂いているから」

「ええ、すぐ戻ります」

この作業部屋は狭いので、荷物は隣の物置部屋に置いてあるのである。

シエルは物置部屋に入ると、鞆^{かばん}に入れてきた焼き菓子を取出す。屋敷付きの料理人が作ってくれた菓子だっ

た。

ふふ……みなさん喜んでくれるといいけれど……
棚に鞆を戻したとき、シエルはふと、棚から落ちてい
る黒い筒状の袋に気がついた。

あら……誰のかしら？

シエルが袋を棚に戻そうと手に取ったとき――ゆるく
なっていた口から中の物が覗いた。^{のぞ}

それを見て「……え？」王女の心臓がどくんと跳ねる。
袋から覗いたもの、それは――

銀色に光る、折りたたみ式の――弓。

ま……まさか……！

先日の襲撃は矢によるもの。敵が射手^{アーチャー}であることはわ

かっていた。

シエルは息をのんで、手元の弓を見つめる。

確か、モニカ先輩は治療師……クルーゼ家のキース会

長はおそらく聖騎士……

それじゃこれは——リッツ副会長の!?

彼女は思わず唾を飲み込んだ。心臓がどくどくと早鐘

のように打つ。

お、落ち着くのよ、シエル。弓を持っているからといって、先日の襲撃者とは限らない……。

しかし——

同じく袋に入っていた矢の羽の部分を握り——お願い

……——手を離したとき——

……ああ！

疑念は確信に変わった。矢羽が――握った形に変形している。

これは、ヴィーから聞いていた特殊な矢羽！
な……なんてこと……

シエル王女の目が、大きく見開かれていく。彼女はくしゃりと顔を歪めた。

間違いない――襲撃者は、リッツ副会長だわ！

驚きによるけた彼女は、棚に当つて、思わず大きな音を立ててしまう。隣の作業室から――

『ん……王女か？』『遅いな。俺、見てくるわー』

副会長の声が聞こえ、シエルは慌てた。

まずい！ どうしよう!?

シエルは天井を見上げる。

そうだ、二階！

この生徒会館は二階建てなのだ。

シエルは、静かに、しかし全速力で廊下を走ると、リ
ツツ副会長が部屋から出てくる前に、辛^{から}うじて階段を駆
け上がった――

その頃、校内を探索中のカイとヴィーは――

「ここでもない……ということは――しまった！」

残り二箇所の一つを調べ、そこが射出場所ではないと確信したヴィーは、校舎の平面図の一点を指差す。

それを見てカイが――「……え？」――息をのんだ。残りは一箇所。そこがどれほど信じがたい場所だろうと、他の可能性が消えた以上、そこ以外、考えられない。

その場所は――

「……南校舎の端……？　そこは――」

カイの髪の毛が、ぶわあつと逆立つ。

ヴィーが悔しそうな顔で叫んだ。

「行け、カイ！　そこは――生徒会館だ！　おそらく二階の窓から射て――」

瞬間――

カイはヴィーの言葉を最後まで待たずに、力いっぱい廊下を蹴って走り出す。

歯を食いしばると、一気に速度を上げた。

「オレさまもすぐ行く！　なんとかしろ、カイ！」
遠ざかるヴィーの叫びを聞きながら、カイは力の限り走る。教室に残っていた生徒たちが、矢のように駆けるカイを見て、何ごとかと目を見開いた。

――まさか……まさか、生徒会の中に暗殺者が!?
カイは唇を噛みしめる。

シエル……あんなに楽しそうに仕事をしていたのに――
彼女の気持ちを思うと、カイは胸が張り裂けそうになった。

カイはキツと顔を上げると、渾身の力で廊下を駆け、

生徒会館へ急ぐ。

シエル、無事でいてくれ――

いま行く！

生徒会館。二階廊下――

まさか、リッツ副会長が襲撃者だったなんて！

とにかく――逃げなきゃ！

シエルは混乱しながらも警戒を怠おこたらず、廊下の左右を

見回す。誰もいない。二階では、一般生徒たちが作業を

しているはずだったが――それにしてはやけに静かだっ

た。

確か、奥の部屋で作業中のはず……

シエルは廊下を慎重に走り、すこしだけ開いている扉に近づくと、隙間すきまから中を覗いた。そして――

ああ……！

シエルは室内に入り――息をのむ。

生徒会を手伝いに来ていた生徒たちは全員、机に突っ伏すように倒れていた。背中が上下しているところを見ると、皆、生きているようだ。机の上にはカップが散乱し、独特な香りが立ち込めている。

ま……まさかこれは――モ二カ先輩のお茶!?

シエルは目まいを覚え、思わずふらついた。ということは――

王女は唇を思いきり噛みしめる。

リッツ副会長だけでなく、モ二カ先輩も協力してる

二人は共犯だわ！

シエルは生徒たちを見回して、顔を悲しそうに歪めた。
私のせいで、また他の生徒たちを巻き込んでしまった
……ごめんなさい………ほんとうに……ごめんなさいーでも

王女はキツと顔を上げる。

すぐ助けを呼んでくるから！

彼女は窓際に走ると、外を見回す。窓の近くに大きな
木が生えていた。

あの木に飛び移れば、怪我^{けが}はするかもしれないけど、

死ぬことはない――

よし！

彼女は覚悟を決め、窓を開けようと力を入める。しかし――

「え？　開かない!？」

ただの引き戸なのに、ありったけの力を入れても開かない。

な……なんで？　それなら！

椅子で窓を叩き割ろうと、シエルが考えたとき――

「そこは開きませんよ？　封印が施されていますからね」

背後からの声に、シエルがびくりとして振り返る。そ

ここに立っていたのは――

「モ、モニカ先輩！」

生徒会の書記――モニカ・アベルであった。

彼女は、気味の悪い笑みを浮かべると、すたすたと歩いてくる。

「私のお茶を飲んでいただければ、いろいろ面倒もなかったのに……。さあ王女、おとなしくこちらへ」

「来ないで！」

シエルが椅子を持ち上げて威嚇いかくすると――

「きひひひひっ！」

奇妙な雄叫きみようおたけびを上げて彼女がしゃがみこみ――「え!？」

――まるでカエルのようにシエルに向かって飛んできた。

王女は息をのむ。尋常じんじょうな人間の動きではない。モ二力の目は淀みよど、光が失われている。これは――

精神支配系の魔法!?

しかし、そうではなかった。モ二力の口から覗いたものの――それは――

「なっ!？」

何本もの、黒い触手しよくしゅ。体内に寄生し、脳の制御を乗っ

取る、その生物は――

「ま、魔法蟲まほうちゅう!」

魔法蟲――触手の生はえた、なめくじのような形の魔法生物である。体内に脳内物質を分泌ぶんぴつする器官を持ち、組み込まれた命令に従って人間を操る違法な実験生物である

った。

モニカ先輩は操られている！

モニカが手を伸ばし、シエルに飛びかかる、その瞬間

――

「へ^{シヤドウ}隠形霊――お願い！」

シエル王女の影から飛び出したのは、黒い影のような死霊。

クロエが、シエルの護衛としてつけてくれた^{シヤドウ}へ^{シヤドウ}隠形霊である。死霊がモニカに^{から}絡みつき、床に組み伏せる。影の刃を^{やいば}モニカの首元に当て、彼女の動きを封じた。

「いい子ね、へ^{シヤドウ}隠形霊。そのまま拘束^{こうそく}して！」

じたばたするモニカを見て、シエルが一息ついたそのとき――

「油断大敵だゆだんたいてきよ。シエルちゃん」

「な！」

シエル王女が振り返ると、何本もの矢が連続して飛んできた。「う！」体のすれすれを狙った攻撃に、彼女は思わず尻しりもちをつく。

「リッツ副会長！」

「シャドウ隠形霊」が自動防御に従って、王女に危害を加えたリッツに牙きばを剥むく。そこで――

「シャドウ隠形霊」！ やめて！」

シエルが叫んだ。なぜなら――

「あつぶねー。シエルちゃん、ありがと！」

ーリッツが、机に突つ伏している生徒たちに弓矢を向けたからである。おそらく生徒たちはまだ生きている。彼らの人質に取られたのだ。

シエルが顔を歪ませる。

「あなたも操られて……！」

「え？ ああ、どーなんだろねー？ でも気分いいから、まいつか！」

リッツの目も濁り、その光は失われていた。シエルは唇を噛み締める。

「先日の襲撃はあなたね！」

「まーね」

リッツ副会長は肩をすくめ、肯定こうていした。そして、さらに最悪なことに――

「申し訳ない、シエルさん。おとなしく、僕たちの指示に従ってもらえないか？ 君を傷つけたくはないんだよ」

う……

部屋に入ってきたのは――会長のキース・クルーゼだつた。

会長の目にも光はなく、魔法蟲に操られているのは間違いない。

「会長まで……みんな目を覚まして！」

王女の叫びを無視して、キース会長がモ二力に目をや

る。

「まずはモ二力を離してもらおうか？ シエル王女」

リッツが続けた。

「さもないと、こいつらの命はない！ ―って、一度、
言ってみたかったんだよねえ」

「この卑怯者^{ひきようもの}！」

王女が声を上げるが、リッツは弓矢の照準^{ひようじゆん}を庶務の女子生徒に向ける。きりきりと弓を引き絞る音が響いた。
シエル王女は悔しそうに顔を伏せると、命令する。

「〈隠形^{シヤドウ}霊〉……その人を離して……」

〈隠形^{シヤドウ}霊〉がモ二力から離れると―キース会長が、踏み込みざま剣を振るい、死霊を真っ二つに斬り裂いた。

シエルは息をのむ。一撃で死霊を斬ったということは――いまのは神聖剣技なのだろう。さすがはフルーゼ家の嫡子^{ちやくし}。シエルの目から見ても、彼がかなりの手練^{てだれ}だとわかった。

消えていく〈隠形霊^{シヤドウ}〉を見て、王女は唇を噛み締める。たとえば死霊といえども、自分を守ってくれた存在をあつけなく消されたことに、彼女は怒りを覚えた。

「……私をどうしようというの？」

モニカが立ち上がり、生徒会役員三人が揃うと、キース会長が口を開く。

「ある御方^{おかた}が君を^{しよもう}ご所望でね。一緒に来てもらおう」
シエルが叫んだ。

「無駄なことよ！　すぐにカイやミリアが駆けつけてくる！　あなたたちに逃げ場はないわ！」

キース会長は役員二人と目を見合わせると――懐ふところからスクロール巻物を取り出す。表面に記された魔法の等級を示す印を見て、それが高位魔法の巻物だとすぐにわかった。

「素晴らしい巻物スクロールだろう？　高位魔法へ転移ポーターが封じられている。しかも――追跡妨害の付与効果まであるんだ」
な……

キースの言葉に、シエル王女は絶句ぜっくする。

へ転移ポーターを使われたら――終わりだ。妨害付与であるなら、たとえばヴィーだって、追ってくるには時間がかかる。

王女は歯を食いしばり、目を伏せた。

やられたー

私はどうすれば……どうすればいい!?

なにかないの!? カイたちに、手がかりを残す方法は！

シエルは考える。猛烈な速度で考える。目を固く閉じ考える。

考える。考える。考える。

そしてー

彼女はハッと目を開いた。

そうだ……そうだわーその手があった！ーでもー
シエルは体を震わせる。キースたちが近づき、シエル

王女を囲んだ。不気味な光のない目で、王女を見つめる。
キースが巻物スクロールを開き――

……もう……それしかない。覚悟を決めるしか――ない！

カイ――私に――勇気を！

シエルは□元に手を寄せ――そして――

キース会長の□が動いた。

「術式解放――ポーターへ転移――」

不意に、突然に――四人は部屋から消えた。

あとには、まだ眠り込んでいる生徒たちだけが残された。

* * *

カイが全速力で駆けていると、生徒会館近くで待機していたミリアがそれに気づき、なにごとかと走ってきた。二人は生徒会館前でちょうど落ち合った。走りながらカイが叫ぶ。

「ミリア、生徒会が怪しい！ 役員の中に先日の襲撃者がいるかもしれない！」

「なんですって!？」

ミリアが驚きの表情で声を上げた。

「とにかくシエルの無事を確認する！ 会館に突入するぞ！」

「わかった！」

カイが生徒会館の扉に手を伸ばす。しかし――
「なっ!？」

バチンツと強力な力に弾かれたように、カイが吹っ飛んだ。「くくっ！」後転してすかさず起き上がると、扉に目をやる。

「これは――結界!？」

「生徒会が怪しいのは確定ね！ 下がって！」

ミリアがレイピアを抜刀し、扉に強烈な突きを連続して放った。火花が飛び散るが――刃は通らない。ミリアが一度舌打ちし、^{だめ}叫ぶ。

「カイ！ 窓！」^{だめ}「駄目だ！ 開かない！」

側面の窓を開けようとしていたカイが、すぐさま応じた。そこへ――

「お、おい！ シエルはどーなった!？」

ひーひー言いながら走ってきたヴィーを見て、カイが扉を指差す。

「結界だ！ ヴィー、解除頼む！」

「いきなりかよ！ まーいーやー任せろい！」

ヴィーが扉に触れると、会館の壁を覆うほどの巨大な魔法陣が出現した。ヴィーが珍しくたじろぐ。

「げ！ なんじゃこりゃあ！ すげー高度な魔法封印^{シーリング}だ！

学生レベルの結界じゃないぞ！ ―離れてろ―
解錠術式、二番、五番、七番展開！」

ヴィーの三重の解錠魔法陣が展開され、封印を解除しようとして術式計算を始めた。しかし――

「うわっ！　ダミーの封印まで張ってある！　カイ、これは時間がかかるぞ！　どうする!？」

カイがヴィーに問う。

「封印はどこからどこまでだ!？」

「え？　どこからどこまで……？　えっと――壁周りはずんぶだ!！」

カイはうなずくと、ミリアに目で合図した。

「ミリア！　上だ!！」

「わかった！　来て!！」

ヴィーが眉根を寄せて声を上げる。

「おい！ 二人ともなににする気だ!?」

ヴィーの問いを無視して、カイが走った。ミリアが壁際で指を組み、待ち構える。カイがミリアの両手に乗った瞬間――

「せーのっ！」

ミリアが両手をぐっと持ち上げ、カイを押し上げた。カイのジャンプ力と、ミリアの腕力が合わさり、カイは――屋根の上まで跳び上がった。そして空中で抜刀する――

「へ武装錬成――死を招くもののアアアッ！」
アームズアルター
デスブリンガー

屋根に渾身の一撃を放つと、その勢いそのまま屋根をぶち破り、会館の二階へと無理やり飛び降りた。あちこち

に破片が飛び散り、砂煙すなけむりが上がる。

ヴィーは口をあんぐり開けて、その光景を見上げた。

「ムチャクチャや……」

二階の一室に降り立ったカイは、周りをすばやく見回す。誰もいない。そこへ――

『お兄！』

シーツを被ったような死霊が、屋根の穴から降りてきた。

「クロエか！ 今どこだ!？」

『さつき、シエルにつけてたへシヤドウ隠形霊

急いでそっちに向かっているとこ！ 神聖校まで、あと五

分！』

クロエほどの術者だと、死霊を通じて言葉を伝えることができるのである。

「助かる！ 死霊を放って、会館内を探索できるか？」

『わかった……やってみる！ ——シエルを探して、
ゴーストへ低級霊へ！』

しばらくすると、数体の死霊が、屋根の穴から館内に侵入してきた。死霊の遠隔召喚である。そこへ、外からミリアの声が――

「カイ、私を引き上げて！ ——へ聖鎖へ！」
バインド

屋根の穴から白く輝く鎖が降りてきた。へ聖鎖へを口
――代わりにしようというのである。

カイがへ聖鎖へを握むと――「ぐく！」 痛みに歯を食

いしばった。神聖魔法である〈聖鎖^{バインド}〉は、カイにはダメージなのである。

カイは痛みを無視し、ぐっと腰を落として踏ん張ると――〈聖鎖^{バインド}〉を一気に引いた。ミリアが引き上げられ、屋根の穴の縁に姿を現す。彼女は背中にヴィーを背負っていた。

「ヴィー、飛び降りるよ?」「おうよ!」
ミリアが飛ぶと、ヴィーと一緒に二階に着地する。
カイが皆を見てうなずいた。

「よし、揃ったな。クロエもいま向かっている。――シエルを探すぞ!」

カイたちはすぐさま行動を開始した。

「内側からなら封印を破れるか？ ヴィー」

「非対称封印っぽいからな……すぐに破っちゃる！

——にしてもおまえら、すげー連携だな……」

「頼んだぞ、ヴィー」

カイはヴィーに声を掛けると、ミリアと目を合わせる。

「二階は〈低^{ゴースト}級霊〉があらかた探索を終えた。——階

に降りる」

「わかった……先行する！」

二人は廊下に出るとすばやく左右を見回し、すぐに階段へと走る。ミリアの先導で階段を降りていくと、途中で階下から何者かが上がってきた。ミリアが声を上げる。

彼らは――

「な！　うちの生徒じゃないの！」

「なに！　敵なのか!？」

生徒たちはのろのろした動きで、二人を阻^{はば}もうと殺到する。ミリアが応戦するが、生徒だと思うと手を出しにくい。彼らの濁った目を見て、ミリアが目を見開いた。

「カイ！　みんな操られてるみたい！　どうする!？」
無闇^{むやみ}に傷つけられない！」

カイが一度、奥歯を噛みしめると、階上に向け叫ぶ。
「ヴィー！　封印はどうだ!？」

二階からヴィーの声が響いた。

「よっしゃ！　破ったぞ！」

カイがうなずく。

「よしーミリア。ヴィーを連れて退避しろ」

「……え？　カイ、あんた何する気？」

「急げ！」

ミリアが、階段を登ってきた先頭の生徒を蹴ると、カイの横を通り抜け、ヴィーの元へと走る。

カイは階段の踊り場まで下がると――剣を床に刺し、気合いを溜め始めた。

「ちよ、ちよつとカイ！　待つて待つて！」
ヴィーが声を上げる。

「なんだ……？　なにするんだ？」

すぐに気づいて青ざめたミリアは、のんびりしゃべっ

ているヴィーを抱え上げると、窓の縁に足を掛け――

「……へ？」

ヴィーが間の抜けた声を上げた瞬間――

「ちよっミリ――うわああああっ！」

――窓から飛び降りた。

そしてカイは、ぐつと腰を落とすと――

「うおおおおおおおおおっ！」

裂帛れっぱくの気合いを放つ。その体から、禍々まがまがしい気配が――

気に吹き出し、まるで黒い霧のように館内の隅々すみずみまで溢あふれかえった。

その凄まじい圧力と、濃厚のうこうな殺意――

暗黒騎士の上位スキル――ハイプレッシャーハイプレッシャー〈強威圧〉である。

階段を登ろうとしていた生徒たちが――「あが！」
「ぎー！」「ぐはあ！」口を開けて気絶し、ばたばたと倒れ
ていく。一階にいた他の生徒たちも、^{スタン}〈気絶〉や^{パラライズ}〈麻痺〉
の^{バッドステータス}状態異常で、身動きが取れなくなつた。

よし！

カイは倒れた生徒たちを軽々と飛び越え、すかさず一
階に着地する。警戒しながら、扉という扉を開けていつ
た。

シエルーどこだ!?

カイが部屋を探し回っていると、玄関から、ミリアと
ヴィーが再び館内へと入ってきた。

ヴィーがしかめっ面で言う。

「……ムチャクチャしやがって……死ぬかと思つたぞ！」

「死ななかつたでしょ？　ヴィーは生徒たちを診てあげて。——カイ！」

ヴィーに生徒たちを託すと、ミリアは、カイとともに一階の探索を開始した。しかし、倒れている生徒たちの中に、シエルの姿はない。そこへ玄関から声が――

「お兄！　来たよ！」

カイとミリアが、その声に振り返った。カイが珍しく、苦しそうな声を上げる。

「クロエ！　頼む——シエルを探してくれ！」

兄の声に状況をうかがい知ったクロエは、一瞬泣きそ

うな顔をすると、キツと表情を引き締めた。そして――
召喚する。

「お願い――^{ファントム}使役霊。シエルを探して！」

ぶわあつと十数体もの死霊が、一斉に^{いっせい}館内を探し始めた。あらゆる場所を、くまなく、シエルを求めて死霊が飛び交う。

しかし、全員で探しても――

「いない！ 生徒会の役員も見当たらないわ！」

皆が一階に集まると、ミリアが悔しそうに声を上げた。生徒を診ていたヴィーが立ち上がり、倒れている生徒たち^ちに目をやる。

「こいつら、操られてたぞ――魔法蟲だ……」

「ま……魔法蟲……なんてこと……」

ミリアが息をのみ、顔を歪めた。クロエが、ミリアの腕にすぎる。

ヴィーが苦々^{にがにが}しい表情で言う。

「たぶん、生徒会の役員全員が、魔法蟲に操^{あやつ}られてたんだ……」

ヴィーの言葉に、館内が静まり返った。

重苦しい沈黙の中、皆がカイに目を向ける。

カイは奥歯を噛みしめ、喉から絞り出すように声を出した。

「シエルが――さらわれた」

三章 追う者・阻む者

カイは一度、壁を思いきり叩くと――歯を食いしばり、顔を伏^ふせた。

最悪の状況を思い描き、カイは固く目を閉じる。怒りで体が震えていた。

「カイ……」

ミリアが、カイの肩^{かた}に手を置く。クロエは、珍しく取り乱す兄の姿を見て、目に涙を溜めていた。

カイは、自分を落ちつかせるように一息長く吐くと、

目を開ける。皆を見回し、唇を噛みしめた。^{くちびる}か

そうだ……俺は一人じゃない。

みんながいればーきつとシエルを探し出せる！

カイはパンツと自分の頬^{ほお}を叩くと、決意も新たに顔を上げた。

「シエルの暗殺が目的なら、この場で殺しているはずだ」

自分に言い聞かせるように、声を上げる。

「シエルは絶対に生きてる！」

皆がカイの言葉に、力強くうなずいた。カイはすぐさまクロエに問う。

「クロエ、ここからの抜け道はないか？」

クロエが首を振った。

「^{ファントム}使役霊」たちは、ないって！」

ミリアがうなずき、続ける。

「なら、^{ポーター}転移魔法だわ！ ヴィー、どこかに^{ポーター}転移の痕跡はない？」

ヴィーがぐると周りを見回した。賢者^{セージ}の探知能力は並ではないのだ。

「うみゆう……二階だな」

階段を登るヴィーの後を追い、皆も二階へと上がった。カイが最初に降り立った、大きめの部屋にヴィーは入っていく。

木材が^{さんらん}散乱している室内を見回すと、ヴィーが一点を

見つめた。

「むーここだ。〈^{ポーター}転移〉の痕跡がある！　ーにやるほ

ど……^{ポーター}転移するから屋根まで封印してなかったんだな

……おーっしー」

「追跡できるか？」

「黙ってる！　もうやつとるわ！」

カイが問う前に、ヴィーは探索魔法を起動していた。

複雑な探索魔法陣が、経路を解析していく。しかし――

「……え？　うきやああ！　追跡妨害してある！　最高

級の^{ポータースクロール}転移巻物を使ったな!？」

ヴィーがぐぬぬと苦い顔になった。

「あのすげー結界といい、^{まほうちゅう}魔法蟲やら、最高級^{スクロール}巻物まで

……敵は相当やばい奴らだぞ！」

「……追跡できないのか？」

グイーが悔しそうにうなる。

「できないわけないだろ！　——でも、時間がかかりすぎるんだよ！」

カイが歯を食いしばるような表情を見せたあと、クロエに尋ねる。

「へ^{シヤドウ}隠形霊」は!?　——そ、そうか……消されたんだっ
たな……」

「うん……消されてなければ、だいたいの場所くらいは
わかったはずだけど……ごめんお兄」

「謝らなくていい。クロエはよくやってくれている」

転移^{ポーター}先がわからない限り、追うことも、ましてやシエルを助けることもできない。

皆が、不吉な予感に静まり返る。だが――

絶望して当然のこの状況で、カイは、すぐさま周囲を探し始めた。

「みんな、大丈夫だ。シエルなら――」

カイが木材をどけ、床に目を落とす。

「――ぜったいに、なにか手がかりを残している」

ミリアとクロエが、目を合わせるとうなずき、カイに続いた。散乱した椅子^{いす}や割れたカップの破片をどかし、食い入るように手がかりを求める。

ヴィーは三人の姿を見て、驚きに目を見開いた。

「……な、なあ……こんなこといーたかないけど……手がかりなんて、残す時間あつたと思う……？」

ミリアが、横目でヴィーを見ながら口を開く。

「ヴィー、心配いらないわ。シエルなら、きっと何か残したはずよ」

ミリアが平然と言うのに、ヴィーは思わず後ずさりした。

「な……なんで、そんなことがわかるんだ……？」
三人が答える。

「シエルだからだ」カイが――

「シエルは守られてるだけのお姫さまじゃないわ」ミリアが。そして――

「知らなかった？ シエルってけっこう度胸すわってんのよ？」とクロエが――

三人は、シエルを信じていた。

彼女なら、絶対に、手がかりを残す――

シエルファークランニアステリオは、いざというとき捨て身で行動する――そう、皆が確信していた。

ヴィーがため息を吐くように口にする。

「おまえらって……すげーな……」

しばらくして――カイが動きを止めた。息をのみ、目を見開く。

一度、思いきり歯を食いしばると、口を開いた。

「……見つけたぞ――シエルの手がかりだ」

「え!?」「お兄、どこー!」

ミリアとクロエ、ヴィーもカイに駆け寄る。そして
―皆の目が見開かれていく。そこで、彼女たちが見たもの
のは―

「な……なんてこと……シエル」「うそ……でしょ……」
ミリアが思わず□元を押さえ、クロエが眉根を寄せて
涙目になった。ヴィーは―

□を開け、すんと尻もちをつく。

「……シ……シエルは―オレさまのことを……信じた
のか……」

床に落ちていたもの、それは―
カイが膝^{ひざ}をつき、体を震わせる。

―第一関節から噛みちぎられた、王女の小指。

賢者^{セージ}の持つ因果干涉魔法〈復元^{レストア}〉を使えば、この小指は元に―つまり、自分自身に戻ろうとする―その効果を利用すれば、きつと場所を特定できる―
そう考えたシエルは、決死の覚悟で小指を噛みちぎり、手がかりを残したのだ。

ヴィーを信じて―彼女の魔法を信じて―
それが可能かどうか知らない。推測でしかない。ただ指を失うだけかもしれない。

それでも、シエルは手がかりを残した。

皆を信じて―皆が来てくれることを信じて―

これが第四王女、シエルファア・クランニアステリオ。

そこにいた全員が、シエル救出を心の中で固く誓った。
「これで、たどり着ける」

カイは顔を上げ、皆に深くうなずいた。

「追うぞ、シエルを」

* * *

「よし……：転移^{ポーター}成功だ——この先の屋敷で、あの御方が
待っていていらつしやる」

キース会長が言うのと、リッツ副会長、書記のモ二力が
うなずいた。あの御方の役に立てるかと思うと、三人は
興奮を隠しきれない。魔法蟲に、そのように思わされて

いるのだ。

シエル王女は気絶させられ、猿ぐつわを嚙まされていた。そして用意周到なことに、そのほっそりとした首には、魔法詠唱を妨害するアイテムへ嘆きの首輪くびわが嵌められていた。

ここは王国西方の高原地帯——王侯貴族の避暑地にもなっている場所である。

「追跡は当分不可能だ。さあ、シエル王女を屋敷まで——ん？」

キース会長の表情が曇った。なぜなら——

「……なんだこの怪我は……」

ぐいつと会長がシエルの腕をつかむ。会長の目が見開

かれた。

「な……なぜ指から血が――」

そのときである――

「――見つけたぞ……シエルを――返してもらおう――」
「な――」

上空からの声に、会長たち三人が空を見上げる。直上に広がる魔法陣――そこから飛び降りてきたのは――
「うおりやあああああつ――」

――巨大な両手剣を振りかぶる、悪鬼あつきのごとき男――
王国最強の暗黒騎士あんこくきし――カイ・ブラッディアである。

「なぜ、ここが!?――ええい、迎え撃て――」
キース会長の叫びに、リッツがすかさず矢やを番つがえた

―だが―

「遅い！」

―有無を言わせぬ豪快なごうかい一撃が炸裂する。さくれつ地が裂け、爆発したかのように大量の土が飛び散った。

「くくううつ！」「化け物かよ！」「なんて威力なの！」
爆風に吹き飛ばされた三人が、驚愕の表情を浮かべる。
カイの一撃を受けた地面には、まるで爆裂魔法が発動したかのような大穴が穿うがたれていた。

カイが剣を構えなおし、油断なく三人に目をやる。
今のは―ただの威嚇いかく。

シエルの安全を確保できない限り、カイも全力は出せないのだ。

キース会長が、珍しくうなり声を上げる。

「ちっ！　なぜ転移位置がわかった!?　　―な……これは―」

シエル王女の小指が元に戻っていくのを見て、会長の端正な顔が歪んだ。

「へ復元!?　まさか……術式効果を辿ってきたのか！

―くっ……常識外れどもが！　とにかく屋敷まで―」

会長が指示を出そうとした瞬間―

「黙れえええええええっ！」

カイが裂帛の気合いを込めて叫ぶ。カイの全身から禍々しい気配が一挙に溢れ出し、役員たちに襲いかかる。

黒い霧のような殺意を浴び、三人がびくりと震え、動けなくなつた。

暗黒騎士スキルーへ威圧^{プレッシャー}である。

カイはすかさず会長の目前にまで踏み込みー「ひゅう！ー鋭い呼気^{こき}とともに、横薙^なぎに剣を振るつた。本気の剣撃^{けんげき}ではなかったが、硬直した相手を無力化するに十分である。しかしー

「む!？」

キース会長は、紙一重のところで硬直から抜け、カイの攻撃を回避するとー逆に鋭い突きを放つてきた。カイが目を見開く。その突きが、あり得ない方向から伸びてきたからである。

なに！　どこから剣が出た!?

カイは突きをかわすと、交戦を嫌って一旦後方へと飛び退った。その後を追うように、何本もの矢が連続で放たれる。

「く！」

カイはすべての矢を叩き落とすと、強く一息吐き、油断なく構え直した。

……硬直からすぐに抜けるだけでなく、反撃までしてくるとは……

ぐったりしているシエルを見て、怒りと焦燥しょうそうに駆られるカイだったが――彼らの予想以上の实力を見て、警戒おこたを怠らない。

これは……まさか――

キース会長が、役員の二人にうなずき、カイに目をや
った。

「ふふ……僕たちの力に驚いているのだろう？ これも
――あの御方から授かった力だ！ 見るがいい――」

うおおおおおおおんっ――

三人が奇妙な雄叫びを上げると――彼らの目が、見る
間に赤く染まっっていく。みしりと体が一回り大きくなり、
肌が黒みを帯びていった。

身体能力が飛躍的に上がり、痛覚が鈍^{つうかく}り、恐怖心が薄^{にぶ}
らぐ。それに伴^{ともな}い、潜在的な魔力やスキル能力も高まっ
ていく――

魔法蟲まほうちゅうの分泌物ぶんぴつぶつによる、身体・精神強化である。

やはり……蟲むしの力か！

カイはぎりりと奥歯を噛みしめた。そのとき――

「う……ううう！ うううう！！」

目を覚ましたシエル王女がうなり声を上げ、目に涙を浮かべてカイを見つめる。

それを見て、カイが――

「シエル！ いま助ける！」

一歩踏み出そうとすると――書記のモニカとリッツ副会長が、目の前に立ちふさがった。

瞬間――カイの髪の毛がぶわあつと逆立つ。

「そこを――退どけええええっ！」

叫び声を上げると、一瞬にして二人の目前まで踏み込んだ。シエルからは十分離れている。彼女を巻き込む恐れはない！　ならば――

――斬^きる！

カイは二人を殺す覚悟で、渾身の水平斬りを叩き込むとするが――

「ううううううっ！」

――懸^{けんめい}命にうなる王女の顔を見て、「くっ！」無理やり剣撃を止めた。カイは一度、思いきり奥歯を噛みしめると、後方へと飛び退^{ずさ}る。

二人の役員がカイの奇妙な行動を見て、いぶかしげに顔を見合わせた。カイは悔しそうに顔を歪める。

カイが攻撃を止めた理由、それは――シエル王女が何
度も首を振ったからだった。

シエルの表情を見て、カイにはすぐにわかってしまっ
た。

その意味は――『殺さないで』。

生徒たちは蟲に操られているだけ――シエル王女は、
彼らを殺して欲しくないのだ。

そしてまた、王女は、カイに、生徒殺しの汚名おめいも着せ
たくないのである。

カイにはわかってしまった。わかってしまうことが
――苦しい。

シ……シエル……！

カイは体を震わせ、唇を噛んだ。

ちゅうちゅ

躊躇したカイを見て、キース会長は――

「リッツ、モニカ。こいつを足止めしろ！　屋敷までた

どり着ければ――僕たちの勝ちだ――！」

かか

――すかさずシエル王女を抱え、屋敷に向かって走り出した。

「ま、待て！　シエルを返せ！」

しかし――

「ここから先は行かせませんよ？」

「ここを通りたきや、俺たちを倒してからにしな！

――って言うてみたかったんだよねえ」

けんせい

二人の生徒会役員が、カイを牽制するように回り込み、

行く手を阻む^{はば}。

く……！

シエルの想いを知ったカイは、一度歯を食いしばると背後へと飛び退り、一緒に転移^{ポーター}してきたミリアとヴィーに目をやった。

「ミリア……ヴィーは大丈夫か？」

カイが尋ねると、ミリアは眉根を寄せ、小さく首を振る。

「すごい熱を出してる……無茶すぎたのよ……」

ヴィーは〈復元^{レストア}〉の術式効果を逐一^{ちくいち}計算しながら、何度も近距離へ転移^{ポーター}を繰り返してきた。そもそもヴィーでなければ成し得ない、無茶苦茶な追跡である。魔力経

路が焼ききれるほどの、過剰かじような魔法行使であつた。

ヴィーは大粒の汗を流し、荒い息を吐きながら、ミリアとカイを見上げる。震えながらも、口元を上げて見せた。

「なんだよ……そんな顔するな！ 大丈夫……オレさま、天才だぞ？ ……コロリに転移位置を教えないとな……」

少しでも負担を減らすため、〈転移ポーター〉で連れてこれたのはカイとミリアの二人。

クロエは今、学園で〈転移ポーター〉が使える術者を探している最中である。〈転移ポーター〉は高位魔法であり、教師でも使える者は限られるのだ。

ヴィーは自分の影に目を落とすと――命ずる。

「……おい、〈隠形霊^{シヤドウ}〉……コロリに場所を教えろ――行け！」

それは死霊――クロエが通信用につけてくれた〈隠形霊^{シヤドウ}〉である。死霊は一度震えると、とぶんと影の中に沈みこみ、見えなくなつた。

カイは膝をついて、ヴィーを見つめる。

「ありがとう、ヴィー。ここまで来れたのはおまえのおかげだ。無理をさせてすまなかつた……」

「うるせーぞ、カイ……とつとつとシエルを連れもどせ……！」

ヴィーは咳き込みながら、苦しそうに口にした。ミリ

アがヴィーの頬ほおを優しく撫なでる。

「ヴィーはここで休んでいてね」

カイがうなずいた。

「あとのことは俺たちに任せろ」

二人は目を合わせると、立ち上がり――静かに振り返る。

その視線の先にいるのは、魔法蟲に操られた生徒会の二人――リッツとモニカ。

そしてその先に――

シエルを連れ、屋敷へと急ぐキース会長がいる。

カイは、はやる気持ちを抑え、口を開いた。

「ミリア、聞いてくれ……。シエルは――会長たちを死なせたくないし、俺たちに生徒殺しをさせたくもないん

だ……。――正直に言えば、俺は全員を殺してでも、一刻も早くシエルを助けたい……。だが――」

カイが噛みしめるように口にする。

「シエルの想いを無下^{むげ}にしたくない。俺はその想いに――応えたいんだ」

隣で、ミリアが一瞬泣きそうな表情を見せる。

「……。ほんと……。シエルらしいわね……。――それに……。きつとシエルは信じてるのよ――」

ミリアがカイを横目で見た。

「私たちになら、生徒を一人も殺さずに、この事態を解決できるって」

カイは、ミリアの言葉に奥歯を噛みしめる。

「そうだな……きつとそうだ。その想いと信頼に――応えよう」

二人は不殺^{ふさつ}の決意を胸に――剣を正面で立てる。

王国最高レベルの暗黒騎士と、聖騎士^{パラディン}の中の聖騎士^{パラディン}。

そして――

レアスキルを持つ聖射手^{アーチャー}と、得体の知れない治療師^{ヒーラー}

――

学園屈指の實力者たちが、ここに対峙^{たいじ}した。

魔力切れのヴィー。

人質に取られたシエル。

魔法蟲によって強化された――傷つけられない生徒たち。

「ではー行くぞ」

シエル王女を救出するための、厳しい戦いがーいま、はじまる。

* * *

「カイ、ついてきて！」

「わかった！」

盾^{たて}を装備してきたミリアは、縦に長いカイトシールドを前面に掲げ、敵へと疾走^{しっそう}した。カイは、ミリアを追いかけるようにして走る。

ー殺さずに、武装を解除し、無力化する。

一撃必殺の剣技を持つカイにとって、そのような戦闘はもどかしい限りだったが――聖騎士ミリアンには、そういった繊細な戦い方はお手の物であった。

カイは内心の怒りと衝動を抑え、ミリアに従う。

最初の相手は――

「モニカは治療師よ！――

定石どおりなら、彼女が先だけ

ど――」

カイがうなずいた。

「ああ。向こうの攻撃力は聖射手のみ。飛び道具を潰すのが先だな！」

「そういうこと！――いくわよ……――一気に――距離を詰める！」

ミリアが器用に懐からスクロール巻物を取り出すと、前方に放り投げる。巻物スクロールが燃え上がり、青白い魔法陣が現れた。

彼女はその魔法陣を、全速力で駆け抜ける。ミリアの体が輝き、魔法効果が発動した。

その魔法は――ダブル・ストレングス〈倍強化〉。

支援魔法ストレングス〈強化〉の上位魔法である。

ミリアの筋力が急激に高まっていく。彼女は効果を確認すると、ぐっと前傾姿勢を取り――

「先行する！」

――一気に加速した。

目指すは、副会長のリッツ。弓矢ゆみやでの攻撃を得意とするアーチャー聖射手に、距離を取らせてはいけない。懐に入り込む

のが定石である。

逆に言えば、距離を詰めてしまえば――弓矢など恐るに足りないのだ。

爆発的な速度で敵に接近するミリア。見る間に距離が縮まる。近づく。

もう目前！

リッツ副会長はミリアの突進に気づくと、すかさず矢を番え、引き絞る。ミリアが、矢を警戒し、盾を前方に押し出した。それを見て――リッツは不敵に口元を上げる。彼は、矢の軌道を自在に変化させるスキルを持っている。

盾に隠れた体を狙うのは、彼にとって造作もないのだ。

むしろ、盾の向こうに必ず標的があるため、狙い撃つのに好都合なのである。

「盾で守れると思っただか!? これだから防^{タンク}御役は!」

リッツが叫び、連続して矢を放った。その尋常ではない矢の数。彼は一度に複数の矢を放つことができるのだ。左右から弧を描き、盾を避けるようにして何本もの矢が迫る。リッツが舌なめずりをし――

「ひやははは! あっけねえなああっ!」

盾の向こうに、矢が吸い込まれた瞬間――

「………は?」

リッツの目が見開かれた。矢が――盾の向こうにいるはずのミリアを素通りして、左右に分かれて飛んでいつ

たからである。

「……え？ ええっ!？」

リッツが、驚きの表情を浮かべ、思わず声を漏らした。
そのとき――

白と金色がリッツの視界をかすめる。

そのとき、^{パラデイン}聖騎士ミリアは――

「な――」

――リッツの――右側面に――回り込んでいた。

「なにiiiiiiiiiiiiっ!？」

リッツが顔を歪め、正面の盾を見る。盾が金属音をさせて――地面に落ちた。ミリアが、□元をにやりとさせる。

そう。盾は――^{おとり}化。

ミリアは、リッツの目前で、盾を――前方に投げたのだ。
リッツが盾に気を取られている間に、彼女は右へと回り込み――そして――

「カィィイツー！」「おうっ！」

カィは――

リッツの顔が、ぶざまに引きつる。

カィは、リッツの――左側面きょうげきにいた。

これは、左右からの挟撃――カィとミリアの息の合った連携攻撃である。

二人はなんの打ち合わせもなく、アーチャー聖射手に対して、高

度な戦術を組み上げたのだ。

幼いころから共に研鑽けんさんを積んできた時間は――伊達だてで

はない。

「くそおおおおおっ！」

リッツが大声を上げた。矢を放っている時間などない。二人は一步大きく踏み込むと――

「ひゅう！」「しゅっ！」

鋭い呼気とともに刺突攻撃を繰り出した。急所は狙^{きょつしよ}つていないものの、当たれば大怪我は免^{まぬ}れない。一直線に迫る二本の刃^{やいば}が、リッツの胸元に届く瞬間――

「――なんつって」

今度はリッツが――にたりと笑う。

「なに！」「んっ！」

カイとミリアが、同時に目を見開いた。二人は、無理

やり体をひねって前方に飛び込むと――すぐさま起き上がり、後方へ跳とんで、リッツから距離を取る。なぜなら

――

二人が目を見合わせ、困惑の表情を浮かべた。

なぜなら、かわしたはずの矢が――喉元のどもとに迫っていたからである。二人をそれに気づき、辛からうじて矢の攻撃を避けたのだ。

「ひええ……いまのを避けるのかよ!? どんだけだ、お前ら！」

すなお しょうさん

素直に賞賛の声を上げながらも、リッツは油断なく、次の矢を番える。

カイが眉根を寄せ、口を開いた。

「なぜ避けたはずの矢が？ ……回避することまで織り込み済みで、矢を放てるということか……？」

ミリアが、リッツをにらみながら答える。

「信じられないけど、そのようね。ほとんど魔法の域だわ……。避け続けていれば、いずれは矢が尽きると思っただけ——見て」

カイはミリアに促され、リッツ副会長に目をやった。リッツは腰に回した矢筒やづつから、矢を何本も取り出して、いるが——

その様子を見て、カイは一度唇を噛むと、思わずうなる。

「あれは……魔道具か……？」

「……その類^{たぐい}ね。おかしいと思つたのよー」
ミリアがくやしそうに口にした。

「あれだけ射てもー矢が無くならないなんて」
そう。

リッツ副会長の矢筒は、代々、ローエン家に伝わる魔法アイテムー

その効果はー〈無^{ロード・リロード}限装填〉。
無限に矢を創り出す術式を封じた、レアアイテムである。

つまり彼の矢はー絶対に無くならない。
リッツが二人の視線に気づき、矢筒を叩く。
「なんだ？ 矢の心配をしてくれてるのか？ ぜってー

無くならないから安心しな！」

彼は軽口を叩くと、面白そうに二人に目をやった。

「お前らが、ただの名家出身のお坊ちゃん、お嬢ちゃんじゃないのはわかったよ。さっきのを避けられるのは、学園でも数人だろうからな！」

リッツがにやりと笑うと、声を上げる。

「改めて名乗ろう。俺はリッツ・ローエン！ 生徒会副

会長にして、^{アーチャー}聖射手の名門ローエン家嫡子！^{ちやくし}——さあ、

そろそろ本気でいかせてもらうぞ？ とくと味わえ——」

^{アーチャー}聖射手が銀色の弓を引き絞った。

「俺の^{きゆうしや}弓射スキル——^{アルテミス}〈狩女神〉をな！」

「来るぞ！」「散って！」

地面を蹴^けつて、左右に別れた二人に――無数の矢が放たれる――

* * *

「くっ！ 接近させない気だな！」

「矢の数も多いけど――確実に急所を狙^{ねら}ってくるのが厄^{やっかい}介^{かい}だわ！」

カイとミリアは、リッツ副会長の弓射スキルに足止めを食らっていた。

リッツはは休むことなく、矢を番えては射る。速射能力も並でなかったが――その矢は二人がどこに隠れても、

どう動いても、お構いなしに急所を狙って飛んできた。

まるで、すべてを見通すような正確さである。

変幻自在の弓射スキル――アルテミス〈狩女神〉。

体内の蟲によつて、潜在能力やスキルも強化されているのだ。

カイはその顔に焦りをにじませる。

「……く……さきほど接近したときに剣技を放っていれば……」

ミリアが、向かい側の木の陰から声を上げた。

「バカね！ そんなことしたら一撃で殺してしまうでしょ！ あんたは加減ができないんだから！――いい？
なんとか殺さずに無力化するのよ！」

「……わかつている……！」

二人は矢の攻撃をしのぎながら、機会をうかがう。

カイもミリアも、アーチャー聖射手と戦うのは初めてのことだっ

た。矢軸は細く、黒く塗ってあり、薄暮はくぼの中ではほとん

ど見えない。二人は突然出現する矢を、音と気配だけを

頼りに、なんとか避け続けていた。

リツツ副会長が、思わず感嘆かんとんのため息をつく。

「ここまで避けられたのは初めてだぜ……おっそろしい奴らだなーじゃあこれはどうだー！」

木の陰に隠れたカイに向かい、ぐるりと円を描くように矢が迫った。

カイがすかさず体をひねって矢を避けると――

「な！」

——驚くべきことに、木に当たった矢が——爆発した。
「カイツ！」

向かい側の林に潜んでいたミリアが声を上げる。
カイは横っ飛びして地面を転がり、すかさず起き上がる。
頭を振ると、歯を食いしばった。

こ……これは——

ミリアが目を見開き、叫ぶ。

「矢の先端せんたんに爆発物が！ そんなことまでできるの!？」

それは、衝撃を加えると爆発するように細工された矢であつた。信号弾などに使われる炸薬さくやくを、リッツは矢に応用したのだ。

二人は奥歯を噛み締め、目を見合わせる。

「無力化などと悠長ゆうちやうに言っ
ていられないぞ！」

「そのようね……」

アーチャー
聖射手が、ついに標的を仕留めにきたのだ。

いまの爆発で、林にいた鳥たちが一斉いっせいに飛び立つ。空が鳥たちで埋まった。

「よし……ミリアー——旦合流する！」

カイは狙われるのを承知で飛び出した。横目でリッツをにらみながら、向かい側の雑木林にいるミリアのところにへひた走る。リッツの矢は――

「もう！ 無茶して！」

カイがミリアの側に飛び込むと、すかさず起き上がる。

二人は飛んでくる矢に備えたが――

「……む……？」

矢は――飛んでこなかった。

二人はいぶかしげに眉根を寄せる。いまのは絶好の機会だったはず。それなのに――

リツツは、矢を射なかった――

「……なぜだ……？」「……どうして射なかったの……？」

二人は考える。猛烈な速度で考える。そこに――突破□があると直感したからだ。

木かんぼくの陰に隠れても、灌木かんぼくの間に潜んでも、矢は正確に飛んできた。

まるでーそうー

まるでー見えているかのようにー

見えているーかのように……？

まさかー

ハッとそのことに気づいた二人は、同時にー感づかれないようにー空に目をやる。そこには二人の予想どおりー

「おそらく、あれだ。ミリア」「そういうこと……」
遠くから、リッツの声が響いた。

「いつまで隠れてるつもりだ？　じゃあ遠慮えんりよなく、そこをー火の海にしてやるよー！」

瞬時に、リッツのからくりを推測した二人はー

「カイッ!」「おうっ!」

― 雑木林から躍り出た。左右にわかれ、全速力でリッ
ツツに迫る。

リッツが驚きの表情を浮かべた。

「お! 特攻か!? おもしれーじゃねーか! 受けて立
つぜ!」

じぐざぐに走っても、回り込んでも、矢は正確に二人
目掛けて放たれる。爆発する矢に体勢を崩しながら、二
人はその可能性に懸^かける。

「ミリアー頼む!」

「任せて!」

走りながらミリアは―詠^{えい}唱^{しょう}する。その魔法は、神聖

属性の支援魔法――

「――我が道を照らす一筋の光あれ――」
リッツが詠唱に気づき、^{まばた}瞬きした。

「な、なんだあ!? 明かりつけてどうする気なんだよ!
――まあいい、^{アルテミス}〈狩女神〉の^{えじき}餌食になりな!」

そう。その魔法は、明かりをつけるだけの魔法。

ミリアは空を見上げると、効果範囲を上空いっぱい
設定した。そして――

高らかに宣言する。

「^{おお}覆いつくせ――^{グロー}〈光明〉!」

瞬間、上空が光で満たされた。辺り一面が昼間のよう
に明るくなる。空に、光の薄い膜ができたようなものだ

った。その膜で隠されたもの――それは――
リッツが顔を歪める。彼はなにかを恐れるように、矢
を射ちまくった。しかし――

カイとミリアが確信し、うなずきあう。
当たらない。いままでの弓射が嘘うそのように、彼の矢は
的外れな方向へと逸それていく。

正確さに欠けた矢など、この二人に当たるはずがなか
った。

「くくくうっ！」

リッツがうなり声を上げ、体勢を立て直そうとするが
――もう遅い。

カイとミリアは、そのときすでに――

「くーくそおおおおっ！」

剣が届く間合いまで、リッツに迫っていた。

「ふっ！」

ミリアが素早く踏み込むと、矢筒を叩き斬り、返す刀で弓の弦を――斬る。その優美かつ正確な剣さばき。――瞬でリッツを武装解除し「殺したらダメだからね！」ミリアがひと言いって飛び退ると――

「わかつている」

彼女と交代に、カイが一步、大きく踏み込む。腰をひねり、大剣を立て、腕をしならせ――

聖射手リッツの顔が、恐怖で歪む。

「歯を食いしばれ――先輩殿！」

その回転力を一気に開放し、リッツの側面に渾身こんしんの一撃を――

「うおりゃああああああっ！」

――叩き込んだ。

ぼぎりと鈍い音をさせ、リッツが――「がっ！」――吹っ飛ぶ。

彼は雑木林の大きな木に激突すると、糸の切れた操り人形のように地面に落ちた。そのまま、ぴくりとも動かなくなる。驚いた鳥たちが、また一斉に飛び立っていった。

「……よし。無力化成功だ」

カイが、残心ざんしんして剣を収める。ミリアが小さくうなり

ながら、カイを見た。

「……そこまでしなくてもいいでしょうに……」

「なぜだ？ シエルが望まなければ、とつくに殺していいぞ」

ミリアが深いため息をつくとき、空を見上げた。〈光明^{グロー}〉の効果が消え、夕方の光に戻っていく。そして――空の高いところを飛んでいるのは――大きな鷹^{たか}。

鷹^{つばさ}は、周りの状況に今気づいたかのように、一度ばさりと翼をはためかせると――声高く鳴いて飛び去っていった。

「……あれに気づかなかつたら、もっと手こずっていたわね」

「ああ。おそらく、^{アーチャー}聖射手のレアスキルなんだろうー」

カイも、飛んでいく鷹に目をやる。

「ー鷹の目を借りるというのは……」

そう。リッツ副会長が、あれほど正確な弓射ができたのはー上から見ていたからだった。

レアスキルへ^{ホークアイ}鷹の目ー鷹の視界に入り込み、戦場すべてを上空から俯瞰^{ふかん}する、^{アーチャー}恐るべき聖射手スキルである。

隠れても、潜んでも、上空から見れば^{いちもくりようぜん}一目瞭然。

そのからくり気づいたのはーたくさんの鳥が飛び立ったとき、リッツが矢を放ってこなかったからだった。

絶好の機会に攻撃してこないのはおかしい。その理由を考えたときー二人は、何かが上空から見ているーと、

そして、その何かの視界を鳥が塞^{ふさ}いだことに気づいたのである。

ゆえにミリアは「光明^{グロウ}」で空を覆い、自分たちの動きを「鷹の目」から隠したのだ。

その鋭い洞察力と、瞬時の連携――
すでに二人は学生のレベルを遥^{はる}かに超えていた。

「よし、次に行くぞ」

「そうね、急ぎましょう。シエルが待ってる」

二人はうなずきあうと、シエル王女を追い、先を急ぐ――

カイとミリアの二人――

複数のレアスキルを持つ高レベル聖射^{アーチャー}手、副会長リツ

ツ・ローエンを駆逐^{くちく}す。

* * *

そのころ、キース会長に連れ去られたシエル王女は

――

「うううう！ うううううっ！」

――必死の抵抗を続けていた。暴れ、わめき、悲しいような、怒ったような複雑な表情で、キースをにらみつける。

キース会長は、脇^{わき}に抱えるようにしている王女があまりに暴れるため、業^{ごう}を煮^にやしてその喉元^{のどもと}に短剣^{たんけん}を押し当

てた。会長がどす黒い顔を、シエルに近づける。

「あまり手間をかけさせないでほしいな……僕はあなたのように――寛容かんようではないのでね」

シエルが会長の目を見つめた。キースは彼女の目を見て――思いきり顔を歪める。

「……なぜ……そんな目で僕を見る……？」

王女の目に、怒りではなく、哀れあわみのようなものが浮かんでいたからだ。

「あなたまで……僕を――侮辱ぶじよくする気か！」
「うう！」

キース会長に突き飛ばされ、シエルは地面に突っ伏す。その拍子ひょうしに、口を塞ふさいでいた猿さるぐつわが外れた。彼女は

顔を上げると、キツと会長をにらむ。

「あなたが魔法蟲で操られていることはわかっています。でも――抵抗することはできたはずでしょう!?」

キース会長がぐつと詰まった。

魔法蟲は確かに人の精神を支配するが――強い精神力があれば、支配を免れることができるのである。心の中に弱い部分があれば、魔法蟲はその部分を刺激して、支配を強固なものにするのだ。

「会長！ あなたは名門ローエン家の子息しそくではないです
か！ こんなことをする人ではないはずです！ ご自身の誇りを――思い出してください！」

「……うるさい……」

会長は顔を強烈に歪め、歯をむき出しにした。

「うるさい、うるさい、うるさいっ！ おまえに何がわかる！ 王家に生まれ、なに不自由なく育ったおまえに！ 僕のなにがわかると言っんだああああっ！」
シエルは息をのむとー思わず言い返しそうになる自分を止める。

私だってー

私だって、お母さまが誰かわからない。

私だって、王宮でずっと陰口かげぐちを囁ささやかれてきた。

私だって、こうして命を狙われている。

私だって……私だって……！

ーでもー

シエル王女は、ふつと息を吐いた。

キース会長も、なにかを抱えている……でもそれを
— 誰にも言えなかった……

自分の秘密を打ち明けられるほどの、仲間がいなかつ
たんだわ……

ああ……

シエルは思う。

私は、なんて幸運なんだろう——

彼女はキース会長を見上げる。

だって私は、カイと……そしてみんなと出会えたのだ
から——

シエル王女は、いたわるように会長に声を掛けた。

「確かに……そうです……私に会長のことはわかりません……だから――」

シエルは、この状況で――誘拐の実行犯本人に――微笑^{ほほえ}みかける。

「私でよければ――会長のことを聞かせてもらえませんか？」

キース会長は、目を見開いた。彼は思わず後ずさる。体を震わせる。しかし――

シエル王女の、心からの言葉も――

「……ふざけるな……」

「……え？」

――キース会長には、伝わらなかった。

「ふざけるなと言ったんだあっ！　僕を哀れんでいるのか!?　見下しているんだろう！」

「ち、違います！　会長、話を――」

「うるさいいいいいっ！」

端正な顔を歪ませ、齒をむき出しにして怒鳴るキース会長。

彼を怒らせたのは――彼が感じてしまったのは――器の
違い。

シエル王女が見せたのは、敵さえも包み込もうとする、
人間としての器の大きさであつた。

婚外子である異端の第四王女――シエルファークラ
ンニアステリオ。

キース会長は彼女に、大いなる気高さを感じてしまった。

シエルに――王の器を見てしまったのだ。

そして、自分とのあまりの違いに愕然^{がくぜん}とし、自身の不^ふ甲^が斐^いなさを嫌悪し、彼は――

「シエルフアー・クランリアステリオ！ 澄^すました顔し

やがって！ 無傷でとのご命令だったが――もう知ったことかああ！」

キースはポケットから瓶^{びん}を取り出すと、血走った目でシエルに迫る。

その瓶の中には――

ああ！

「会長！ やめてください！」

——うねうねと蠢^{うごめ}く魔法蟲が入っていた。

シエルはなんとか会長を説得しようとする。

「あなたは聖^{パラディン}騎士なのでしよう!? どうか騎士の誇りを思い出してください！」

会長は——さらに怒りを露^{あら}わにした。

「騎士の誇りだと!? 僕は断じて——騎士などではない！」

起き上がり、逃げようとするシエルを、キースが追いかける。

「おまえのせいだからな！ 僕は悪くない！ おまえにも、この蟲で、僕と同じ屈辱^{くつじよく}を——」

キース会長が歯をむき出しにした。

「味あわせてやるううっ！」

―カ、カイ―

心の中でカイを呼び、逃げるシエル。

我を忘れ、王女を追いかけるキース。

彼の手の中の、おぞましい魔法蟲。

後ろ手に縛られ、失血によつて体力を失い、魔法詠唱^{えいしやう}

を妨害する首輪を嵌^はめられたシエル王女は―その絶対

絶命のピンチにおいても―

大丈夫……ぜったいにカイが助けに来てくれる……だ

から―

覚悟を決めると、唇を噛み締めた。

だからそれまで――絶対に諦^{あきら}めない！
逃げるのよ！

カイへの厚い信頼と、カイに教えてもらった不屈の精神。

シエル王女は力の限り、見知らぬ地を駆ける――

* * *

「む！ いたぞ」

カイとミリアが先を急ぐと、前方の木陰^{こかげ}に立っていたのは――書記のモニカだった。

彼女は所在なさげにうつむき、木の幹^{みき}に寄りかかって

いる。

ミリアが走りながら声を上げた。

「モニカは治療師ヒーラーよー攻撃力は無い！」

「よしー先に行くー！」

カイは大剣を抜刀すると、警戒しながら、モニカとの距離を詰める。なにも仕掛けてこない。彼女は支援役バッファであり、攻撃役アタッカーと一緒に行動してこそ、その力を発揮する役回りだった。

ミリアをちらりと振り返る。

「仕掛けてこないなら、構わず走り抜けるぞ！」

「わかったわ！」

カイが速度を上げるため、地面を蹴り、大きく一步を

踏み出したその瞬間――

「ッ！」

――地面に、白い魔法陣が広がった。その術式構造はまさしく――

「なに!? これは――ぐくううううっ！」

「カ、カイツ！」

カイが白い光に包まれ、感電したように大きく震え――
「ぐはっ！」――膝から崩れ落ちた。苦悶くもんの表情で、歯を食いしばる。カイは大剣たいけんを杖代つえわりに、なんとか体を支えた。

ミリアが驚きの表情で、声を上げる。

その術式は――

「し、神聖治癒魔法!? まさか……接触発動にしてある
っていの！」

そう、それは触ると発動するよう調整された神聖治癒
魔法。

言わば――治癒魔法の地雷である。

カイが体を震わせながら、立ち上がった。頭を振り、
木陰にたたずむ治療師をにらむ。

暗黒体質のカイにとって、神聖治癒魔法は大ダメージ
の攻撃魔法と同じなのだ。

ミリアが唇を噛み締める。

「こいつ……カイの弱点を――知ってる！」

書記のモ二力が、くすくすと笑いながら、木陰から姿

を表した。

「あらあら、そんなものに引つかかって……駄目な後輩こうはいねえ。言っておくけれど、その辺り一帯―地雷原だから」

モニカが両腕を広げ、微笑む。

しかし―

「……だから？」

ミリアは少しも臆おくさず、モニカ地雷原に踏み込んだ。
治療師モニカが目を細める。

この治癒魔法の地雷は、暗黒体質のカイを狙ったものである。

パラディン聖騎士であるミリアには、まったく意味がなかった。

むしろダメージが治って好都合ですらある。

「こんなもの、私が先行して発動させれば済むことでしょう！　―カイ、後からついてきて―！」

「わかった……頼む！」

ミリアが地雷原に踏み込み、モニカ目掛けて走る。

彼女は華麗にレイピアを抜刀すると―地面を蹴って加速した。

「悪いわね先輩―通らせてもらおう！」

治療師^{ヒーラー}に物理攻撃力はない。地雷原を突破されてしま

えば、モニカに戦う術^{すべ}は残されていない。しかも相手は、

聖騎士^{パラディン}の中の聖騎士^{パラディン}ミリア・ソレル。戦闘になれば、一

瞬で勝負がついてしまうだろう。それなのに―

治療師モニカは、まるで慈母じぼのような笑みを浮かべた。
「どうぞどうぞ」

そのぞつとするような微笑みに、ミリアが眉根を寄せた瞬間――

「ん！」

ミリアの足元に広がる、白い、聖なる魔法陣。神聖治癒魔法の発動である。

「あら、回復してくださるの？　ありがと――じゃあね、先輩！」

ミリアが大きく一歩踏み込み、神速しんそくの刺突しとつをモニカに放つ。ミリアの体が、治癒魔法発動により白く輝いた。
レイピアの剣先が――モニカに達しようとする――その

間際^{まぎわ}――

「ぐっ！」

ミリアの剣撃が止まり、彼女が一度、ぶるりと体を震わせると――

「かはっ！」

――大量の血を吐き、膝から崩れ落ちた。ミリアは
呆然^{ぼうぜん}と、地面に染み込んでいく自分の血を見下ろす。

「……………え？」

何が起こったのか、ミリアにもわからない。彼女は胸を押さえて咳き込むと、さらに血を吐いた。遠くで見守っていたカイの目が――見開かれていく。

「な――ミリアあああっ！　いま行く！」

カイはすぐさま駆け出すと、大きく地面を蹴ってジャンプした。着地点に地雷があるかもしれないが、一発や二発なら耐えられる。とにかく今は、ミリアを助けることが先決だった。

しかし――

「なにっ!？」

跳んでいるにも関わらず、地雷が――発動する！

地面から白い光が柱のように伸び、カイの体を覆った。おお地雷の発動範囲は、上空にまで及およんでいたのだ。

しまった！

カイは体を無理やりひねり、治癒魔法の効果範囲から逃れようとする。だが――

「ぐくうううううっ！」

数発の治療魔法を喰らい、吹き飛ばされた。体の芯^{しん}まで貫かれるような凄^{すさ}まじい衝撃に、カイはうめき声を上げる。辛うじて体勢を立て直すと、なんとか着地した。

「くく……上からでも……ダメか」

体中から煙^{けむり}が上がる。カイは全身の痛みに耐えながら、歯を食いしばった。

この強烈なダメージは、低レベルの治療魔法ではない……

カイは、このダメージを体で覚えていた。

そう。地雷はすべて、高位の神聖治療魔法——^{キュアオール}〈全快〉で作られているのだ。

「ミ……ミリア……大丈夫か！」

カイに呼ばれ、ミリアは困惑した表情で顔を上げる。
□元は血で真^まっ赤^かになっていた。

なぜダメージを受けたのか——わからない。

治療師^{ヒーラー}モニカが、静かに、膝をついた聖騎士^{パラディン}に目を向ける。

蔑^{さげす}むような、見下すような、憐^{あわ}れむような目で——微

笑んだ。

「うふふ……なぜ、こんなことになったのか？　なぜ、瞬殺^{しゅんさつ}できたはずの治療師^{ヒーラー}の前で、こうしてひざまずいて

いるのかわからない——そんな顔をしていますね？」

ミリアが歯を食いしばり、モニカを見上げる。

モニカは、幼子^{おさなご}にでも諭^{さと}すかのように続けた。

「あなたは治癒魔法のなんたるかを、まるで理解して
ない……」

治療師^{ヒーラー}が、悲しそうに首を振る。

「治療できるといことは、私たち治療師^{ヒーラー}は――命を操
っているのよ？ 生命力を操作できるのよ？ その意味
がわかる？ ん？ わからない？ ……ふふ……じゃあ、
教えてあげる」

モニカがうなずき、木の幹に手を添えた。

「生命力は文字通り――命の力。こうして、ちようどい
い量を与えれば、生き物を癒^いやすこともできるし――」
生命力を流し込まれた木の緑^{みどり}が、突然鮮^{あざ}やかになり、

葉がつややかに輝いていく。

しかし――

「こうして過剰^{かじよう}に与えれば――」

ミリアが木々の変化を目の当たりにして、息をのむ。

つやつやしていた葉に太い葉脈^{はみやく}がぼこりと湧き上がり、

限界に達すると、ぶしゅつと液体を飛び散らせて破裂

した。力強かった幹も、内側から盛り上がってくる若い

木肌^{きはだ}が表面を食い破り、やがて中身がどろりと溶けてい

く。

木は瞬く間に、肌色^{はだ}のどろどろした液体のようになっ

て、地面に広がっていった。

モ二力が続ける。

「こんな風に、生き物を――壊すこともできる」

ミリアは胸を押さえ、歯を食いしばった。

「ま……まさか……そんなことが……」

「うふふ……もう少しで壊してあげられたのに。あなた、
血圧が異様に高くなつて、内臓ないぞうの血管が破裂したのよ？

だから血を吐いたってわけ。わかる？」

モニカが笑いをこらえきれないような顔をして、両腕
を広げる。

「治療師ヒーラーを舐なめたおバカさんたち。私の〈超過治療オーバーキュア〉を
たっぷり味わいなさい」

カイも、ミリアも、目を見開いた。

命を操る治療師ヒーラーは――命を壊すこともできる。

治療師^{ヒーラー}モニカは、歯をむき出しにして、宣言した。

「ようこそ——治療魔法の地獄へ」

* * *

「さて、聖騎士^{パラディン}さん。まずは、そのおてんばな足をもらおうかしら？」

治療師^{ヒーラー}が手を広げ、詠唱を始めた。狙いはミリアの——足。

ミリアが青ざめた顔で息をのむ。彼女は、モニカに近づきすぎていた。

「くっ！」

士をかき、その場から懸命に離れようとするミリアだ
ったがーもう遅い。

詠唱が終わるー宣言が始まるーモ二力の、唇が、動
くー

ミリアの顔が、絶望で歪む。

「カ……カイイイッ！」

ミリアが手を伸ばし、助けを求めた瞬間ー

カイはー

「……すこし手荒くするぞ？」

ーミリアの、すぐ目の前にいた。

ミリアの目が、大きく見開かれていく。

一瞬で移動するそのスキルはー暗黒騎士スキル

シャドウラッシュ
へ影走へ。

カイはミリアを助けるため、地雷原を一気に駆け抜けてきたのだ。

ミリアが悲痛な表情を見せる。

「バ、バカッ！　なんで来たのよ！　地雷が！」

カイの全身に、白く輝く、無数の魔法陣が浮かんだ。

「着地に備えろ！」

ミリアにそう言うと、カイは、彼女を抱きかかえ――

「……え？　ちよっカイ――きゃああああああっ！」

――地雷原の向こうへ、渾身の力でミリアを放り投げた。ミリアは空中でなんとか体勢を整えると、地面に転がるようにして着地する。

「カ、カイツ！」

ミリアが振り返ると、カイが地雷原の中央で仁王立におうだち
していた。

その全身に、無数の魔法陣が広がっていく。

治療師ヒーラーモ二力が、カイを指差し、お腹なかを抱えて笑った。

「ぎやははははは！ いい気味！ その数の〈全快〉キユアオール

に、あんた耐えられる？　ぷぷっ、むりむりむりいい

い！　ぜったい無理！　あんた死んじやうよ？　死んじ

やうね？　―てゅーか」

モ二力が満面の笑みを見せる。

「死ねええええええええええ！」

「いや……やめ……やめてえええ！」

ミリアが涙の溜まった目で手を伸ばす。モ二カの高笑い。カイの全身に広がる魔法陣。

高位の神聖治癒魔法〈全快^{キュアオール}〉が、カイの全身で――

カイが覚悟を決めたように、目を閉じた。

――発動する！

白い光が一面に弾け、光の柱が何本も伸びる。目を開けていられないほどの眩^{まぶ}しさ。精霊の加護を受けた聖なる力が、暗黒体質であるカイの体に、一気に、激流のごとく――流れ込む。

「カイイイイイイッ！」

ミリアの悲痛な叫び。〈全快^{キュアオール}〉はカイにとって、爆裂

系魔法の直撃に近いダメージがある。

そのダメージが、数十も積み重なるのだ。

到底、無事では済まない。いやーもはや、最悪の事態を考えざるを得なかった。

白い光が薄れ、視界が元に戻っていく。

治療師^{ヒーラー}が嬉しそうな笑みを浮かべた。

「きひひひ……消^けし炭^{ずみ}になったか？ 哀れな暗黒騎士いっ！」

「カ……カイ……」

絶望に、固く目を閉じていたミリアが、恐る恐る、目を開ける。顔を上げる。カイが立っていたところに――目を向ける。

そこで、ミリアが見たものは――

「……………え？」

治療師^{ヒーラー}が、目を見開き、ぽかーんと口を開けた。

「……………はあ？」

そこに立っていたのは――無傷のカイ。

暗黒騎士は、あれだけの神聖治癒魔法を受けても、まったく無傷で佇^{たたず}んでいた。

カイは、ふうと長い息を吐く。

「間に合ってくれたか……」

呆然としていたモニカは――

「な………なんで無傷？　は？　はあああああっ!!」

嘘^{うそ}

よ！　嘘だわこんなの！　――くらえ！

〈^{オーバー・キュアオール}超過全快〉

ッ！」

モ二力渾身の〈超過治癒^{オーバーキユア}〉がカイの体で――発動する。
しかし――

黒い煙のようなものが上がると、その治癒効果は、瞬
く間に――消え去っていた。

「……うそ……うそよ！　嘘おおおおっ！」
治療師^{ヒーラー}が顔を歪め、思わず後ずさりする。

カイが振り返り――口元を上げた。

暗黒体質のカイに、神聖治癒魔法が効かなかった理由、
それは――

「来てくれたか――」

カイの視線の先にいたのは――黒い制服の少女。
彼女はツインテールの黒髪を肩の後ろに回し、片方の

眉^{まゆ}を上げた。

「ークロエー！」

カイの妹にして、天才死^{ネクロマンサー}靈術師ークロエ・ブラッディアである。

「お兄、こんなのに手こずっちゃって……私が来なかつたらどうするつもりだったの？」

「来てくれると信じていた」

「ふうん……あつそ！」

クロエは、誇らしげに口元を上げるとークロエはまだ混乱している治療師^{ヒーラー}に目を向けた。

「な……なぜ！　なぜ私の^{オーバーキュア}〈超過治療〉が効かない!?」

黒い制服の少女は、可愛^{かわい}らしい仕草^{しぐさ}で小首をかしげる。

「あれ、まだわかんないの？ これ見ればわかる？

―姿を表わせ〈低級^{ゴースト}霊〉！」

クロエが声を掛けると、カイの周囲に、何十体もの
〈低級^{ゴースト}霊〉が出現した。

治療師^{ヒーラー}が、そのことに気づいたのか、悔しそうに顔を
歪める。

クロエが続けた。

「あんたが治癒魔法をかけてたのは、お兄の周りにい
る〈低級^{ゴースト}霊〉だっただってわけ！ 治癒地雷も同じ理屈よ。
わかった？ ―あーあ……あんたのせいで、〈低級^{ゴースト}霊〉
たくさん消えちゃったけど―」

モニカが首を振りながら、後退りしていく。

クロエがにこりと微笑んだ。

「大盤振る舞いしてあげる。へ食^グ屍^{ール}鬼^ルへ——地雷原を蹂^{じゅうりん}躐^{りん}して！」

才才才才才才才！

地面のあちこちから這はい出してきたのは――腐りきつた死体たち。濁にごった目をモーター力に向けると、一斉に彼女に向かつて殺到した。へ食屍鬼グールは生者を喰らうのである。「ひ……ひいいいいいっ！」

モ二力が恐怖に目を見開き、涙を流しながら尻もちをついた。

彼女の目の前で、治癒地雷を踏んだ死体たちが、内側から爆発したように弾け、赤黒い肉汁と化していく。赤、

黒、灰色、ピンク、紫——地雷原は、さまざまな色の染料をぶちまけた、じごくえず奇怪な芸術作品のようになっっていた。文字通りの——地獄絵図である。

「あ……ああ……ああ……」

モ二力の目が極限まで見開かれていく。なんとか逃げようとするが力が入らず、その足は地面をむなしく掻くかだけだった。彼女の目前まで迫った最後の一体が、治療魔法によって爆発すると——

バシヤアアアアッ！

——彼女の顔に、体に、あらゆるところに、腐くさった肉汁がぶちまけられる。魔法蟲に恐怖心を抑えられているとはいえ、本能的な恐怖は残っているのだ。体を硬直さ

せ、目をまんまるに見開いたモ二力は、一度ぶるりと震えと――

「ヒギイイイイイッ！」

奇妙な悲鳴を上げて倒れ――そのまま動かなくなつた。
「あらら……やりすぎちゃった？」

クロエが面白そうにぷつと吹き出す。見慣れているミリアでさえ、息をのみ、その凄惨せいさんな光景を見つめていた。
これが弱冠じやっかん十二歳の天才死霊術師ネクロマンサー――クロエ・ブラッディア。

死霊とともに生き、死体とともに育つた――可愛らしい悪魔あくまである。

カイは、ふうと長い息を吐くと、口を開いた。

「ありがとう、クロエ。助かった」

「ふふん！ お兄は私がいないとほんと駄目^{だめ}なんだから！」

クロエが腰に手を当て、胸を張ると――

「オレさまもいるぞ！ カイ！」

「ヴィー！ 無事だったのか！」「クロエと合流できたのね！」

ヴィーがひょこりと姿を現し、カイに駆け寄った。ミリアも声を上げる。

単身、転移^{ポーター}してきたクロエは、すでにヴィーと合流していたのだ。

「ちょっと！ いまはお兄が私を褒め称える場面でし

よ！ 邪魔しないでーっていうかお兄に抱きつくな！
このチビれった！」

「へへーん！ やだよーだ！」

四人はひとしきり再会を喜んだあと、クロエが持参した水薬^{ポーション}を飲み、立ち上がる。

体力も、魔力も、万全ではなかったが、合流したこと
で皆の士気は一気に高まった。

カイは三人にうなずくと、道の向こうをにらむ。

「残るはあと一人だ。ー行くぞー！」

ミリア、クロエ、ヴィーの三人は、それぞれの決意を
胸に力強くうなずいた。

シエルが、助けを待ってる！

ついに合流した四人――
〈^{オーバーキユア}超過治癒〉を操る^{ヒーラー}治療師――モニカ・アベルを撃退す。

* * *

とにかく――逃げなきゃ！

シエルは道を逸れ、森の中に分け入り、^{やみくも}闇雲に駆けていた。

深い^{したくさ}下草に足を取られ、つまずきそうになりながらも、王女は必死に走る。

「――どこまで逃げるつもりだ！ この森からは出られないぞ！ 観念しろおおっ！」

背後からキース会長の怒鳴り声が響いてきた。

また近くなってる……このままじゃ、追いつかれるわ！

シエルは気力を振り絞り、速度を上げる。

はあ、はあ、はあ――

息が荒くなる。後ろ手に縛られた手首がぎりぎりと痛む。走りにくい。体中が枝や鋭い草で傷つき、制服に血が滲^{にじ}んでいく。でも――

シエルは、自分を鼓舞するようにうなずいた。

――カイが絶対に助けに来てくれる。だからそれまで――

奥歯を噛みしめ、顔を上げる。

―時間を稼ぐ^{かせ}のよ！

後ろから迫ってくるキース会長の足音。必死に速度を上げたシエルだったが一

―え!?

左側の藪^{やぶ}の向こうに動く影を見つけ、彼女は硬直する。耳をぴんと立て、辺りを探るように目をぎらつかせて

いるその影は―

お……^{おおかみ}狼……！

灰色の毛の中型獣^{けもの}。鋭い牙と爪を持ち、人を襲うこともある恐ろしい獣である。

シエル王女は目を見開き、体を震わせた。

ど……どうしてこんなところに狼が……？

しかし詮索している場合ではない。幸い風下^{かざしも}にいたシエルは、すぐさま方向転換し、右方向へと逃げた。しかし――

な！

シエル王女は思わず息を飲み込む。なぜなら――
こっちにも!?

――方向転換した先から、枝を踏みしめる狼の足音が聞こえてきたからだ。

ど……どう……!? ――とにかくこっちはダメだわ！

足音が聞こえる方向を避け、シエルは元来た道の方へと斜面を駆け上がっていく。

混乱の中、彼女は考える。

まさか……狼の縄張りに踏み込んでしまったというの……!?

このままじゃ、キース会長に捕まる前に、狼に食い殺されてしまう！ 一体、どうすれば——
んっ！

シエル王女は思考を中断し、素早く腰をかがめる。灌木の向こうに、また狼の影が見えたからだ。

彼女はそこでふと気がつく。

おかしい……おかしいわ……

これじゃ、まるで——狼たちが私を追い詰めようとしているみたいじゃない！

司教^{ビショップ}の感知能力でも捉え^{とら}にくい獣の群れに、王女は困惑する。でも――

とにかく少しでも時間を稼いで、カイたちと合流するのよ！

シエルは一人うなずくと、縛られた両手を足の下にくぐらせ、前に持ってくる。靴^{くつ}を脱いで両手で持つと、思いきり、森の奥へと投げた。

靴が、枯れ葉の上に落ちる軽い音が、静かな森に響く。すると――

森のあちこちから狼の足音が、靴が落ちた方角に向かって移動し始めた。

音による陽動^{ようどう}である。

よし……うまくいった！

すかさずシエルは走り出した。

きつとキース会長も森の中にいるはず……。道まで出られれば、カイたちも私を見つけやすくなるわ――

王女の顔に明るさが戻っていく。

もうすぐ――会える！

苦勞して斜面を登っていくシエル王女。しばらくして目の前が開けてくると――

「やった！ 出られた！」

シエルは思わず声を上げた。森を抜け、元の道に戻ってこれたのである。

うん……たしか左から来たはず！ ここを戻れば――

一歩踏み出した瞬間――

「ツツ！」

彼女は息をのみ、体を固くした。こぼれるほど大きく目を見開く。なぜなら――

グルルルルル……

――なぜなら目の前に、巨大な狼が立っていたからである。シエルの背丈^{せたけ}ほどもある、その巨体。間違いなく魔獣^{まじゅう}の類――魔狼^{まろう}であった。

あ……ああ……

シエルは恐怖に凍りつく。体が震え、涙がこぼれ、奥歯がかちかちと鳴った。

逃げられない……逃げようとすれば――確実に殺され

る……

そして最悪なことに――

「やあ、シエル王女……ようやく再会できましたね……」

森からキース会長が姿を現した。その丁寧な言葉とは裏腹に、彼は――^{うらはら}激怒していた。目を吊り上げ、歯をむき出しにし、憤怒の表情を見せる。^{ふんぬ}

前には魔狼。後ろにはキース会長。

会長におとなしく従っている魔狼を見て、シエルは愕然とした。

ま……まさか……あの森の狼たちも――会長が操っていたというの……!?

では会長は聖騎士^{パラディン}ではなく――

混乱の中、王女は後ずさりする。

「さあ、王女。いまからあなたに――」

会長が奇妙な笑みを浮かべ、魔法蟲を瓶から取り出す。シエルの顔が青ざめた。

「――僕と同じ目に合ってもらおう！」

キースがシエルに駆け寄り、彼女を蹴り飛ばすと、その腕に蟲を近づける。ぬめぬめと粘液^{ねんえき}で光る蟲が触手を伸ばした。蟲は皮膚^{ひふ}を破って、体内に侵入できるのである。□から入れるよりも、さらに苦痛を感じる方法だった。

や……いや……や……

ひたり、と蟲が肌に吸いつく感触。シエルの全身の肌が栗^{あわだ}立ち、背筋に冷たいものが走った。彼女の白い肌が、粘液で汚されていく。

やだ……いやだ……やめ……やめて――

恐怖で動けない。喉が詰まって声が出せない。歯の根がかちかち鳴って、体があり得ないほど震える。

喉から、悲鳴の出来損ないのような音が、ひっきりなしにこぼれた。

うう……うう……ううう――

彼女が叫びたい言葉は――っだけ。

彼女が呼びたい名前は――っだけ。

シエルは、最後の勇気を奮い起こし――喉から絞り出

すように――その人の名を呼ぶ。

必ず助けにきてくれる。

私の側にいてくれる。

私の――私だけの――騎士。

その名は――

……た……け……

シエル王女は、渾身の力で――

……たす……けて……

彼の名を――

カ――

呼ぶ！

「カ
イ
イ
イ
イ
イ
ッ！
助けてええええええっ！！」

シエル王女の叫びが、森にこだました刹那^{せつな}――

「待たせたな――シエル」

シエルの目が、大きく見開かれていく。目の端^{はし}から、

涙があふれた。

――^{ひらめ}閃いたのは、黒い輝き。

「な――」

キース会長が声を上げた瞬間、彼は凄まじい速度で吹っ飛び――「がっ!」――木の幹に強烈な勢いで激突した。骨が砕ける乾いた音。彼にはなにが起こったかすら、わからなかった。

「グルルルッ!」

突如現れた男に、魔狼が牙を剥^むき、飛びかかろうとす

るが――

静かに振り向いた男の、その目を見た途端――とたん魔獣の全身の毛がぶわあつと逆立つ――魔狼は、ぴくりとも動けなくなつた。

「ググ……グルル……」

その男のまとう強大な力の気配。辺りの空気が重たくなるほどの重圧感。

この人間に襲いかかれば――確実に死ぬ。

そのことを悟つたのか、魔狼は尻尾しっぽを丸め、じりじりと後退し、やがて――

「キャウウウウツ」

――声鳴くと森へと逃げていった。

いちべつ
一瞥^{いちべつ}されたただけで、魔狼は死を覚悟し、逃げ去ること

しかできなかつた――

彼は威圧^{いあつ}したのではない。

殺意をぶつけたのでもない。

ただ――見ただけ。

見ただけで魔獣を圧倒する、強烈な死の気配を漂わせ

た男――彼はもちろん――

「カイ！」

――王国最高レベルの暗黒騎士、カイ・ブラッディア。

カイはシエル王女を振り返ると、声を上げた。

「シエル、動くな！」

すかさず踏み込むと、彼女の腕めがけて、正確な剣撃

を繰り出す。腕の魔法蟲を斬ろうとしたのだ。しかし

――
「しまった！」

魔法蟲はカイの剣先が届くより数瞬早く、シエルの腕に巻きついていった。その途端――

「うぐうううううっ！」

シエルが苦痛に声を上げる。魔法蟲が触手の先から爪のようなものを出し、腕に取りついたので。カイは剣を手放すと、力の限り蟲を掴つかみ、なんとか腕への侵入を防ぐ。

「く！ どうすればいい!? 魔法蟲に詳しいのは――」
カイが顔を上げ、叫んだところで――

「やってくれたな！ カイ・ブラッディアアアッ！」
――倒れていたはずのキース会長が、背後から斬りかかってきた。

「な!? いつの間に！」

さきほどの一撃で、かなりの重傷を負わせたはずである。起き上がるのは到底無理。それなのに、キースは立ち上がり、しかも気配を感じさせずに背後を取ってきた。

「これも蟲の力か!？」

カイが珍しく焦り^{あせ}の表情を浮かべる。背中に迫る会長の剣。魔法蟲を掴んでいるカイは動けない。手を離せば、蟲がシエルの腕に侵入してしまうからだ。カイが齒を食いしばり、一太刀食らうのを覚悟したそのとき――

「任せてーカイー！」

ー白と金色が、視界の端をかすめた。彼女は盾を前面に掲げ、キース会長の剣を受け止めるとー

「ひゅううー！」

ー防御の隙間から、連続攻撃を繰り出した。その恐るべき鋭さと正確さ。

「く！ソレルの聖騎士か！」

キース会長が思わず後ずさりする。彼女は、鉄壁の防

御を誇る盾の申し子ー

聖騎士の中の聖騎士、ミリア・ソレルである。

先行していたカイに、ようやく追いついたのだ。

彼女は振り返り、声を上げる。

「ヴィーならきつと何かわかるはず！ 診せてみて！

ーさあ、あんたの相手は私よ！」

ミリアが会長との戦闘に突入すると、ヴィーとクロエが、カイの元に走ってきた。

カイは蟲を搦んだまま、顔を上げる。

「ヴィー！ なんとかしてくれ！」

「うう……うぐううっ！」

王女が顔を歪ませ、苦痛にうめいた。その様子をみて、ヴィーが一瞬泣きそうな顔を見せるが、すぐに表情を引き締め――

「カイ、そのまま手を離すなよ！――シエル、オレさまがすぐ診てやるからな！」

ヴィーは王女の側にしゃがみこむと、魔法蟲に目を走らせる。賢者^{セージ}の持つ探知能力で、蟲とシエルの容態^{ようたい}を分析しているのだ。

クロエがはらはらしながら、ヴィーの顔を覗きこむ。

「まだわかんないの!？」

「黙ってる、コロリ！」

クロエに一喝^{いっかつ}して、一通り、検分を終えたヴィーは

――目を閉じ、唇を噛みしめた。

「ヴィー、どうなんだ！ シエルからこの蟲を引き剥^はがせないのか!？」

カイの問いに、ヴィーが辛そうに首を振る。

「……無理だ……。強引に引き剥がそうとすれば、この

蟲は強力な酸を出す。腕が溶けてしまえば、高レベルの
治療魔法でも治療は難しいぞ……。――無闇むやみに蟲を斬ら
なかつたのが不幸中の幸いだ……。――

クロエが泣きそうな顔になった。

「そ………そんな………シエル………」

しかし、カイは食い下がる。

「へ復元レストア」はどうだ!? ヴィーのへ復元レストアなら――」

言い終わる前に、カイも気がついていた。ヴィーが代
わりに答えを言う。

「腕が溶けるんだぞ? 耐えられる痛みじゃない!

――それに、溶けた状態から復元レストアできるかどうかもわから
ないんだ!」

カイが大声を上げた。

「じゃあ、どうすればいい!？」

「落ちつけ、カイ！」

グイーがばちーんつと、カイの両頬ほおを叩いた。カイは驚きの表情を浮かべたあと、詰めていた息を吐き、歯を食いしぼる。

「おまえが取り乱してどうする！　いいか？　まだ可能性はある！」

「それなら早く言ってよ、チビれった！」

クロエが声を上げるのに、グイーは顔をしかめてから、言葉を続けた。

「魔法蟲には親と子が存在するんだ。子蟲は、十分成長

するまで親蟲によつて制御されてる。シエルの腕に引つ
ついてるのは子蟲だ。だから、親蟲を探し出して処分で
きればー」

「子蟲の方も止まるということか!？」
カイの問いに、ヴィーがうなづく。

「やってみないとわかんないけどーそれしか方法がな
い！」

カイはすかさず顔を上げ、ミリアと会長の戦況を見た。
ミリアがかなり押されている。会長は蟲によつて強化
され、しかも奇妙な剣技を使うのだ。

加勢しないとまずい！

カイは一度自分を落ち着かせるように深く息を吐くと、

ヴィーに尋ねた。

「……親蟲はキース会長の中だと思っつか？」

ヴィーがうなづく。

「たぶん」

カイが続けて尋ねた。

「体内の魔法蟲を殺すにはどうすればいい？」

「……現状、そいつごとぶった斬るしかないだろうな

……」

カイは首を振る。

「それはできない。シエルがそれを望んでいない」

「わかるけど！ そんなこと言ってる場合か!? シエルだって許してくれる！」

ヴィーがつつかかるのに、カイは断固^{だんこ}として首を振った。

「俺はシエルの想いに応えると決めたんだ。――なんとかしてみせる」

ヴィーは反論しようと口を開いたが、ふんつと鼻から息を吐いた。

「好きにしろ！」

「すまん……ヴィー」

そしてカイは、最も重要なことを尋ねる。

「ヴィーなら――蟲の侵入を防げるか？」

ヴィーがキツとカイを睨^{にら}んだ。

「つたりめーだろ！ オレさまを誰だと思ってるんだ？」

天才賢者^{セージ}だぞ！　― 蟲とシエルの腕の間に^{アンチ・マテリアル}対物障壁^{シエル}を張ればいい！」

大声を上げるヴィーの顔を、クロエが心配そうに覗き込む。

「でも、チビれった……魔力がほとんどないんじゃないの……？」

「……う……」

ヴィーが珍しく顔を歪めた。それは本当のことである。魔力経路が焼き切れるほど、過剰に魔法を使ったのだ。回復もままならない状態である。

カイがヴィーを見つめ、静かに尋ねた。

「正直に言ってくれ。〈障壁〉を張るとしてーヴィーの

魔力が切れるまで、どのくらい猶予がある？」

ヴィーは悔しそうに答える。自身の魔力量を把握し、すでに計算していたのだ。

「……三十分。それが限界だ……すまん……」

「……チビれった……」

クロエが辛そうに、ヴィーに目をやる。

カイがうなずいた。

「わかった。シエルはヴィーに任せる。二人の護衛はお前だ——クロエ」

「え！ お兄、私も戦える！」

クロエが言うのに、カイはゆっくりうなずいた。

「わかってる……でも、さっきの魔獣が戻ってくるかも

しれない。ヴィーとシエルを守ってやってくれ。これは
ークロエにしかできないことなんだ」

クロエは、シエルとヴィーの二人に目をやると、唇を
噛んでうなずいた。

「……わかった……お兄」

「クロエはいい子だ。ーよし、ヴィー、〈障壁〉を張っ
てくれ」

ヴィーがうなずくと、すぐさま王女の腕と蟲の間に
〈障壁〉を展開する。青白く輝く極小の〈障壁〉。この精
度で〈障壁〉を展開できるのは、彼女を置いて他にはい
ない。

ヴィーがカイを見上げ、□を開いた。

「〈障壁〉の展開座標をシエルの腕に固定して、魔力供給源をオレさまに設定した。これでオレさまの魔力がなくなるか……オレさまが死なない限りー〈障壁〉は消えない」

「すまん……グイー……」

ふんつと、グイーは鼻から息を強く吐く。カイは慎重に蟲から手を離れた。

「うう……うぐうう……」

苦痛に顔を歪め、うなり声を上げるシエル王女。カイは王女に目を落とすと、額の汗をぬぐってやった。しばらく彼女を見つめてからー立ち上がる。

「シエルを頼む」

ヴィーとクロエがうなずくと、カイも目でうなずき返した。

三十分以内にキース会長を無力化し、その体内の魔法蟲を、会長を殺さずに処分する――

カイは決意も新たに、戦場へと駆け戻る。

* * *

く！ また妙なところから剣が来た！

ミリアの腕が薄く斬られ、血が滲む。彼女は会長相手に苦戦していた。

どこから剣が……？

キース会長の剣は、ミリアの防御をすり抜けるように、奇妙な角度から伸びてきた。通常では考えられないようなところから突然攻撃され、ミリアはダメージを蓄積させていく。

絶対におかしい……なにか仕掛けがあるんだわ！

「どうした、ソレルのミリア！ 聖騎士^{パラデイン}など所詮^{しょせん}、その

程度か？ 来ないなら——こちらから行くぞー！」

「あんたも聖騎士^{パラデイン}でしょ！ フルーゼのキース！」

キース会長は一度膝をぐっと落とすと——凄まじい速度で突進しながら、刺突攻撃を放ってきた。すかさずミリアは盾で「受け流し」を試みるが——

ミリアの目が見開かれる。

これは、完璧な正中線せいちゅうせんへの攻撃——受け流せない！

——その重たい一撃に、盾ごと後ずさりした。

〈受け流し〉は、相手の攻撃を打点からずらすことで、その攻撃力をいनाすスキルである。

したがって原理上、完全にずれのない重心への攻撃は——受け流すことができないのだ。

ミリアはその技量に驚嘆する。

盾での防御を熟知した聖騎士パラディンでなければ、この攻撃は

不可能——

盾を使わないとはいえ、会長はやはり——聖騎士パラディン！

素早い追い足で、キースがさらに踏み込んできた。

もう一撃——来る！

彼女は膝を曲げ、手首をしならせ、いつそふわりと防御体勢を取った。その全身の柔らかさがこそが、ミリアの防御の秘密である。

彼女は盾と一体になり、全体で一個の柔らか^{やわ}かな球となるのだ。

柔らかく変形する球を押しつぶすのは――不可能に近い。

これが盾の申し子、ミリア・ソレル。

キース会長の剣が迫る。その軌道はやはり、刺突。重心を悟らせないよう、ミリアは盾を揺らす。全身でぶつかるような刺突攻撃は強力だが、受け流せば、大きな隙が生まれるのだ。

その隙を狙う――

ミリアが不敵に笑った。

その刺突――受け流す！

会長の剣が――盾に触れる――その瞬間――

「……え？」

彼女が息をのむ。なぜなら――

ま、まさか！

――会長の剣が、盾の下から、伸びてきたからだ。

下から!?

その剣は、まるで生き物のようにしなり、正確にミリアの顎あごの下を狙ってきた。顎から脳へと貫く必殺の剣筋

ミリアは――

避けてえええっ！

――とっさに首をひねり、上体を思いきり仰け反らせた。剣先が顎から逸れる。体の柔らかいミリアでなければ、致命的なダメージを負っていただろう。しかし、そのミリアでさえ――

「くくうううっ！」

頬から耳へと剣撃を受け、斬れた金色^{きん}の髪の毛が舞い散った。

衝撃に後方へと弾き飛ばされながら、ミリアはなんとか会長を目の端に捉え、そして――歯を食いしばる。

すでにキース会長が――間合いを詰めていた。

うそ！ 追い足が速すぎる！

「ここまでだ、ソレルの聖騎士パラデイン！」

盾を避けるようにして、キースの奇怪な剣が、ミリアに迫る。

—まずい—やられる！

その正確な剣撃が、彼女の喉を貫く瞬間—

「避ける—ミリア！」

—背後からの声に、ミリアが極限まで体を仰け反らせると—

「うおりゃあああああ！」

彼女の顔の上を、黒い塊かたまりが、凄まじい速度で通り抜け

ていった。

それは大剣。空間が切り裂かれるような鋭さに、会長が目をむく。

「ちっ！ 暗黒騎士が！」

キース会長が交戦を嫌い、後方へと飛び退った。倒れそうになるミリアを支え、会長をにらむのはもちろん――

「カイ！」

――彼女の相棒、カイ・ブラッディアである。

カイはミリアの全身の傷を見て、顔を曇くもらせた。

「ずいぶんやられたな……深手ふかでではないが、傷が残って

はおじさんに申し開きできん……」

ミリアは、顔を覗き込む幼なじみを見上げてほっとし

たがーすぐに悪態あくたいをつく。

「こんな傷どうってことないわ。それよりカイ！ あんた私を殺す気？ 鼻が無くなるかと思っただじやない！」

カイがふつと笑った。

「お前なら、避けられるだろう？」

そのいつもの答えに、ミリアはふうと息を吐く。

「……当然でしょ？」

カイは、ミリアをしゃがませると、シエル王女の状態を手早く説明した。

なんてこと……。ミリアは愕然とし、唇を噛みしめる。

「休んでいてくれ。会長はー俺がなんとかする」

ミリアも、一緒に戦おうと腰を浮かせかけたがーダ

メージを負った自分では、カイの足手まといになると判断し、悔しそうにうなずいた。

ミリアが、カイの背中に声を掛ける。

「気をつけて。あいつの剣術はおかしいわ！」

カイはちらりとミリアを振り返ると、うなずいた。

「わかっている。おそらくキース会長は――」

カイは会長をにらみ、彼の元へと歩く。

――^{パラデイン}聖騎士ではない」

* * *

「やはり最後はお前か……」

キース会長の言葉に、カイは目を細める。

「会長殿。あなたを倒し、あなたの中の魔法蟲を――殺します」

会長が齒をむき出しにし、顔を歪めた。

「やってみるがいい、暗黒騎士！」

「では――」

カイが静かに下段に構えると、キース会長は正面で剣を立てる。

フルーゼ家は神聖系の家名。彼の構えも聖騎士然とし
た堂々たるものだった。
どうどう

学園屈指の強者が――ついに対峙する。
つわもの

しばしの沈黙。そして。

キース会長が息を吐いた瞬間――

「な!？」

会長が足元に目をやる。

――彼の足元に広がっていたのは、
刺激臭しげきしゅうを放つ――毒どくの沼。

暗黒魔法へ毒沼ポイズンである。

ずぶりと会長の足が沈んだ。

「くっ！ 魔法も使えたのか！」

キース会長が足元に気を取られている間に、カイは

――

「ッッ！」

すでに、彼の目前まで踏み込み、上体を引いていた。

腰をひねり、肩を逸らし、腕をねじる。引き絞った弓のように、圧倒的な力が上半身に溜まっていく。

その構えは――刺突。

会長が危険を感じたのか、反撃を諦め、カイから離れようと後方へ跳ぶ。

しかしそれは――最悪の選択だった。

直線的に逃げても、刺突からは逃げられない。

会長の顔が壮絶に歪んだ。

明確な殺意を込めて、カイは――

上半身に溜めた力を、回転させながら、一気に、一直線に、こじ開けるように――

「会長殿――お覚悟おおっ！」

―解放する！

その技―暗黒剣技〈羅刹^{らせつ}〉。

戦いを見ていたミリアが驚き、声を上げる。

「力、カイ！ 殺す気なの!？」

ねじ切るような回転力を与えられた、悪夢のような刺突が、会長の顔面に迫った。

その圧倒的な力の前に、キース会長の選択は―

―キャウウウウンッ！

突然、甲高い獣の声が響き渡った。なぜなら―

「むう！」

カイがうなる。

―巨大な獣が、〈羅刹〉を止めるため、剣先に飛び込

んだからだった。

会長がその隙に、後方へと大きく飛び退る。

その獣はさきほどの――魔狼。

〈羅刹〉の爆発的な威力により、その頭部が吹き飛んだ。しかしその直後――

「やはり、そうか……」

魔狼は光の粒子になると、消え去っていく。

確かな手応えが消え、何ごともしなかったかのように、魔狼は消えた。

キース会長が、カイをにらむ。

ミリアは、困惑の表情を浮かべた。

「な……どうということ!？」

カイが剣を振ると、口を開く。

「キース会長は聖騎士パラデインではない。会長殿は――」

カイは目を細めた。

「――召喚士サモナーだ」

「サ……召喚士サモナー!? クル―ゼの人間が!？」

ミリアの叫びに、会長が顔を歪める。

「言うな……言うなあ！ ソレルの聖騎士パラデインがああつ！」

クル―ゼ家は神聖家系。本来なら、キースも聖騎士パラデインになることを望まれていたが――

キースが震えながら、両腕を広げ、声を上げた。

「そうだ……そうだよ！ 僕は召喚士サモナーだ！ 僕は聖騎士パラデイン

には――なれなかった！ 神聖系の魔法が使えないから

だ！……おかしいか、ミリア・ソレル。無様だろう！
笑うがいい！」

ミリアが目を見開く。

キース会長にはあれほどの素質があるというのに、魔法が使えないだけで――聖騎士パラデインになれなかった……

神聖戦士家系の嫡子は、聖騎士パラデインになつて当然――
聖騎士パラデインになれなかったキースが、フルーゼ家でどれほど辛い立場にいたか――その辛さは、ミリアには痛いほどよくわかった。

「じゃ……じゃあ、あの狼は――召喚獣しょうかんじゅう……」

ミリアの言葉に、カイがうなずいた。

「全力で殺しに行けば、必ず出てくると思っていた。

「魔獣とはいえ、見事な覚悟だ」

「……黙れ……」

キースが、震えながら、声を上げる。

「黙れ、黙れ、黙れえええええっ！ お前らに僕の気

持ちなどわかるはずもない！ 神聖家系筆頭ソレルの

聖騎士と、暗黒騎士の分際で王宮聖騎士を^{ロイヤルパラデイン}目指そうなど

という、ふざけた奴にはなあああっ！」

会長が顔を^{そうぜつ}壮絶に歪め、叫ぶ。

「あの御方は！ 任務を果たせば、僕を^{パラデイン}聖騎士にしてく

れると言った！ いいか！ 僕は！ ^{パラデイン}聖騎士になる！

「お前らに――邪魔は――させないっ！」

うおおおおおおお――

会長が腰を落とすと、強烈な気合いを込めた。

筋肉が盛り上がり、制服がはじけ飛び、体中に血管が浮き出る。

会長の目が、怪しい紅色^{べに}に輝いた。

魔法蟲による、さらなる身体強化。

辺りが震えるほどの力の波動が、会長の体から溢れ出す。

ミリアが叫んだ。

「キース会長！ もう止めてください！」

しかし――彼女の言葉はもう、会長には聞こえなかった。

「くはははは！ これが蟲の力だ！ あの御方の力だ

あ！ 僕が召喚士^{サモナー}だと見破ったのは褒めてやる！ しか

しーだからどうした！　それがわかつたところで、僕の剣は見切れない！」

会長が地面を強烈に蹴って、カイ目掛けて突進する。

カイが迎え撃つが――

「くくっ！」

すれ違いざま、体中に剣撃を受けた。深手ではなかったが、鋭い切り口からは血があふれる。傷口が鋭いほど、血は止まりにくいのだ。

「カイ！」

ミリアの叫びに、カイがうなる。

キース会長の剣は、確かに見切りがたい。

接触の瞬間、会長の体が増えたかのように、奇妙な角

度から剣が伸びてくるからだ。

その技量には、カイでさえほんろう翻弄される。

だが――

カイは不敵に、口元を上げた。

「その仕掛けは――もうわかりました」

「な……なにい？」

キース会長が、カイを射殺さんばかりの目でにらむ。

「ならば我が剣――見切ってみろおおっ！」

二人が地面を蹴った。互いの間合いに入る。会長の剣は下から斬り上げる逆袈裟ぎやくけさ。そのときカイは――

会長の下からの剣を回避しながら――

「そこおおおっ！」

——キース会長の右上の、なにもない空間に、豪快な
袈裟斬りを放った。瞬間——

手応えあり！

会長が歯を食いしばり、後方へと飛び退る。カイの剣
先に残されたもの、それは——

——会長と瓜^{うり}二つの、黒い人影。

真^まつ二^{ふた}つにされたその人影は、ぶわあつと煙のような
粒子を残し、消えていった。

カイが剣を振り、再び構える。

ミリアが目を見開き、声を上げた。

「な……あれも……召喚獣……？」

キース会長が、カイをにらむ。

そう。それは――召喚魔。ファミリア

キース会長と瓜二つの姿形を持ち、彼の能力まで複製する召喚魔へ二重身ダブルである。

カイが、会長にうなずいた。

「会長殿。召喚魔ファミリアとの連携攻撃、お見事です。背後に隠れ、陰に潜み、巧みに別の角度から攻撃するもう一人の会長……一人だと思っていると必ずやられてしまう。なぜなら会長殿は――」

キース会長を静かに見つめる。

「――二人いるのですから」

会長は、自身の秘密を暴かれ、怒りに顔を歪めると

「だからーどうしたあああああっー！」
うなり声を上げ、さらにへ二重身^{ダブル}を召喚した。全身が黒みを帯び、血管が浮き出ていく。

会長の周りに召喚される、会長の影たち。
その数ー十六体。

通常の召喚限界を遥かに超える数である。
キース会長が、カイに剣を向けた。

「わかったところでー見切れるものか！」
会長が構えると、地面をー蹴る！

「死ねえええええっ！」
迫る会長と十六体の影。

カイは大剣を正面に立て、騎士の礼をすると――目を閉じた。

「いいえ、簡単なことです」

正眼に構え、カイはふうと息を吐く。

「会長殿が一人ではなく――」

静かに腰を落とすと――

「十七人いると思えばいいだけです」

――ゆっくり目を開いた。

「ほざけえええええっ！」

キース会長と、十六体のへ二重身^{ダブル}が、前後、左右、

上下、あらゆる方向から、あらゆる角度から、袈裟斬りで、刺突で、逆袈裟で、正面斬りで、必殺の剣技を用い

て、一斉に、一挙に、一息に、カイに襲いかかる。
その怒涛どとうのような剣撃の嵐あらし。その嵐を――
周囲で盛大な火花が散る。

――カイは――剣一本で――弾いた。

「な……なにいいいいっ!？」

カイを囲む、剣で創られた防御圏。

なん人たりとも侵入することを許さない、絶対防御領域。
域。

その名も――ソードテリトリー絶対剣域。

「け、剣での防御技だと!？」この化け物がああ!」

キース会長とダブル二重身たちが見せた動揺。それを力

イは――絶対に見逃さない。

防御圏が一瞬で消え、次の刹那――

「がはっ！」

――会長と十六体の「二重身^{ダブル}」すべてを貫く刃が出現した。そのあまりの速度に、腕が、剣が増えて見え、その刃がまるで花卉^{かべん}のように花開く。

カイの周囲に咲き乱れる鉄の華^{はな}――

暗黒剣技――「鉄血華^{てつけっか}」。

そして――

「ぎゃあああああっ！」

会長が悲鳴を上げた。〈鉄血華〉は敵の生命力をも奪^{アブソorb}う、吸収系剣技なのである。キース会長の生命力が根こそぎ奪われ、その生命力がカイに吸収された。

「^{ダブル}二重身」がかき消え、キース会長が、どうと倒れる。カイは残心^{ざんしん}して剣を収めると、会長に近づいていく。会長は蟲による無理な強化と、限界を越えた召喚、カイが与えた全身の傷とあいまって、息も絶え絶えとなっていた。

ミリアも、カイの側へと歩いてくる。

二人はキース会長を見下ろした。

神聖家系に生まれながら、^{パラデイン}聖騎士になれなかった男

―キース・クルーゼ。

震えながらも、会長は、最後まで意地を張り通す。

「蟲もろとも……僕を……殺せ……」

「見事な覚悟です。会長殿」

ミリアがカイに目をやった。

「カイ……どうするの？」

キース会長の体内には魔法蟲がいる。その蟲を殺さなければ――シエルは助からない。

魔法蟲は脳まで達すると、脳の下部に取り付いて肉腫にくしゅのようになる。そうになると、もう酸を出さなくなるのだ。その大きさは、ちょうどフルミほどだと、ヴィーから聞いていた。

カイはおもむろに、背中の大剣を引き抜くと――キース会長の目の前に持っていく。

ミリアが息をのみ、眉根を寄せた。しかし目は逸らさない。彼女も、会長の最期さいごを見届ける決意だった。

カイはふうと息を吐くと――

「^{アームズアルター}武装錬成――解除」

刃を消失させ、柄^{つか}のみにする。

「……え？　ま、まさか……カイ……」

ミリアが、カイのやろうとしていることに気づき、思わず声を漏らした。

カイはひざまずき、会長の頭を膝で挟んで固定する。

位置はわかつている……大きさも……

カイは柄を握りしめると、見えない剣を突き刺すように、柄を会長の顔に近づけた。ちょうど剣の切っ先が、蟲の位置に来るように調整する。

カイがやろうとしていること――それは剣の切っ先だ

けを〈錬成^{アルケミー}〉し、瞬時に解除して蟲だけを斬ることである。そのような繊細な錬成^{れんせい}技を成功させたことはなかったが、それ以外に方法はなかった。

カイは呼吸を整え、集中した。

目を閉じると、シエルの顔が浮かぶ。

キース会長を殺したら、シエルは悲しむだろう。自分の責任だと思うだろう。

そんな顔を見たくない。そんな思いをさせたくない。だから――

カッと目を開ける。

俺に力を貸してくれ、シエル！

決意を固めた瞬間――

「^{アームズアルター}武装錬成」——ショートソード！」

〈^{アームズアルター}武装錬成〉により、刃が切っ先から形成されていく。

何かを斬った感触にカイは——

「^{アルケミー}錬成」——解除おおおっ！」

——瞬時に錬成を解除し、刃を消した。

ど……どうだ!?

極度の集中で、手が大きく震える。精神力と属性力を使い果たすような、曲芸とでも言うべき錬成であつた。額から大粒の汗がこぼれ落ちる。

「ミ、ミリア、会長は……どうだ……？」

腰を浮かせ、荒い息でミリアに尋ねた。彼女はキース会長の頭部を確認し、心臓の鼓動を確認し、まぶたを開

けて瞳孔を覗き見ると――

「……やった……やったわ！　きつと成功よ！　魔法蟲

だけを――斬ったのよ！」

声を上げる彼女を見て、カイは――

「そ……そうか……やったか……」

――思わずバランスを崩し、すんと尻もちをついた。

カイは前代未聞の錬成技を成功させ、体内の蟲だけを斬ったのである。

会長は魔法蟲を斬った影響か、気を失っていた。彼の顔色が少しずつ戻り、筋肉の隆起が収まってく。目の色も、徐々に赤から元の色へと戻っていった。

カイは大きく長い息をつき、安堵に体を震わせる。

やった……やったぞ、シエル……！

「ミリア……シエルの様子を見てきてくれ……」

「わかった！ カイはしばらく休んでいて！」

ミリアにうなずくと、疲れ果てたカイは地面に大の字に倒れた。

火^ほ照^てった体に、大地の冷たさが心地いい。

横目でキース会長を見た。

「会長殿……蟲で強化されていたとはいえーその剣技は本物でした」

カイは自分たちを窮^{きゆう}地^{うち}に陥れた会長に、素直な賛^{さん}辞^じを

送る。

聖^{パラ}騎^{ディ}士^{イン}にはなれなかったものの、騎士の技術と召喚^{サモナー}士

のスキルを組み合わせ、強敵として立ちはだかった生徒会長ーキース・クルーゼ。

副会長のリッツも、書記のモ二カも、独自のスキルを縦横じゅうおうに操り、行く手を阻んだ。

俺が知らない強さを持った人たちが、まだまだたくさんいる……

カイは改めて思う。

最強への道はー果てしなく遠い。

カイは苦勞して立ち上がると、震えながら皆の元へと歩いた。

シエルの腕に取りついた子蟲は、親蟲を殺したことで動きを止めただろう。

あとは、生徒たちを連れて学園に戻り、今回の真相を突き止めるだけだ――

カイが近づくと、皆が□々に騒いでいる。

なんだ……？

ミリアが顔を上げ、珍しく――泣きそうな表情を見せた。

「カイ！ 蟲が――止まらない！」

「な……なんだと！」

カイが駆け寄り、苦しげなシエルに目を落とすと、ヴィーに尋ねる。

「どうしたことだ!? ヴィー！」

ヴィーが悔しそうに□にした。

「キース会長の中の蟲が……親蟲じゃなかったんだ

……」

カイが息をのみ、後退りする。

な……なんてことだ……

カイは奥歯を思いきり噛みしめると、声を上げた。

「親蟲はどこだ！　どこかにいるはずだろう!？」

そのとき――

「――ここにいますぞ」

背後からの声に、皆が振り返る。

「誰だ!？」

木々に囲まれた、苔むした岩の上に――男が立っていた。

カイは息をのみ、目を見開く。

――ひとめ
一目みて、その男がただ者ではないことがわかった。

対峙しただけで汗がにじみ、体が震える。

尋常ではない気配を漂わせた、その男は――
「親蟲を探しているのだろう？　それは――」
懷から瓶を取り出し、その中に目をやった。

「――この中だ」

瓶の中で蠢いているのは――魔法蟲。

皆が騒然となる。

カイが皆を手で制し、尋ねた。

「……お……お前が――あの御方か？」

男が目を細める。

「ああ。彼らに蟲を使ったのは――私だ」
体が震える。^{さむけ}寒気が走る。

カイにはわかってしまった。

自身が強くなればなるほど――相手の強さもわかる。

いまの自分では――

この男には、到底、敵^{かな}わない。

それもそのはず――

「……み……見て……あの……胸^{もんしやう}の紋章……」

ミリアの震えた声に、男の胸を見たカイは――絶句した。
な……

その十二枚の花びらをかたどった紋章は――

「^{ロイヤルパラディン}王宮聖騎士……！」

大陸最強と名高い、神聖アステリア王国、神聖近衛^{このえ}騎

士団――

その騎士団の上位十二名にのみ与えられる唯一無二の
称号――

最強の中の最強。

いつきとうせん

一騎当千の戦士。

ひやくせんれんま

百戦錬磨の強者。

ロイヤルパラデイン

――王宮聖騎士。

「……な……なぜ……王宮聖騎士が……？」
ロイヤルパラデイン

カイの問いに、男は当然のように答えた。

ロイヤルパラデイン

「王宮聖騎士が戦う理由など一つしかない。我が国を脅

はいじよ

かす存在を――排除するためだ」

カイは目を見開き、愕然とする。

「シ……シエルが、王国を脅かす存在だと言うのか

……？」

男は目を細め、カイを見つめた。

「王女だけではない。君もだ――若き暗黒騎士よ。君たち二人は今後、王国にとって危険な存在となるだろう。私は将来の禍根^{かこん}を断つため、ここに立っているのだ。

――国を守るためならば、私は――おぞましき蟲を使うことすら躊躇^{ちゅうちよ}しない」

皆が息を飲み、事態の大きさに混乱する。

相手は、王国を守護する王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}。

そして、シエル王女とカイは――将来、国を脅かす危険な存在――

混乱と恐怖に、皆が静まり返る。

男は一息吐くと口を開いた。

ロイヤルパラディン

「王宮聖騎士すべてが君たちを危険視しているわけではない。我らは同じ騎士団に属してはいても、一人ひとりが独立しているのだ。自らの意志で行動する自由が与えられている。――王宮聖騎士の中には君たちに与する者もいるだろう……だが――私は違う。はつきり言っておこう。私は――君たちの――敵だ」

彼は一人ひとりに目をやり、微かすかに悲しそうな顔をしたら。

「君らの戦いは見ていたよ。実に見事な戦いぶりだ。

――君たちには類まれなる才能があり、固い信念があり、守るべき仲間がいる。前途ぜんとう有望な素晴らしい若者たちだ。

……しかし――」

顔を上げた男の顔に浮かぶ、固^{じゆん}い決意。

「――私にも信ずる想いがあり、殉^{じゆん}じる誓いがある」

男は、長い槍^{やり}を一度振るうと、居^い住^ずまいを正した。

「改めて名乗ろう。私は王宮^{ロイヤル}聖騎士・序列十二位。槍^つ遣^か

いのフウカー」

胸に手をやり、腰をかがめると宣告する。

「第四王女と暗黒騎士の二名が、おとなしくこちらに来てくれれば――他の者たちは痛みのないよう――撃^{ほふ}で屠^{ほふ}ることを約束しよう」

な……！

カイは唇を噛んで、かすれた声を上げる。

「……断つたら……?」

「全員、ここで――死んでもらう」

カイは奥歯を噛み締め、皆を振り返った。

皆一様に青ざめた顔をしていたが――決死の覚悟をその表情ににじませている。

みんなには逃げて欲しかったが――

カイはその槍遣いを見上げた。

この男からは――逃げられない。

「みんな……すまない」

ミリアが、きじょう気丈に首を振った。

「シエルの命が掛かっているんだもの――命を張るには、十分すぎる理由だわ!」

「お兄……今度こそ……私も戦うから！」

クロエが泣きそうな顔で言うと、ミリアがその頭を撫なでる。

カイは、シエルを診てくれているヴィーに声を掛けた。
「すまん、ヴィー……。巻き込んでしまつて」

「ば……ばか言うな！ オレさまだつてもうー仲間だろ！」

カイが、皆が、驚きの表情でヴィーを見つめる。

ヴィーが初めて『仲間』という言葉を使ったのだ。カイは皆と目を見合わせると、力強くうなずいた。

「そうだな。すまなかつた。ヴィーはもう俺たちの仲間だ。力をー貸してくれるか？」

「おうともよ！」

皆も、己を鼓舞^{こぶ}するようになずく。

そうでもしなければ――絶望に、膝から崩れてしまう
だろう。

それほどに、この敵は別格の相手なのだ。

「さて……返答は如何^{いか}に？」

槍遣いが問う。

カイは答える代わりに、剣を抜いた。

男が――瞬、目を伏せる。

「そうか……承知した」

フウカが槍を構え、皆に目をやった。

「では――参る」

「ヴィーはシエルを頼む――各自散開！」

フウカが槍を手に――ふっと岩から飛び降りる。

カイたちが散開した。

ヴィーの魔力が切れ、シエルの腕に魔法蟲が侵入するまで――あと二十分。

体力も、気力も、魔力も、精神力も残り少ないまま、カイたちは――

この国で――いやこの世界で――最も相手をしたくない敵と対峙する。

最強にして最悪の敵――ロイヤルパラデイン王宮聖騎士。

迎え撃つは――

連戦で疲弊ひへいした暗黒騎士カイ。

全身に傷を負った聖騎士^{パラディン}ミリア。そして――

まだ実戦慣れしていない幼い死霊術師^{ネクロマンサー}クロエ。

魔力残りわずかの賢者^{セージ}ヴィーと、蟲の侵入にあらがう

司教^{ビショップ}シエル。

未曾^{みぞう}有の敵を前に、カイたちは、絶望的な戦いに――

身を投じる。

四章 最強 VS. 最強の行方

「全員で掛かるぞ！」

カイが叫ぶと、ミリアとクロエがうなずいた。

「わかった！」「了解、お兄！」

最初の攻撃は――

槍遣^{やりつか}いのフウカが地面にふわりと着地した――その瞬

間――

「スケルトンウォーリアー 困め――骸骨戦士！」

黒いツインテールを振り乱し、黒衣の少女が死^{しりよう}霊を

無詠唱召喚する。むえいしょうしょうかん

困むように、骨の戦士たちが地面から姿を表した。

ロングソードとラウンドシールドで武装した骸骨戦士スケルトンウォリアー

の群れ――

その数、なんと――四十九体。

渾身こんしんの多重召喚をやったのは――幼き天才

死霊術師クロエ・ブラッディア。ネクロマンサー

クロエが腕を上げ――

「攻撃いいいいっ！」

――命じながら振り下ろす。骸骨戦士たちが一斉スケルトンウォリアーにフ

ウカに殺到さつとうした。その様子はさながら骸骨がいこつの津波つなみ。骨の

戦士たちが我先にと敵目掛けて剣を振るう。しかし――

赤い光が閃く^{ひらめ}と――

「ちっ！」

クロエが舌打ち^{したう}した。骸骨戦士^{スケルトンウォリアー}たちが、千切^{ちぎ}れ、吹き

飛び、粉々^{こなこな}に崩^{くず}れていく。

それは――凄まじ^{すさ}い槍の一閃^{いつせん}。

何重にも罅^ひんでいた骸骨の包囲網^{ふうき}が、一瞬で吹き飛ば

される。粉々になった骨が、まるで吹雪^{ふぶき}のように飛び散

った。

その中心にいるのは――眼光鋭^{がんこうするど}い、王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}。

長い槍をくるりと回して、後ろ手に構えると、目を細める。

「無詠唱召喚でこの数とは……見事なものだ。だが骸骨

で私を止められるとは――む？」

何かに気づいたフウカは、空を見上げた。

彼の瞳ひとみに映るのは――飛んでくる、白い、牙きば。

その牙は――

「わが呼び声に応えよ――」

幼い死ネクロマンサー霊術師が腕を振り上げ――高らかに命じる。

「来い！――竜牙兵アアアッ！」
ドラゴントウスウォーリアー

「なんと！」

槍遣いが驚きの表情を浮かべた。クロエの投げた白い牙が、見る間に大きくなり、やがて形を成し――トカゲのような骨でできた巨体の兵士が現れた。見上げるほど大きな骨の兵。兵士は大型の片手剣かたてけんを抜くと――

シャアアアアッ！

―雄叫びを上げ、フウカに襲いかかる。

クロエが投げたもの、それは―^{ドラゴン}竜の牙。

彼女は準備していた牙を^{ぼうだい}媒体に、^{スケルトンウオーリアー}骸骨戦士より数段強

力な^{スケルトン}骸骨系不死者―^{アンデッドドラゴントウースウオーリアー}竜牙兵を召喚したのだ。

竜牙兵は「< 35の不死者。物理攻撃力においては、

狩^{リパー}魂霊をも上回る。

前回の戦闘で、クロエは、用意周到な敵死^{ネクロマンサー}霊術師に

辛酸^{しんさん}を舐^なめさせられた。

今度は彼女の番―

クロエが、可愛^{かわい}い顔に、不敵^{ふてき}な笑みを浮かべた。

同じ失敗は……二度としない！

「足止めして、スケルトンウォリアー骸骨戦士！」

「む！」

槍遣い思わず声を上げる。大量のスケルトンウォリアー骸骨戦士たちが彼

に群がり、その動きを封じた。そこで――

「狩れ――ドラゴントウスウォリアー竜牙兵！」

シヤアアアアアッ！

フロエが命じると、ドラゴントウスウォリアー竜牙兵が雄叫びを上げ、その剣で、

スケルトンウォリアー骸骨戦士もろとも敵を薙ぎ払った。

スケルトンウォリアー骸骨戦士たちの頭が、腕が、足が――飛び散る。

これは最初から損害覚悟の攻撃。スケルトンウォリアー骸骨戦士を犠牲にし

た、捨て身の一手である。

そこまですなければ、到底、ロイヤルパライディン王宮聖騎士には敵わな

のだ。

彼女が悲しそうに眉根まゆねを寄せる。

ごめん……ごめんスケルトンウォーリアーね骸骨戦士たち……

しかし――

う……！

クロエが目を見開いた。

槍遣いフウカがその場で回転すると――その勢いに跳

ね飛ばされるようにスケルトンウォーリアー骸骨戦士が吹き飛び、ドラゴントウースウォーリアー竜牙兵も――

一瞬で、粉々の白い塊かたまりとなつて、その場に崩れ落ちていく。

どう動いたのか、見えない。

何が起こったのか、わからない。

槍を振るったのかどうかすら、定かではない。

フウカが大量の骨の向こうで、片方の眉毛を上げた。

一筋の傷どころか、息さえすこしも乱していない。

これが王宮聖騎士——最強の中の最強。
ロイヤルパラデイン

骨の戦士たちが束でかかっても、どうにかできるような相手ではなかった。

死霊支配力を費やし、大量の不死者を犠牲にしても、傷一つつけれない。しかし——

クロエは、口元を緩める。

いままでの攻撃は、すべて時間稼ぎ。本命は——

「……なに？」

ロイヤルパラデイン 王宮聖騎士が——最強の騎士が——微かすかに眉根を寄せた。

粉々に砕け散っていく大量の骨にまぎれて――
いつの間にか、パラディン聖騎士が彼の間合いに踏み込んでいたからだ。

「行っけえ！ ミリアああああっ！」
クロエの叫びに、ミリアがうなずく。

槍の間合いは長いが、ふところ懷に飛び込めば勝機はある――
ミリアは最初から、槍遣いの間合いに踏み込むことを狙っていた。それを瞬時に理解し、クロエは自ら時間稼ぎを買って出たのだ。

たて盾を前面に掲げ、かか果敢に槍遣いに挑むのは――
パラディン鉄壁の防御を誇る聖騎士の中の聖騎士――ミリア・ソレル。

時間稼ぎありがと……クロエ！

ミリアは目前の敵をにらみ、盾を掲げて疾走^{しっそう}する。

震えそうになる体を無理やり押さえ、ひたすら走った。

彼女は――怖いのだ。

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士の間合いに入るということが、どれほど無謀^{むぼう}なことなのか、彼女は十二分に理解していた。

自分の剣技が通用するのか、敵の攻撃を防げるのか、一瞬でやられるんじゃないか――彼女の脳裏^{のうり}に最悪の状況が浮かんでは消えていく。

こわい……怖い！

ミリアは思いぎり齒を食いしばった。

でも！

彼女はキツと敵をにらみ、防御体勢を固めながらフウ
力に迫る。

私は防^タ御役！ 私の役目は――

攻^ア撃役^{タツカー}に――カイに――チャンスを作ること！

槍遣いフウカが、目を細めた。

すでに槍の間合い。

攻撃が――来る！

その刹^{せつ}那^な――

ゴウンンンッ！

「ッッ！」

――巨大な鉄槌^{てつづい}にでも殴られたような、強烈な衝撃が

ミリアを襲った。悲鳴すら上げられない。体がねじきれそう。倒れずに踏みとどまれたのが、奇跡だった。

ミリアは目を見開き、息をのむ。

い、いまのが――槍の攻撃!?

技の出などまったく見えなかったものの、おそろくいまのは――突^つき。

点攻撃である突きなのに、面攻撃されたような凄まじい衝撃だった。そして、盾を見て――ミリアの背筋を冷たいものが走り抜ける。

盾の上部が吹き飛び、紙きれのようにひしやげていた。
な……盾を――抜かれた――!

今回、ミリアが持ってきた盾は、ソレル家の武器庫か

らくすねておいたミスリル銀製ぎんのカイトシールドである。
強さと軽さを兼ね備えた逸品いっぴん中の逸品のはずだった。そ
れなのに――

一撃で!?

実力差があるのはわかっていた。敵かなわないのは理解し
ていた。でも――

ここまで差があるなんて！

ミリアが、美しい顔を歪ゆがませる。

彼女がその突きに耐えられたのは、とっさにへ受け流
しをを試みたからだった。

そうでなければ――頭を吹き飛ばされ、とつくに倒さ
れていただろう。

ミリアの足が、恐怖で止まりそうになった。だが――
それでも――

「行けええええっ！」

彼女は恐怖を押さえ込み、盾を構えて、再び駆ける。
敵への道を作るのは――私の仕事！

槍遣いフウカが眉を上げ、かすかに驚きの表情を見せた。
「いまの一撃を喰らって、突進してくる戦士がいるとは思わなかったからである。」

「ほう……強く、気高く、美しい。素晴らしい戦士だ」

フウカの槍が走った。その尋常ではない速度により、
槍の軌跡^{きせき}はただの赤い光としてしか認識できない。ミリアは――

集中！

彼女は両手で盾を支え、感覚を研ぎ澄とすます。直撃されたら盾が保たない。だから――

彼女はふううと息を吐くと、力を抜き、全身を柔らかいバネのようにした。

この極限状態で、ミリアの真価が発揮される。

――だから、その槍――

あろうことかミリアは、目を閉じた。

――受け流させてもらおう！

槍の穂先が、盾に迫る。ミリアに、その速度の攻撃は

見切れない。だが――

ぴくりとミリアが反応した。彼女は――

「そこおおおっ！」

―盾を繊細に操り、敵の攻撃を―
ロイヤルパラディン
王宮聖騎士が、はつきりと驚愕の表情を見せる。

―受け流した。

打点が逸れ、衝撃が大幅に減る。それでも、大型の魔獣に突進されたような衝撃が走った。彼女は歯を食いしばってダメージに耐えると、さらにフウカへと駆ける。ミリアは攻撃を見ていない。ミリアの目では、槍の速度についていけない。

彼女が感知しているのは―盾の振動。

槍の穂先が盾に届いた瞬間の振動を、彼女は指先で捉え、正確に受け流したのだ。

まさに神業。かみわざ

盾の申し子もうご、聖騎士パラディンミリアにしか成し得ない、超絶の
防御スキルである。

フウカが、さらに突きを放つが――ミリアは止まらない。
すべての突きを受け流しながら、突進する。

槍遣いまで、あと数歩のところまで――

「むう……ここまで受け流されるとは――では……これ
はどうだ？」

フウカの槍が走る。その攻撃は――
ミリアが唇くちびるを噛かんだ。

それは、完璧な正中線への攻撃。受け流せない――
直撃する！

だが――

彼女は、にやりとする。

それが――その攻撃こそが――ミリアが待ち望んでいた一撃。

槍の穂先が、ミスリルの盾を、紙きれのように貫通した感触に――彼女は目を開いた。

いまあああつ！

ミリアは渾身こんしんの力で盾をひねると、すぐさま盾を手放し、後方に倒れるように跳ぶ。穂先を避けきれず「ぐくっ！」肩口に傷を負ったが――上出来だった。

ミリアがやりたかったこと。それは――

ロイヤルパラディン王宮聖騎士がいぶかしげな表情を見せる。

フウカが槍を戻そうとすると――「なに!？」――盾が、穂先に引っ掛かっていた。

ミリアが□元を上げる。

彼女がやりたかったこと、それは、ほんの一瞬でも槍を封^{ふう}じること。

盾が引っ掛かったままでは、いかに王宮聖騎士といえども、完璧な攻撃はできない。

やった……やったわ！　あとは――

彼女が倒れながら、後方に目をやった。

ミリアの後方を駆けていたのは、もちろん――

カイがやつてくれる！

――頼れる相棒^{あいぼう}、カイ・ブラッディア。

カイはミリアにうなずくと――溜めていた属性力を一気に解放する。

暗黒属性力を溜めるために、カイは一連の攻撃に加わっていないかったのだ。

カイの狙い、それは――

「うおおおおおおおっ！」

カイは気合いを込め、一度目を固く閉じると――キツと目を見開いた。

属性力を全力解放し、全身の武装を変化させる
アルケミー
〈錬成〉の上位スキル――

そのスキルは――

フルアームズアルター

「〈全身武装錬成〉アアアアッ！」

ぶわああつと黒く禍々^{まがまが}しい瘴気^{しょうき}が吹き出し、カイの全身を覆^{おお}っていく。まるで爆発したかのように辺り一面に満ちていく闇色^{やみ}の霧^{きり}。その濃厚^{のうこう}な霧から、弾丸のように飛び出してきたのは――

「な……^{フルアームズアルター}へ全身武装錬成^{フルアームズアルター}だと!？」

――黒い死神^{しにかみ}のような戦士。

漆黒^{しっこく}のプレートメイル。凶悪な形のガントレット。無骨^{ぶこつ}なヘルム。闇を凝縮したような黒いマントが激しくはためく。

背中に背負った巨大な両手剣は、抜刀すると同時に
〈再錬成〉されていった。

黒い刀身に赤い血溝^{ちみぞ}が走り、その銘^{めい}が刻^{きざ}まれていく。

その剣の名は――死を招くものⅡ。
デスブリンガー・ツヴァイ

死を招くものの上位剣である。

鬼神のごときその姿。彼は死の化身。死そのもの――

正真正銘、全身全霊の――暗黒騎士。
しょうしんしょうめい ぜんしんぜんれい あんこくきし

ミリアはその姿を見て口元を緩めると、そのまま、ど
うと地面に倒れた。極度の集中と全身の傷により、満身
創痍そういの状態である。

「あとは……任せたわ……！」

カイは倒れた彼女を横目に、全速力で駆け抜けていく。

クロエが不死者を大量に消費して時間を稼すぎ――

ミリアが盾と自分を犠牲にして作った隙すきを狙い――

王宮聖騎士に迫るのは――

「任せておけ」

神聖アステリア王国、最強の暗黒騎士——カイ・ブラッディア。

カイは槍の引き際に合わせ、ロイヤルパラディン王宮聖騎士の懷へ飛び込んだ。

敵は槍を引きながら、ミリアの盾を振り落とそうとする。次の攻撃までのわずかな時間——

クロエとミリアが決死の覚悟で作りに出してくれた、かすかな隙。

その貴重な隙を——無駄にするカイではなかった。

カイは鋭く踏み込みながら——ばさりとマントを回す

と、後ろ向きになつた。

「なに……？」

槍遣いが、当惑の表情を浮かべる。即座にカイは――

「ふっ！」

――背後のフウカに向け、マントを貫きながら、鋭い斬撃ざんげきを放つ。カイは、マントで剣筋を隠し、槍遣いの不意を突いたのだ。

「く！ 初撃で〈遮蔽技クローキング〉とは！」

フウカが突然現れた剣に、体勢を引く。カイはすかさずその場で回転すると――

「ひゅうううううー！」

――今度は足を刈り取るように、低く、豪快ごうかいに薙ぎ払

った。風圧で地面が削れ飛ぶほどの凄まじい剣速^{けんそく}。刃先^{はさき}が空気との摩擦^{まさつ}で鳴り、奇怪な音を立てる。

「ちいつ！」

槍遣いが跳んだところで、カイは——二回転目の剣撃^{けんげき}を放った。

「……なに!？」

カイは回転力をそのままに、体勢を徐々に高くしながら、中段、上段と、回転数を上げながら、猛烈^{もうれつ}な勢いで薙ぎ払う。刃先が高く鳴き、まるで断末魔^{だんまつま}のような音が響き渡った。

コマのように回転しながら、下段から上段まで、辺り一帯をことごとく刈り取る回転剣技^{けんぎ}——その技——

「暗黒剣技――鬼哭^{きこく}――！」

しかし、敵もさるもの――いち早く技の特性を理解し、大きく後方へと飛び退^{ずさ}る。

だが――

それは、カイの予想通りであつた。

「な!？」

槍遣いが思わず声を漏^もらす。彼が着地するその瞬間――目の前に、カイが現れたからだ。

「高速移動スキルか！」

そのスキル――暗黒騎士スキル^{シャドウラッシュ}へ影走^{カゲドリ}。

そして、さらに驚くべきことに――

フウカが、驚愕に目を見開く。

―カイは移動中にすでに―刺突しとつの準備を終えていた。
ぎらりとカイの目が輝く。
狙うは敵の心臓しんぞう。

「こ、ここまでとは！」

ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士が声を上げる。

カイは、ひねった腰こしの、肩かたの、腕うでの回転力を、目の
敵目掛け、一気に、一直線に―

「うおおおおおおおっ！」

―解放する。

その最速最短の刺突技は―暗黒剣技〈羅刹らせつ〉。

「くく！」

しかし、〈羅刹〉が胸に達する寸前、フウ力は槍を地

面に突き刺し、腕の力で体を持ち上げ回避した。

最高のタイミングで放たれた、しんそく神速の回転突きへ羅刹ロイヤルパラディンがかわされた――さすがは王宮聖騎士。だが――

カイの連続攻撃はまだ終わっていないかった。

大きく踏み込む。腰を落とす。巨大な両手剣が次第ににじみ、ぼやけ、黒い影となつた。

カイは歯を食いしばり、槍遣い目掛けて、大剣を振るう。

超高速で無数の剣撃を放つ、その剣技は――

「うりゃあああああああ！」

――暗黒剣技へむじん無尽く。

カイとフウカの間で、無数の火花が散る。身の毛のよ

だつような硬質^{こうしつ}な音が響き渡った。

一連の連続攻撃。カイが押しているように見えたが、その実――

……当たらない！

――〈無尽〉の剣撃を、フウカはすべて槍で弾いていた。カイの体中から汗が吹き出す。急速に体内の酸素^{さんそ}が失われ、腕が重たくなっていく。

息が……保^もたない！　せめて――^{ひとたち}太刀だけでも！

カイは最後の力を振り絞り、空中で前転するように高速回転すると、垂直斬^ぎりを放った。

「ひゅううううっ！」

回転力を加味して一撃の威力を上げる暗黒剣技――

〈火^か車^{しゃ}〉である。

〈無^む尽^{じん}〉を無理やり止め、〈火^か車^{しゃ}〉を放ったカイだった
が――

「うむ……いまのはいい技だ」

――その大剣は、ぶざまに地面に突き刺さっていた。
く……

目の前に敵の姿はない。

フウ力はすでに、宙返りして後方へと飛び退っていた。

カイは敵はにらみ、歯を食いしばる。

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士フウ力の、その静かな表情。

彼は息さえ乱していなかった。それどころか、□元を
微^かかに上げ、笑みさせ見せている。

男は百戦錬磨の強者。カイの強さを知り、この戦いに
愉悦ゆえつを見出しているのだ。

一方、カイは荒い息を吐き、大剣たいけんを杖つえがわりにして震える体を支えていた。

失われた酸素を取り入れるため、カイは何度も深呼吸
する。手足が震え、力が入らない。

それもそのはず、四つの必殺剣技を休みなく連続で繰
り出したのだ。

体への負担は、計り知れない。

全身の筋肉が張り詰め、骨がきしみ、心臓が早鐘はやがねのよ

うに打ち、汗がとめどなく流れる。

そして槍遣いは――

「その歳で〈フルアームズアルター全身武装錬成〉が使えるとは……さきほどの幼い死ネクロマンス霊術師といい、盾の扱いに長けたパラディン聖騎士といい――私は、君たちを過小評価していたらしい……。許されよ」

槍を肩で器用に回転させながら、いつそ楽しそうに口にする。

カイは、震えた息を吐いた。

必殺剣技を連続で放つても――敵の息一つ、乱すことさえできない。

クロエとミリアの二人が、決死の覚悟で作ってくれた隙を生かすことができなかった……

ロイヤルパラディン
これが――王宮聖騎士。

最強の中の最強。

しかもフウ力は序列十二位。この実力で、ロイヤルパラディン王宮聖騎士の最下位なのだ。

「さて――」

槍遣いフウ力が、目を細める。

「準備運動はこれくらいでいいだろう」

カイが思いきり唇を噛んだ。

ここまでが準備運動……

カイの戦いを見守っていたクロエとミリアが、絶望に顔を歪める。

これほど……実力が違うのか……！

カイは奥歯を噛み締めた。

死霊支配力、残りわずかのクロエ。

満身創痍で、盾も失ったミリア。

必殺剣技を出し尽くし、打つ手のないカイ。

まほうちゅう

魔法蟲がシエル王女の腕に侵入するまで――あと十五分。

カイは震える体を起こし、大剣を構える。

策は何もない。だが、ここで倒れるわけにはいかな

い！

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士フウカは、とんとんと跳んで調子を整える

と――槍を構えた。

「さあ――はじめようか」

「お相手します！」

フウカがその返答に、思わず口元を上げる。
カイは自分を鼓舞^{こぶ}するように応えらとー
覚悟を決め、改めて最強の騎士に挑む。

* * *

ヴィーは、遠目からカイたちの戦いを見て、目を大きく見開いていた。

あ、あいつら……あんなに強かったのか……でもー
彼女は敵をにらみ、思わずごくりと唾^{つば}を飲み込む。

それでも、ぜんぜん敵わないって……
ロイヤルパラディン
王宮聖騎士のデタラメな強さに、怖い^{こわ}ものの知らずのヴ

イーでさえ恐れ慄いた。^{おそ}^{おのの}

戦闘が始まってから、すでに五分。

〈障壁〉に阻^{はば}まれた魔法蟲は、鋭い爪^{つめ}を王女の腕に食い込ませていた。魔力ぎりぎりのヴィーには、その爪^{つめ}で防ぐ〈障壁〉を張ることができない。魔力が切れるまで、もう十五分もなかった。

「ごめん……ごめんな……シエル……」

「うう……うううう……！」

王女が苦悶^{くもん}のうなり声を上げる。顔色は青を通り越して白くなり、その額^{ひたい}には大粒の汗が浮かんでいた。さらに悪いことに、蟲の体表から少しずつ酸がにじみ出し、シエルの皮膚^{ひふ}を焼き始めている。激痛に身を振^{よじ}るシエル。

会話をすることなど到底不可能だった。

ヴィーは王女の額の汗をぬぐいながら、カイの戦いやきもきしていた。

……ロイヤルパラディン王宮聖騎士は強い。べらぼーに強い。

悔しいけど、オレさまが全力で魔法戦闘しても、多分勝てない……

でも――

ヴィーには確信があった。

カイが、あのことに気づけば、絶対に――勝機はある！
彼女は唇を噛み、思わずつぶやいた。

「どうしてわかんないんだ、カイ……。オレさまが教えたこと忘れちゃったのか……。？」

ヴィーが独り言を言った、そのとき――

「……行つて……カイに――かは、がはっ！」

強烈に咳^せき込み、シエルは血を吐いた。痛み^{のど}に耐えようと、あまりにも力を入れすぎたため、喉^{のど}が切れたのである。

「シ、シエル！」

王女が唇を動かす。でももう声が出ないようで、その喉からは、悲鳴のような細かい音が漏れるだけだった。血まみれの唇を懸命に動かすシエルを見て、ヴィーは――

「……シエル……」

――目に涙をいっぱい溜めながら、王女の唇に耳を寄せる。

シエル王女は、途切れ途切れの、本当にかすかな声で囁いた。^{ささや}

「……力……カイに………教えて………あげて………」

ヴィーは息をのみ、顔を上げる。

「……な！　なに言っただ、シエル！　ここを離れるわけにいかないだろ！」

王女は、ぶるぶると震える手を持ち上げると――

「……シ………シエル………？」

――ヴィーの手に重ねた。

その手は熱を持ち、あり得ないほど震えていた。

シエル王女は、無理やり口元を上げる。

それは、ただ頬が引きつったようにしか見えなかった

がー

彼女は笑ったのだ。

微笑ほほえんだのだ。

そして、ヴィーの目を見つめる。

「……行くのよ……ヴィー……だつて……あなたはー」

ヴィーの目が、極限まで、見開かれていく。

「カイのー師匠ししょうでしよう……？」

耐え難い苦痛の中、魔法蟲に侵される恐怖の中ー

シエル王女は、ヴィーに、この場を離れ、カイのそこ

ろへ行くよう頼んだ。

カイに教えてあげて欲しい。

勝機があるなら、気づかせてあげて欲しい。

そしてシエルは――

ヴィーに、ここを離れる^{たいぎめいぶん}大義名分も与えたのだ。

師匠なのだから、弟子^{でし}に教えに行くのは当然なのだ

――と。

ヴィーは息をのむ。

くしゃりと顔を歪めると、大粒の涙が溢^{あふ}れた。

シ……シエル……

おまえは、ここで……それを言えるのか……

痛いだろうに……怖いだろうに……誰かに側にいても

らいたいだろうに……

シエル、おまえは――

ヴィーは歯を食いしばると、乱暴に涙を拭^ふく。

―なんてすごい奴なんだ！

シエルを一人残していくことに躊躇ちゆうちゆうはあつた。

魔力切れの賢者セージが戦場に行くことに恐怖はあつた。

でも―それでも―

ヴィーはにかりと笑う。

苦痛に震えるシエルに、無理やり笑いかけた。

「わかった！ シエル、任せておけ―」

ヴィーは力強くうなづく。

「カイの魔法の師匠である、この天才―ヴィレッタ・パウリさまになー！」

* * *

「なんと……暗黒騎士が〈受け流し〉を使うとは！」

「く！ くくくっ！」

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士・槍遣いのフウカの猛攻を、カイは辛うじて〈受け流し〉ていた。

光にしか見えない槍の攻撃を、剣の刀身を盾のようにして受け流す。

そのスキル――〈剣^{ソード}による受け流^{パリング}〉。

カイがたゆまぬ修練の末に身につけた、超絶の防御スキルであつた。

しかし――

槍遣いが、楽しそうに目を細める。

「では……少し変化をつけてみよう」

「ぐ！」

これまで突き一辺倒いっぺんどうだったフウカが、振り下ろし技や回転技といったトリッキーな攻撃を見せ始めた。その尋常ではない速度の攻撃に、多彩な技のバリエーションが加わっていく。

避け……きれない！

「受け流し」が間に合わず、カイは体のあちこちに攻撃を喰らい始めた。

「く！ くく！ ぐくくっ！」

二人の間で火花が散り、剣と槍の風圧で周囲の砂が盛大に巻き上がる。まるで二人は、台風たいふうの中心で戦っている。

るようだった。

「カ、カイ！」「お兄……！」

ミリアとクロエが、唇を噛む。明らかにカイの劣勢^{れっせい}である。

カイは歯を食いしばって防御に専念した。腕が重くなり、手足が震え、汗が流れる。

槍遣いフウカは、鎧^{よろい}の関節部分や装甲の弱い部分を的確に攻撃してきた。各部を守ろうと無理な防御体勢を取れば、大きな一撃が急所を狙って確実に放たれる。

上手^{うま}くて……強い！

直撃を喰らえば、勝敗はすぐに決してしまうだろう。それほどに、フウカの槍は鋭く、重いのだ。

集中し、神経をすり減らし、緊張感を持続させ、カイは果てしなく続く槍の攻撃に耐えながら――機会を狙っていた。

大きな刺突が来る前に、敵は必ず槍を引く。その瞬間を――

狙う！

そして、気の遠くなるような、しかし実際には数秒の攻防の末――

敵が、槍を、引いた。

カイが目を見開く。

――いま！

「ひゅっ！」

カイは鋭い呼気^{こき}とともに、満を持して神速の剣撃を放った。

一拍^{いっぽく}で二度剣を振るうという、相手のリズムを崩す凄まじい練度の剣さばきである。

「む！」

槍遣いがたまらず、体勢を崩した。カイは懷に一気に踏み込む。

この敵を崩すのに必要なのは、速度――限界を越えた剣速だ！

カイの答えは――

「^{アルケミー}錬成――部分解除！」

カイは死^{デスブリンガー・ツヴァイ}を招くもののⅡの^{アルケミー}錬成を一部解除し――

「なに!？」フウカが驚きに目を見開く。

―刀身にいくつももの穴を穿^{うが}つた。丸い穴が連なる奇怪な刀身。その意味は―

「な！ 剣を―軽くしたのか!？」
いち早く気づいたフウカが声を上げる。

そう。カイは大剣に穴を開け、重量を減らしたのだ。
カイは軽くなつた剣を、片手^{かたてけん}剣のように持ち直すと、
ガントレットを丸めて即席の鞘^{さや}を作る。すかさず半身に
なつて、ぐつと腰を落とした。

大きく踏み込む。息を吸い込み、止める。
繰り出すその技は―

「ま、まさか！」

「――避けられるか？」

鞘走ばうとうじゅつりを使つて剣速を加速する、サムライが持つ最速
抜刀術――

「へ居合ソードドロウ」だとおおおおっ!？」

「ひゅうううううっ！」

気合いとともに放つのは――疑似ぎじへ居合ソードドロウ。

本物のサムライには及およばないまでも、カイはあらゆる
スキルを盗もうと決め、一人精進しょうじんを重ねていたのだ。

それは、敵ではあつたが、自分を導いてくれた師への、
彼なりの手向けたむでもある。

精進を重ねたカイのへ居合ソードドロウは――太刀だけなら、
すでにへ無尽むじんをも越える速度を出せるようになってい

た。

加速された剣が、光となつて、弧こを描く。
空気が切り裂かれる音が刃やいばの後からついてきた。それは音速を越えた証拠。

かわせるはずが――ない！

カイ渾身の最速抜刀。光が敵の胸を斬り裂いたと思つた瞬間――

……な……

カイが、大きく、目を見開く。

――フウカは、紙一重で、カイのへ居合ソードドロウをかわしていた。

しかも敵は、体幹たいかんをわずかに逸らしているだけ。

その意味はつまり――彼は、カイの〈居合^{ソード・グロウ}〉を見たのだ。
見切ったのだ。

な、なぜ！　なぜいまの〈居合^{ソード・グロウ}〉を見切れる!?　そんなはずが――

フウカが口元を緩める。

見えるはずのない刃を、フウカは確かに――見ていた。
砂煙が晴れ、フウカの顔があらわになる。

その目は――

「な……に……?」

槍遣いの目が、青白く、煌々^{こうこう}と輝く。

フウカが、目を細めた。

「……私に固有スキルを使わせるとは……：：：なんと……暗

黒騎士……しかし――」

くるりと槍を回すと、下段で構える。

「^{ヴィジョン}へ直観」を発動した私に、もはや速度は通用しない。

理解したかね？」

カイが息をのみ、目を見開いた。

それはスキル。

槍遣いフウ力が持つ攻撃視認スキル――^{ヴィジョン}へ直観」である。

^{ヴィジョン}へ直観」に速度は通用しない。彼はどんな速い攻撃でも、

文字通り、『^み観る』ことができるのだ。

速度は、もはや関係ない。

音速だろうが、光速だろうが――速度では彼を倒せな

いのだ。

カイは愕然とする。

突破口だと思った速度による攻撃は、すべて無駄^{むだ}だとわかってしまった。

カイは思いきり歯を食いしばる。

打つ手が――ない！

そして、カイが立っている場所、そこは――
フウカが攻撃に転ずる。

――槍の間合い！

「くくっ！」

神速の槍が連続で放たれる。穴の開いたままの剣では、
まともにへ受け流し〜もできない。

とにかく、離れなければ！

カイは、剣を地面に刺して砂を巻き上げ牽制^{けんせい}すると、背後へと飛び退り、槍の間合いから離れる。しかし――

「……久方ぶりに心躍る闘いだっただよ。――だが、そろそろ仕舞^{しま}いだ」

フウカがふうと息を吐いた。

「君を連れていくのは無理だろう。ゆえに――ここで死んでもらう！」

そして――

な……

「がはっ！」

カイが叫び声を上げる。プレートメイルの左肩が吹き飛んだ。

「ま、まさか！」「嘘うそでしょ……お兄おにいいいい！」

ミリアとクロエの悲嘆ひたんの声が響く。

カイは突然の衝撃に、もんどり打って地面に倒れた。痛みに耐え、砂まみれの体を起こす。

そして――顔を歪ませる。

まさか……まさか、こんなことが！

カイは確かに、フウカから離れた。槍の間合いから距離を取った。それなのに――

「……驚いたかね？ この槍は宝具ほうぐ、王国から賜たまわった神槍しんそう――マイムールだ」

神槍マイムール。

神話に曰いわく、使用者の手を離れて、敵を打つ鉾ほこ――

その槍は――

カイが歯を食いしばる。

――遠く離れた場所まで、伸びた。

伸びた槍のいっせん一閃が、カイの左肩の装備を吹き飛ばしたのである。

すると槍が元に戻っていく。フウ力がくるりと槍を――神槍マイムールを肩で回し、構えた。

「伸縮自在のこの神槍……どこまで避けられる？」
ま、まずい！

カイはすぐさま起き上がると、地面を蹴って駆け出した。カイを追って、槍が高速に伸びてくる。

速度は見切られる。その上、間合いも――無限に広い。

懷に飛び込もうにも――槍の伸縮速度の方が速かった。そして、フウカは槍を、カイのすぐ近くの地面に打ち込むと――

「なっ！」

――槍を縮ませながら飛び、逆に自分自身がカイへと高速で迫る。

そんな使い方もできるのか！

この瞬間――広い戦場はすべて、フウカの間合いとなつた。

いつでも、どこにでも彼の槍が届く。

逃げられる場所^{あきらく}は、もうどこにもない。

「そろそろ諦^{あきら}めたまえ」

為^なす術^{すべ}もなく、槍の攻撃を喰らい始めたカイ。

伸び縮みする神槍。見切られた速度。

疲労の蓄積した体が重くなり、へ剣^{ソード}による受け流^{パリング}し
が出来なくなってくる。

装備が強烈な攻撃にひしゃげ、剥^はがれ、ひび割れ、壊^{こわ}
れていく。

ついにヘルムが弾き飛ばされ、額から血が流れた。

「ぐく！」

カイはもんどり打って倒れたが、歯を食いしばり、震
えながら立ち上がる。

伸びる槍の直撃だけは避けながら、なんとかフウカに
近づこうとするカイ。

全身の傷から出血し、血で剣を持つ手が滑る。汗が目に入り、顔をしかめた。もはや打つ手がない。実力が違いすぎる。

——強い！

圧倒的な実力差、絶望的な状況、切迫^{せつぱく}する事態——
満身創痍の体、壊れていく装備、出し尽くした剣技、
残りわずかな生命力——でも——
それでも——

カイはぼろぼろの体で立ち上がる。
血を吐きながら剣を構える。
震えながら地面を蹴る。

敵を倒すため――親蟲を殺すため――
シエルを救うため――

カイはこの絶体絶命のピンチにおいても、諦めていなかった。

カイは諦めない。

諦めることを知らない。

なにか……なにかあるはずだ！

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士として無敵ではない！

なにか、ないのか！

――そのときである。

「カiiiiiiiiッ！ 聞けえええええっ！」

……な……

危険な戦場に走ってきたのは――小柄こがらな天才賢者セージ。

シエルの容態を見ていたはずのヴィレッタであつた。
カイが息をのみ、目を大きく見開く。

「ば、ばか！　ヴィー、戻れ！」

「ヴィー、やめてええっ！」「なにやってんの！　チビれ
ったああああ！」

カイが叫び、ミリアとクロエも目を見開き、大声を上
げる。

この戦場に踏み込むということは――

「小娘が……死を覚悟してのことだろうな！」

槍遣いフウカが、ヴィーの姿を認めるやいなや、槍の
穂先を彼女に向けた。

まずい！

ヴィーが走る。フウカが攻撃を放つ。槍が彼女に迫る。危険を顧みず、ヴィレッタは―叫んだ。

「カイイイッ！ オレさまが教えたことを思い出せえええ！ そうすればお前は―」

「ヴィー、槍が来る！」

槍の攻撃に気づいたヴィーだった―彼女が顔を歪ませる―いま魔力を消費することはできない。ヴィーがせめて的を小さくしようと体を縮こませた瞬間―カイが目を見開く。

フウカの槍が―ヴィーの右胸を貫き―彼女は―「がはあっ！」

―後方へと強烈な勢いで吹き飛ばされた。

「ヴィイイイイイイイッ！」

カイが剣も構えず、ヴィーの元へと全力で駆け出す。

仲間を見捨てるカイではないのだ。

「愚^{おろ}かな……側面がガラ空きだ！」

槍を戻したフウカは、続いてカイに槍を放つ。無防備

なカイは格好の的。そこで―

「来い！ 食^グ屍^ル鬼ウッ！ ―支配力ぜんぶ！ 持つ

てけええええ！」

クロエが、カイとヴィーを守るため、ありったけの支配力を使つて食^グ屍^ル鬼を召喚した。

槍遣いとカイたちの間に、食^グ屍^ル鬼による壁ができる。

すかさずミリアが飛び出した。

「クロエ！ 二十秒保たせて！」

「わかった！ 早くヴィーを！」

クロエにうなずくと、ミリアは二人の元へと全速力で走る。

カイは――

血まみれになつたヴィーに駆け寄り、顔を壮絶そうぜつに歪めた。

「ヴィー！ なにやってるんだ!？」

ヴィーが苦痛に顔を歪めながら、カイを見上げる。

「……カ……カイ……」

「バカ！ しゃべるな！」

げほつと咳き込むと、ヴィーは血を吐いた。体を縮ませたおかげで、辛うじて急所は外れたものの、出血が長引けば命に関わる大怪我^{おおけが}である。

「……カイ……聞け……」

「黙ってる、ヴィー！」

しかし、ヴィーは――

「いいから聞けえええ！ オレさまは――シエルに頼まれたんだ！」

彼女の叫びに、カイは――息をのむ。

「……シ……シエルに……？」

そうしている間にも、食屍鬼^{グール}の壁が槍で貫かれていく。もう長くは保たない。

カイは唇を噛むと、黙ってヴィーの言葉に耳を傾けた。ヴィーが震えながら口を開く。

「……カイ……魔法だ……魔法を使え……」

「……魔法……？　俺が習ったのは一つだけじゃないか……それに――俺には、その魔法さえ使えない……」

そのとき、ミリアが二人のところに飛び込んできた。

「カイ！　ヴィーを連れていくわ！　応急処置しないと！」

遠くから「――もう保たないよおお！」とクロエの悲痛な声が響く。

「わかった……ヴィーを頼む！」

ミリアがヴィーを抱きかかえ、走り出す瞬間、血まみ

れのヴィーが――

「……カイ……笑え……」

途切れ途切れに、言う。

「……笑うんだ……!」

カイは、目を見開き、ヴィーを見つめた。

「もう行くわ!　カイ!」

ミリアが走り出し――

「――もうだめ!　逃げてええ!」

クロエが遠くから叫ぶ。

そして――

不死者の壁が貫かれ、食^グ屍^{ール}鬼の群れが吹き飛ばされた。

伸びた槍が辺り一帯を薙ぎ払い、カイは辛うじて攻撃を

避けると、大きく飛び退る。

ミリアは、なんとかヴィーを連れ、後方へと退避していた。クロエも、ヴィーの容態を見に走っていく。

槍遣いフウカが槍を戻し、カイに目をやった。

「さあーそろそろ本当に仕舞いにしようー！」

くっ！

凄まじい槍の猛攻が始まる。

速度と重さと広大な間合いを誇る、フウカの連続攻撃。

「ぐ！　ぐく！　くくくく！」

カイは槍の猛攻を避けながら、傷を負いながらーヴィーの言葉を思い出していた。

魔法……魔法だと？

俺がヴィーに習ったのは、光を曲げるだけの基本魔法じゃないか！

しかもそれすら、俺には使えない……
くくっ！

目前に槍が迫り、カイは飛び込むように前転してかわす。しかしすぐに一撃目が来た。地面を転がりながら寸でのところで槍を回避する。カイを追いかけるように、執拗しつように槍の穂先ほさきが迫った。

カイはなんとか起き上がると、強烈に地面を蹴って走る。

疲労で足がもつれ、速度が上がらない。
手足が震え、大量の出血により、目が霞かすみはじめた。

まるで泥の中を走っているかのように、体が重くなる。

このままでは……シエルを――助けられない！

カイは槍から辛うじて逃げながら、さきほどのヴィー
の言葉を思い出していた。

魔法……魔法を……使う……？

カイはヴィーとの訓練を思い起こす。

あるとき……

あるとき、ヴィーはなんて言っていた？

あの魔法を自分のものにできれば……？

そして、カイの脳裏のうりに、あの日のことが浮かぶ。

カイは思い出す。

あの日の――ヴィーの言葉を。

（―を完全に自分のものにしてみる）

（それだけで、おまえは―）

カイの目が見開かれていく。

（途方もなく―強くなれる）

途方もなく……強く……

強く―

あ―

カイの中で、何かががちりと音を立てた。

それは、意識が切り替わった音。

ヴィーの言っていたことが、胸にすんと落ちる。

すべてが―すべての断片が―カイの中で―集まり、

繋^{つな}がり、形を成していく。

……そうか……

そういうことか――

あの魔法は――

カイの脳内に、いま答えが弾ける。

光を曲げるだけの基本魔法。

槍遣いフウカの攻撃視認スキル。

光属性魔法剣。

そして――魔法を使うためには――

（……笑え……笑うんだ……）

大いなる力に身を任せ――力を抜くこと。

そうか……そういうことか……わかった……

カイの目に輝きが戻る。

わかったぞーグイー！

カイはーキツと顔を上げ、フウ力をにらむとー
「む？」

ーぼろぼろの体で、なけなしの力で、フウ力の目前
まで高速移動した。

それは暗黒騎士スキル〈影走^{シャドウラッシュ}〉。そしてー
「性懲り^{しょうご}もなく近接戦とは……速度で私にはー勝て
ん！」

フウ力が攻撃視認スキル〈直観^{ヴィジョン}〉を発動する。
彼の目が青白く輝いた。

速度は、もはや効かない。

どれほど速く攻撃しても、彼にはもうー届かない。

「終わりだ。暗黒騎士！」

フウカの槍が目の前に迫る。その鋭さと速さ。喰らえば、一撃で終わる。

その絶対絶命のピンチに――カイは――
無骨ぶこつで無愛想ぶあいそうな暗黒騎士、カイ・ブラツディアは――
「な……」

――笑った。

カイが思い出したのは、自宅で催もよおしたヴィーの歓迎会の光景。

両親がいて、クロエがいて、ミリアがいて、ヴィーがいて――

そして――シエルがいる。

皆が食卓を囲み、大いに食べ、さまざまなことを話し、笑いあった。

ふ……

その光景を思い出すだけで、カイは笑うことができた。大切な人たちと一緒に過ごした時間を思い起こすだけで、カイは幸せな気持ちになれた。

ああ……そうだ……そうしよう……

あの場所に……あの幸せな時間に帰ろう――

一人も欠けることなく、みんなで。

力が抜け――体が緩み――頑^{かたく}なだった心がほどけ――

そして――

大いなる力が、カイの体に――

―カイの魔力経路に―流れ込む。

魔力は腕を伝い、大剣へと流れ―やがて―

「まあいい……死んでもらう！」

フウ力が叫ぶ。

カイは―ふと、剣を振るった。

「………え？」

ぶしゅうつと、鮮血が飛び散る。その血は―

「………なぜ斬られている………？　確かに………避け

たはず………」

―槍遣いがよろめき、後退りあとずさりした。

肩口を斬られ、フウ力は息をのむ。

「それは―ミリアの分だ」

カイが告げた。

フウカが大きく、目を見開く。

確かに〈^{ヴィジョン}直観〉は発動している。彼に見えない剣撃は

ない。

そう――彼は、見える剣なら、どんな速度でも見切れるのだ。

カイは、大剣を手にも、ただ佇^{たたず}んでいる。

何の変化もない。前と変わった様子はない。

それなのに――

「な……なぜだ……この私に――」

フウカが驚きに目を見開き、カイに神速の槍を振るつた。

「―見きれぬ剣など―ない！」

だが―

「がはっ！　ぐくっ！　……な……なぜ……！」

フウカの右胸から、鮮血が吹き出す。彼は、信じられないというような顔をした。

「それは―ヴィーの分」

カイが静かに告げた。

槍遣いが混乱し、よろける。

「なぜ……なぜだ……避けたはずだ！　なぜ見切れない！」

カイは正面で剣を立て、騎士の礼をしてみせた。その剣に変化はない。

なにも変わっていないーように見えた。

だがー

それこそが、カイの答え。

ヴィーが教えてくれた、魔法の答え。

それはー魔法剣。

ヴィーが教えてくれたのはーただ光を曲げるだけの、

光属性の超基本魔法。

その名をー^{プリズム}〈偏光〉。

光を曲げるだけーそう、光を曲げー視^{しかく}覚^{ぞう}像^{ぞう}を捻^ねじ曲げる魔法。

カイが大剣に目をやる。

いままでと、なんら変化のない、その大剣。

しかしーその剣は、その剣の形をしていない。
そう見えるだけ。

アルケミー
〈錬成〉による剣の変形を、
プリズム
〈偏光〉で隠し、剣の形を
見誤らせる。

それがカイの答え。

それが、その剣の秘密。

その剣は大剣に見えるがー果たして、本当はどんな
形をしているのかー

視覚を頼りにしているフウカにはー見えない。
スキルを使おうとー目で見ようとする限りー絶対に
見えない。

槍遣いは、この剣筋を、見切ることはできない。

なぜなら――それは速度ではないから。

最初から――剣の形を見誤っているから。

いまだかつて、その魔法を、剣に応用した者はいない。
戦士系上位スキル〈錬成^{アルケミー}〉と、光属性魔法〈偏光^{プリズム}〉を
組み合わせた、前代未聞のその技は――

名付けて――

魔法剣――〈無明^{むみょう}〉。

カイがゆつくりと口を開いた。

「では王宮^{ロイヤルパラディン}聖騎士殿。存分に――死^し合^あいましょう！」
槍遣いが、足元の自分の血を見て、呆然^{ぼうぜん}とする。

魔法剣〈無明〉――

その剣は決して――真実の姿を見せない。

「……私に見切れぬ剣など……あるはずが――ない！」
槍遣いフウ力が、連続で刺突を放つ。

その鋭さ、重さは健在。

だが――彼にはわからないのだ。

カイの剣が、なぜ見切れないのか、わからない。

「ひゅうつ！」

カイが鋭く踏み込み、下段から斬り上げた。フウ力はその剣筋を、にらむようにして確認すると――確実に避ける。しかし――

「くくうつ！」

――胸元を斬り裂かれ、槍遣いは思わず声を上げ、後

退りした。

地面に飛び散る自分の血を見て、フウカは息を飲み込む。

「なぜだ！ 避けたはずの剣に――なぜ斬られる!？」
フウカは混乱の中、カイの術中に嵌^{はま}っていく。
カイは、わざと剣速を落としているのだ。

フウカに、よく見えるように――

フウカが、確実に避けたと思えるように――

見れば見るほど――〈直観^{ヴィジョン}〉を使えば使うほど――

「なぜ……なぜ……なぜ！」

――フウカは混乱の極に落ちていく。

カイは敵の様子を見て、剣の柄^{つか}を固く握りしめた。

俺の剣は――魔法剣〈無明〉は――王宮聖騎士ロイヤルパラディンに届く！

勝てるかもしれない――最強の騎士に！

装備は壊れかけ、体中に傷を負い、体力も、気力も、属性力も、もう残りわずか。

連戦に次ぐ連戦に疲弊ひへいし、最強の騎士との限界ぎりぎりの戦いに身を投じるカイに――

ほんのわずかな、希望が見えてきたのだ。

この機を絶対に逃せない――たとえば、この体どうなる
うと――

カイは、思いぎり唇を噛み締める。

――一気に攻める――

行けいっ！

カイが暗黒属性力を解放すると――フウカの足元に毒の沼が広がった。

それは暗黒魔法〈毒沼^{ポイズン}〉。フウカほどの上級騎士なら、当然毒耐性を持っており、毒は効かない。しかし――
「く！」

フウカが沼に足を取られ、体勢を崩した。

――足さばきを封じることにはできる。

そのわずかな隙を狙い――カイは、フウカの懷に潜り込んだ。

槍遣いの目が、大きく、見開かれていく。

カイはぐっと踏み込むと、腰をひねり、剣の柄を強く握る。

筋肉が盛り上がる。息を吸い込む。

溜め込んだエネルギーを、一気に解放する。

カイは叫ぶ。声を限りに叫ぶ。

放つは――無限の刃。

「騎士殿！ お覚悟おおっ！」

ぎしりとカイの筋肉がきしんだ。

大剣が揺らぎ、霞み、ついに――黒い影となる。

その剣技――

フウカの目が、見開かれた。

「暗黒剣技――^{むじん}無尽＜ツ！

瞬間――見えない無数の刃が、フウカ目掛けて、一斉に襲いかかる。

それはまるで刃の嵐。

魔法剣〈無明〉を用いた、暗黒剣技〈無尽〉。

カイは、光と闇の属性技を、一つの剣技として統合したのである。

その剣技――

名付けて――むみようむじんけん〈無明無尽剣〉。

それは回避不能の無限の刃。

フウカに、避けられるはずがない。

見ている限り、視覚に頼っている限り――避けられるはずがないのだ。

これで終わりだ！

カイが力の限り、剣を振るう――

しかし――

……な……

フウカの周囲で弾ける、目もくらむような火花。硬質な音が、二人の間で響き渡る。

カイが目を見開き、息を飲んだ。

見えないはずの剣が、無数の刃が、避けられないはずの剣技が――槍一本で――防がれる。

――なにiiiiiiiiっ!?

フウカは顔を伏せ、いつそ静かに、カイの渾身の剣技を、すべて最小の動きで弾いていた。

と……届かない！――なぜだ!?

今度はカイがたじろぐ番だった。

息が続かない。急激に腕が重くなる。体中から汗が吹き出る。体内の酸素が枯^こ渴^{かつ}し、カイの顔が青黒くなっていく。

く……くそおおおっ！

カイは限界まで剣を振るうと、悔しさに奥歯を噛み締めながら、飛び退った。

力が入らず、カイは思わず膝^{ひざ}をつく。がくがくと震える体。顔を歪めながら、カイは失われた酸素を体に取り入れるため、荒い呼吸を繰り返した。

な……なんてことだ！

カイ渾身の〈無明無尽剣〉が届かなかったのは――

顔を思いきり歪ませる。

―フウカが、カイの剣技を見切ったからに違いなかった。

なぜ……なぜ見切れた!? 目で見ている限り、スキルを使っている限り―

絶対に見切れないはず!

ふと、フウカが顔を上げる。その顔を見てカイは―

……な……

―息を飲み、絶句した。

フウカの顔に走るのは―赤い水平の線。

それは明らかに、槍で創つくられた傷きず。

彼の両目は、一直線に―斬られていた。

「……自分の目を……斬ったのか……」

カイがたじろぎ、硬直する。あまりの事態に動けなくなつた。

フウカの頬を流れる鮮血。それはまるで悔恨^{かいこん}の涙である。

槍遣いフウカが、ふうと息を吐いた。

「若き暗黒騎士よ……その剣技、見事と讃^{たた}えよう。よく

ぞその技にたどり着いた。へ錬成^{アルケミー}と光魔法を組み合わせ

せ、刀身を誤認させるとは……老兵^{ろうへい}には思いもよらぬ戦

い方だ。ふふ……皮肉なものだな……私は目が良すぎる

せいで――」

フウカが自嘲^{じちよう}の笑みをこぼす。

「逆に――盲目もうもくになっ
ていたようだ」

カイが、その血まみれの笑みを見て、思わず後ずさりする。

フウカは剣撃を喰らいながら、気づいたのだ。視覚に頼っても、カイの剣技は見切れないことに――

しかし、フウカは視覚系スキルに絶対の自信を持つ騎士である。カイの「見えているのに見えない剣技」に対しても、どうしても視覚を使ってしまう。目に頼ってしま
う。

ゆえにフウカは――自身の目を潰し、視覚系スキルを完全に封じたのだ。

目を潰し、スキルを封じること、なぜカイの剣技を

見破れたのか？

それは――視覚系スキルに使っていた膨大な属性力を、他の感覚に回したからである。

フウ力は、ちようかく きゆうかく しようかく聴覚や嗅覚、触覚といった視覚以外の感覚

に属性力を振り分けることで、体全体で周囲の状態を把握する、いわば、全身認知の感覚に目覚めたのである。

その感覚を使えば、カイの剣技を見破るなど――造作もない。

もはや、フウ力を欺くこと^{あざむ}とはできないのだ。

カイが目を見開き、目の前の王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}を見つめた。
これが王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}。

信念を貫くためならば、己の使命を全う^{まっとう}するためなら

ばー

自身の最も優れたスキルすら封じー

己の目さえもー潰す。

これが最強の中の最強。

一騎当千の戦士ーロイヤルパラディン王宮聖騎士。

フウカが口を開く。

「詫^わびなければならんな……若き暗黒騎士。許されよ

ー

槍遣いが、すうと槍を構えた。

その瞬間ーカイはとつさに飛び退く。フウカの周りの地面が、空気が、光が、震えているように思えたからだ。

……こ……これは――！

フウカが静かに続ける。

「君を侮り――」
あなど

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士が――その潰れた目を――カイに向けた。

「全力で戦っていないなかったことを――」

ツツ！

カイの髪の毛が逆立つ。背筋を冷たいものが一気に駆け抜ける。

目が潰れているにも関わらず、カイが感じた恐怖、それは――

――観られた――！

カイが恐怖を押し殺し、駆け出そうと一歩踏み出す刹

那ー

な!?

じくあし

軸足にー槍の穂先があつた。カイは混乱しながらも、
槍を弾こうと剣の柄を握り込む。しかし、次の瞬間ー
カイは圧倒的な恐怖に目を見開き、動けなくなつた。
なぜならー

ー刃の先を、槍の穂先が、押さえていたからである。
ツツツ!?

なぜと考えている暇ひまもない。思考はついていけない。
見たものを信じられない。

しかし、カイは混乱と恐怖をねじ伏せ、槍を斬り刻む
ためー剣技を放つ。

カイの筋肉が盛り上がる。奥歯を噛みしめる。

暗黒剣技〈無尽〉を放とうと、大きく一步踏み込もうとしたとき――

カイの喉から、悲鳴のような声が出た。

――足先を縫^ぬい止めるように、槍が、突き刺さっている。
な……なんだ……

カイの顔が歪んだ。

――なんなんだ、これは！

動く先に槍があり、考える前に槍がある。

カイは混乱する。困惑する。当惑する。狼狽^{ろうばい}する。恐

怖する。

わけが――わけがわからない！

避ければいいのか、止まればいいのか、跳べばいいのか、守ればいいのか、攻めればいいのか――わからない！――どうすればいいのかわからない！

技の出を止められ、バランスを崩したカイの目の前に――またもや――

うつ！

――神速の槍が迫っていた。

まるでそう動くことがわかっていたかのように、当然のように――槍がある。

ダメだ――避けられない！

カイが歯を食いしばった瞬間、足がずるりと滑った。力が入らず、膝が折れたのである。

それが不幸中の幸い――

辛うじて逸れた槍の穂先が、肩口をかすめる。その凄まじい衝撃に――「ぐくっ!」――カイは後方へと弾き飛ばされた。弾丸のように飛ばされ――「がっ!」――地面を何度もバウンドすると――ぶざまに転がり、土煙をもうもつと上げ、ようやく止まった。

く……く……く……く……

体中がばらばらになるような衝撃。全身の激痛に、カイは震えながら顔を上げる

肩のアーマーにぴしりとヒビが入ると――バリントツ――粉々になつて地面に落ちていった。

カイは呆然と、向こうに立つ、ロイヤルパラディン王宮聖騎士を見上げる。

槍遣いフウ力は、潰れた目で、静かにカイを見ていた。なにが起きたのかわからない。

どうしてこうなったのかわからない。

近くにいた者にはこう見えただろう。――カイが、自分から、槍の前に動いていると。

技の出だけでなく、足さばきや、剣の初動さえ見切られる――

いや、そうではなく――動くずっと以前に、止められていたのだ。

予想ではない。推測ではない。洞察でもない。

そう、それは、見切られたというよりも、むしろ――

背筋を怖おぞ気が走った。

—ま……まさか……

カイが目を見開く。

……予知……！

カイは、自分が狭い場所に押し込まれるような、強烈な閉塞感^{へいそく}を覚えていた。

未来の動きを封じられるということとは——未来の可能性を奪われることと同義なのである。

そしてカイは——フウカの背後に浮かぶ幻影^{げんえい}のようなものを見て、思いきり奥歯を噛み締めた。

カイがたじろいだ気配に、フウカが口元を上げる。

「ほう……これが見えるとは……やはり君は、類まれなる戦士のようなだ」

槍遣いフウカの後ろに浮かぶもの――それは――
巨大な、二つの、まぶた。

全身で周囲を把握する感覚は――全身で世界を『識^しる』
スキルへと昇華^{しょうか}された。

それはフウカが長年追い求めていたスキル――彼はい
ままで視覚に頼りすぎ、感覚のバランスを崩していたの
だ。目を潰したことで、彼はそのことにようやく思い至
ったのである。

答えはすでに、彼の中にあっただのだ。
速度に関係なく世界を観るスキル^{ヴィジョン}〈直観〉を越えた

――
時間に関係なく世界を識るスキル――

その名も――

「〈達識達観〉――開眼^{かいがん}」

巨大な目が、ゆつくりと、見開かれていく。

それは未来を識り、未来を観る、予知予見の心眼^{しんがん}――

彼は、周囲の状態が変化する直前に、あらゆる可能性を探索し、未来の状態を識ることができる。

それはほとんど――予知の領域である。

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士・槍遣いのフウ力が、静かに口を開いた。

「さあ、若き暗黒騎士よ。いままでの非礼^{ひれい}を詫^わび――」
カイが奥歯を噛み締め、壮絶に顔を歪める。

「――全力を持ってお相手しよう」

五章 二人の絆・二人の力

「ークロエ、早く！ 走るのよ！」「ま、待って、ミリ
ア！」

ロイヤルパラデイン王宮聖騎士の本当の実力を垣間見たミリアとクロエは、
きず傷を負ったヴィーを連れ、すぐさま戦場から離れた。

二人とも恐怖でがたがた震えている。

ミリアは振り返りながらも、全速力で走った。

あれは強いなんてものじゃない……本物の化け物だ
わ！

聖騎士ミリアにも、死霊術師クロエにも、王宮聖騎士

の人間離れした強さがわかった。

強者は強者を知る――腐屍竜戦を乗り越えて強くなっ

ていた二人だからこそわかる、次元の違う強さである。

あの槍遣いと同じ戦場に立っていたという事実には、二

人は今さらながら戦慄した。

こうして生きているだけで奇跡。

そして――一人はこうも思っていた。悔しかったが、
そう思わざるを得なかった。

――自分たちには、なにもしない。

あそこにいても、カイの邪魔になるだけ……

ミリアが悔しさに、青ざめた顔を歪めるが――

ーでも！

彼女は泣きながら走るクロエを見て、傷を負ったヴィーに目をやりー覚悟^{かくご}を決める。

私がしつかりしなきや！ できることをするのよ！
ミリアは、シエル王女が横たわっている場所まで走ると、立ち止まり、すかさずヴィーを寝かせた。

「クロエ……クロエ！ ヴィーの傷口を押さえて！」
呆然^{ぼうぜん}としていたクロエがびくりと体を震わせると、涙を拭^ふいてうなずいた。クロエも混乱しているのである。

「わ……わかった！」

クロエがハンカチを取り出し、ヴィーの傷口を押さえるがーハンカチは見る間に赤く染まり、クロエの指か

ら溢^{あふ}れていく。

「ああ……！」

クロエが顔を歪めた。出血を止めない限り、長く保たないのは明らかである。

「チ……チビれった……大丈夫よ……ぜったい大丈夫だから！」

クロエは、自分自身に言い聞かせるように繰り返した。ヴィーが震えながら目を開け、荒い息を吐く。

「……だいじょーぶ、だいじょーぶつて……おまえらきょうだい兄妹は……同じことを言うなーげほー！ げほっー！」

ミリアが声を上げ、クロエが涙目になる。

「ヴィー、しゃべらないで！」「お願いだから黙ってよ！」

チビれった！」

咳^せき込んだヴィーは、苦しそうにしながら続けた。

「……シエル……は……？」

ミリアがシエルの様子を見て、眉根^{まゆね}を寄せ、涙をこらえる。

「う……腕^{うで}が……」

シエルの腕は蟲^{むし}からにじみ出る酸性の体液によって焼けただれていた。〈障壁〉は辛^{かる}うじて蟲の侵入を防いでいるが――ヴィーの魔力が尽き、〈障壁〉がなくなるのも時間の問題である。

「……シエル……ごめん……なににもできなくて……」

「ううう……ううう……！」

シエル王女が苦悶くもんのうなり声を上げる。

残まほうちゆうされている時間はあとわずかだった。

魔法蟲まほうちゆうに侵されつつあるシエル王女。

じゆうしょう
重傷を負ったヴィレッタ。

全身傷だらけのミリア。

しりよう
死霊支配力の枯渴こかつしたクロエ。

そして――

本気を出した最強の戦士――ロイヤルパラデイン王宮聖騎士と戦っている

カイ。

戦場から漂ただよってくる圧倒的な力の気配に、皆が震える。

「……や……やばいぞ……」

ヴィーが辛つらそうに口にする。彼女の感知能力は、鋭敏えいびん

に敵の能力を感じ取っていたのだ。

「先読みなんかじゃない……あいつの能力は、ほとんど――未来予知だ……」

グイーが顔を歪め、掠^{かす}れた声で言う。

「そんな奴と……どう戦えっというんだ……」

「……な……なんてこと……」「……お兄……」

ミリアとクロエが息をのみ――絶望に震えた。

* * *

どうすれば……どうすればいい!?

カイはまだ辛うじて立っていた。一方的に攻撃を受け、

装備はあらかたヒビ割れ、壊れ^{こわ}、吹き飛ばされている。体中に傷を負い、血まみれになっていた。

カイは槍の攻撃が一瞬止んだところで――ふっ！――地面を剣で掘り起こし、砂煙^{すなけむり}を上げる。煙幕^{えんまく}にまぎれて、距離を詰める作戦である。しかし――

「な!？」

踏み出した足を槍で払われ、カイはぶざまに地面に倒れる。顔をしかめ、目を開いたカイの鼻先に――すでに、槍があつた。よ――

避^よけろおおおおおっ！

首を思いきりひねってなんとか槍をかわすが、「ぐく！」頬^{ほお}を斬^きり裂かれ、鮮血^{せんけつ}が飛び散る。地面を転がり、

体をひねって跳ね起きると、すぐさま後方へと大きく飛び退った。

頬をぐいと拳で拭き、再び剣を構えると、フウ力を睨む。

な……なんて強さだ……

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士フウ力は一度、肩でくるりと槍を回すと、静かに構えた。

技の巧みさ、神速の槍さばき、一撃の威力——どれを取ってもカイを遥かに上回り、その上装備しているのは、伸縮自在の神槍マイル。

そして、極めつけは——

予知に匹敵する〈直観〉の最上位スキル——〈達識達

観る。

技の出は封じられ、足さばきは先んじられ、剣の挙動も押さえられる――

カイはぎりりと奥歯を噛みしめる。

打つ手が……ない……

ここまで圧倒的な敵と対峙したのは、初めてのことであった。

全身が震え、体が芯から冷たくなる。

敵は最強の中の最強――王宮聖騎士。

これほどまでに……強いのか！

すべてが後手にまわり、カイは見る間に追い詰められていく。

体中の筋肉が悲鳴を上げていた。これまでの連戦で体力はすでに底をつき、疲労^{ひろう}が蓄積された手足が震え、目が霞^{かす}みはじめる。剣技^{けんぎ}を放つことはもう難しかった。

はあ、はあ、はあ――

荒い息を吐き、カイは汗をぬぐう。

手も足も出ない……剣が届かない……近づくことさえ難しい……

だが――カイは唇^{くちびる}を噛み締め、絶対に、諦^{あきら}めるわけにはいかない。

この男を倒さなければ――シエルを救えないんだ！
もう時間がない。生命力も残りわずか。
いま攻めなければ――

カイは大剣に目を落とすと、覚悟^{かくご}を決めた。

――永遠に勝機は――ない！

カイはさらに後方へと跳^とぶと、剣を正面に立て、息を吐く。腰^{こし}を落とし、目を閉じると、集中した。

戦場で目を閉じるなどあり得ないことだったが、そうでもないかと力を集められそうもなかった。その力とは――暗黒属性力。

槍遣いが片方の眉^{まゆ}を上げる。

「……距離を取るつもりか？　そうはさせんぞ！」

フウ力が槍を振りかざし、跳ぶように駆けてくる。カイは恐怖に押しつぶされそうになりながら、集中した。

この男に敵^{かな}う技も、速さも、力も、俺にはない。

この男の予知を覆す、柔軟さも持ち合わせていない。
だから――

唇を噛み締める。

足りないのは――意表を突く武装。敵が予想だにしな
い武器。

ゆえに――カイは集中する。属性力を溜めるため、集
中する。

精霊を信じ、大いなる力に身を委ね、大気から、大地
から、力を集め、凝縮し、練り、全身に流していく。
力が集まる。力が溢れる。

迫るフウカ。近づく足音。音が速くなる。大きくなる。
もう目前。

「ここまでだ、暗黒騎士！^{あんこくきし} 貫けーマイルール！」
フウ力が豪腕^{ごうわん}を振るう。猛烈^{もうれつ}な速度で近づく槍。槍の
後方で衝撃波が弾ける。音速を遥かに越えた槍がカイを
襲う。

その瞬間――

カイはカツと目を開いた。

その力、集めた暗黒属性力を、体を伝わせ、腕に流し
――一気に、手の中へ――

――握った大剣の中へ、流し込む。

「うおおおおおおおおお！」

カイは叫ぶ。カイは錬成^{れんせい}する。再び錬成する。

その練成で生み出す剣は――

「^{アームズアルター}武装練成」

声を限りに宣言した。

「来い！　—^{デスブリンガー・ドライ}死を招くものⅢ イッツー！」

見よ。無骨な大剣が厚さを増し、さらに巨大に、^{まがまが}禍々しく練成されていく様を。

黒々とした表面が一気に形成され、不吉な赤い血溝が、複雑な文様のよう^に刻まれていく。

その忌まわしき姿は、まさに死への^{みちしるべ}道標。

剣の名は—^{デスブリンガー・ドライ}死を招くものⅢ。

名前のおり、Ⅱの^{ツヴァイ}上位剣である。

槍遣いフウカが^{アルケミー}「練成」を感知し—いぶかしげな表情になった。

「そのような分厚い剣で何が斬れる！ 愚策だつたな、暗黒騎士！」

槍遣いがトドメを刺そうと、さらに槍の速度を上げたとき――

フウカが、今度こそ――驚きにたじろぐ。なぜなら――
「な……その武器は！」

カイの手の中の武器は――

「二刀だとおお!?」

――縦に二つに割れ、巨大な二振りの剣となっていた。
一刀と思わせて二刀――これがカイの狙い。敵の予想を上回る武器。カイは両手に大剣を握り込むと、腕をク
ロスさせながら――

「うおりゃあああああああ！」

ー振り抜く！

カイは片手剣を扱えない。バランスが崩れるからである。しかし、両腕で寸分たがわず同じ動きをすれば、バランスが崩れないとわかっていたのだ。

そのヒントはーフウカやキース会長の攻撃。二人は、盾の正中線へ完璧な攻撃を仕掛けていた。〈受け流し〉すら許さない、完全な重心への攻撃。

カイは自身の正中線を意識し、左右で完全に同じ動きをすることで、バランスを取ったのである。

二刀による、間合いも軌道もまるで違う攻撃に、フウカがー「ぐくー！」わずかに体勢を崩した。

カイが目を見開く。

来た――

いまが――このときこそが――

「好機ッ！」

剣技^{けんぎ}を十全に放てる状態ではなかったが、この機を絶
対に逃せない。

この体^{つらぬ}がどうなろうと――最速剣技で――フウ力の心臓^{しんぞう}
を――貫く――！

カイは力を振り絞る。すべての気力を奮い起こす。
動け、俺の体！ 放て、我が剣技！

そしてカイは――再び宣言する。

「死^{デス}を招くものⅢ――^{リングガ！ドライ}〈結合〉！」

フウカの顔が驚愕^{きょうがく}で歪んだ。なぜなら――

「な……今度は――一刀だとおおおっ!？」

――両手の二刀を、再び一つの剣へと〈結合〉したからである。

一刀にして二刀。そして――二刀にして一刀。

これがカイの答え。

キース会長の蟲を斬ったときの、繊細な錬成技の経験がなければ、^{たど}辿り着けない結論である。

カイはすかさず剣を引き、体をひねる。腕をひねり、拳を回し、回転力と運動力を溜める。そして――強烈に踏み込みながら、槍使いの心臓目かけ、全身に溜めた回転力を、一気に、一直線に――

その大剣による、カイ最速の暗黒剣技〈羅刹〉——
己のすべてを賭けた、渾身こんしんの一撃が決まった。

カイは歯を食いしばって顔を上げる。もう体が動かない。とつくに限界を越えていたのだ。それでも——

ぐぐ……

カイは立ち上がる。完全に……完璧に……奴を……仕留める！

泥のように重たい体を引きずって、カイは震える足を踏み出した。そのとき——

「ぐ……やってくれたな……暗黒騎士いいいつ！」
フウ力が顔を上げる。憤怒ふんぬの形相ぎようそうでカイを見上げた。

その胸の傷は――

ああ………！

ちめいしよう

――致命傷ではない。殺しきれなかった。

だが――深手を負わせたのは確か。あと――撃食らわせれば――

勝てる！

あと――太刀！

カイが、剣を構えた、その瞬間――

………え？

カイの目が、限界まで、見開かれていく。

パリンツツと、硬質な高い音をさせ――

な………

―大剣が―ガラスのように―砕け散った。

柄つかの部分までもが砕け、粉々に壊れ、地面に落ち、手には―何も―

何も残らない。

無茶な錬成技と、強烈な刺突の衝撃に、剣が―耐えきれなかったのだ。

あ……ああ……ああ……！

カイは呆然と、空になった、両手を見下ろした。
ない。

何もない。

剣すら失った。

生命力も、体力も、気力も、魔力も、属性力も―

もう、何も、残されていない。

カイが壮絶に顔を歪めた。

うううううううう！

これでは助けられない。

シエルを――救えない！

カイは崩れるように膝をついた。影が、静かに、彼を覆っていく。

カイが、顔を上げ、思いきり歯を食いしばった。

目の前に立っているのは――最強の中の最強――

「ぐく……ま、まさか、これほどの戦いを見せるとは

……見事なり暗黒騎士！」

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士が槍を振り上げる。

「貴君^{きくん}に――誇^{ほこ}りある死を！」

* * *

「なにか……なにか手はないの!？」

ミリアが憔悴^{しょうすい}しきった顔で叫ぶ。

制服のシャツを破って、ヴィーの傷口を縛り、ある程度の止血を行^おった。手足や服は赤く染まり、まるでミリアの方が大怪我^{おおけが}を負ったように見える。

シエル王女の様子を見ていたクロエが――声を上げた。

「そ……そうだ……そうだよ！ お兄の、あの力！」
クロエの言葉に、ミリアが顔を上げる。

「あの力って……腐屍竜戦ドラゴンズビのときに見せた、あの力のこ
と？」

「そう！ あの力があれば、王宮聖騎士ロイヤルパラディンも倒せるんじゃない!?」

ミリアは考える。

確かに……確かにあのときカイが見せた力があれば、
なんとかなるかもしれない……

でも……

でも——どうやって？

「……あれは……カイだけの力じゃ……ないぞ……」
少し落ち着いてきたヴィーが、か細い声で言った。
それでも依然いぜんとして、危険な状態である。

「ヴィー、無理しないで……お願いよ……」
ミリアが言うのに、ヴィーは首を振った。

「どーせカイが勝てなきや……オレさまたちも……シエルも……助からない……」

ミリアもクロエも黙り込む。それは、紛れもない事実だった。

ヴィーが苦しそうに顔を歪めながら続ける。

「あの力はカイだけじゃなく……カイに生命力を与えた奴に秘密がある……純度の高い神聖力を持った奴が――鍵^{かぎ}だ」

「純度の高い……神聖力……」

ミリアは思わずシエルを見た。

自身のレベルは低いのに、高レベルの神聖治癒魔法を
使いこなしているのは――

「シエルだわ！　彼女の神聖力はきつと高純度のはず
よ！」

ミリアが言うのに、ヴィーは目を閉じ、ふうと息を吐
いた。

「そうか……そういうことか……それがもしかして、今
回の誘拐事件の真相かもな……」

「どうということ？」

ミリアの問いに、ヴィーが答える。

「あの王宮聖騎士は、シエルだけじゃなくて、カイも寄越
せと言っただろ？　二人の属性力が合わさると、ものす

「ごい力が生まれるって知ってたんだ……利用しようとしたのか……それとも――」

そこでクロエが割り込んだ。

「ね、ねえ！ 真相はともかく、結局、お兄がシエルの生命力を吸収すればいいってことでしょ！ それなら――あ……」

彼女が声を上げるが――そのことに気づき、眉根を寄せてうつむいた。

そう。仮にそうだとしても――方法がない。

ミリアが辛そうな顔で、クロエの肩を抱いた。

「こんな状態のシエルを戦場へ連れて行くことはできないし……カイをここに連れてくることもできないわ

……」

クロエがうつむき、肩を震わせる。

クロエだけではない。誰もが奇跡にすがりたいのだ。

でも――結局、なににもできない……方法がない……

皆が静かになる。

そのときである――

「……私が……行くわ……」

皆が目を見開いた。シエルが――苦痛にうめいていた
シエル王女が――ぶるぶると震えながら、体を起こす。

腕は赤黒く焼けただれ、薄く煙が上がつていた。^{うす}

生きながら焼かれるその痛みは、耐え難いもののはず
である。

それでも――

それなのに――

「……カイの……ところに……行く……！」

シエルが壮絶な表情で、立ち上がろうとする。腕に力が入らず、もがくように身を振よじった。

ミリアとクロエは――

「ば、ばかあああ！ シエル！」「やめて！ やめてよお
お！」

――泣きながら、彼女を止める。

見ていられない。

自分の心配より、カイのことを心から思っている彼女の悲痛さを――直視できない。

「……行か……せて……」

「だめ！ 絶対にだめ！」「シエル！ やめて！ 死んじやうよおお！」

シエルは――唇を噛み締めた彼女は――

「う……うう……うううう……！」

――涙を流した。

その涙は自分のためではない。苦痛のためでもない。それは――カイのため。

一人戦っているカイのため、苦しんでいるカイのため、痛みに耐えているカイのために流す涙。

ミリアも、クロエも、ヴィーも、泣いた。

シエル王女の悲しみを思っ泣いた。

カイのために泣いた。

すがりつく奇跡の欠片かけらすら、もはやない。

絶望の淵ふちに沈む四人。

だが――

じやりと砂を踏む音が響く。

満身創痍まんしんそういの彼女たちの前に、それは不意に現れた。

現れたのは――奇跡。奇跡の欠片。

それは――

シエルが、ミリアが、クロエが、ヴィーが――目を見

開いた。

「……あ……あなた………：………！」

シエル王女の途切とぎれ途切れの声に――三つの影が答え

る――

* * *

――まだだ……

立ち上がることさえおぼつかないカイだったが、それでも――諦めていなかった。

まだ生きている。

まだ――終わらない！

「さらばだ！　勇猛^{ゆうもう}なる暗黒騎士よ！」

フウカの槍が迫った。直撃すれば、一撃で終わる！

――かわせえええええええええええええええっ！

カイは力の限り、叫んだ。

「^{フルアームズアルター}へ全身武装錬成——解除！」

武装が剥^はがれ、光の粒子となつて消えていく。

その身軽になつた体で、カイは、辛うじて槍をかわすと——走り出した。

すかさず土をつかみ、槍遣いの顔目掛けて投げる。

「く！ もうよせ！ なぜ諦めない!？」

フウ力は土の当たつた顔をしかめると、いつそ悲しそうに槍を構えた。

「承知した……塵芥^{ちりあくた}と化すまで諦めないというのなら

——仕方あるまい。我が奥義で、魂^{たましい}ごと滅するのみ！」

槍遣いフウ力が気合いを込め始める——

武装を解き、ぼろぼろの制服に戻ったカイ。
槍がかすっただけで、確実に、すみやかに、死が訪れる。

それがわかっていて――

それを完全に認めていながら――

カイは――諦めない。

必死の形相で、決死の覚悟で、槍遣いから距離を取る。

策はない。

打つ手はない。

勝てる見込みなど欠片もない。

それでも――カイは諦めない。なぜなら――

「はあああああああ！」

ロイヤルパラディン
王宮聖騎士が、辺り一帯を震わすように、気合いを込める。

「うおおおおおおお！」

カイも、それを打ち消す勢いで、吠える。

なぜなら――

それがカイだから。

カイ・ブラッディアだから。

無謀むぼうさではない。傲慢ごうまんさではない。尊大そんだいさでもない。

カイは知らないのだ。

ただ、知らない。

諦めるといふ言葉は、カイにはない。

それが王国最強の暗黒騎士――カイ・ブラッディア。

カイは、諦めることを、知らない！

そのとき――

「む!？」

フウカの注意が逸^それる。

カイは――息をのんだ。

「カイイイイイイッ！ 戻^もつてええええ！」

叫びながら走ってきたのは――^{パラディン}聖騎士ミリア・ソレル。

さらに驚いたことに――

「お兄いいいい！ シエルのところに！」「オレさまの命令だあ！ 戻れ、カイイイッ！」

――妹のクロエと、重傷を負ったはずのヴィレッタまでもが走ってきた。

「な……なぜ！　なぜー動ける!？」

なぜならー

「それはー私が治療したからです！」

その声はー

長い髪的女子生徒が、スカートを振り乱して姿を現す。

「あ……あなたは!？」

そう、彼女はー超過治療を操る治療師^{ヒーラー}ーモ二カ・ア

ベルである。

「な……どうしたことだ!？」

カイが驚きの表情を浮かべた。

槍遣いフウカは、戦場に足を踏み入れた女子生徒に、

すかさず槍を向ける。その瞬間ー

「むう！ 邪魔をするか！」

― 無数の矢が、フウカに降り注いだ。すべて槍で叩き落とされたが、邪魔をするのには十分である。

その矢を放ったのは―

「まさか……あなたは！」

「ふふん！ 一度、王宮聖騎士と戦ってみたかったんだ

ロイヤルパラディン

よ！」

― 副会長にして、レアスキルを持つ高レベル聖射手

アーチャー

― リッツ・ローエン。

そして―

「愚かな……一気に片付ける！」

槍遣いが、槍を伸ばし、辺り一面を刈り取るように振

るう。しかし――

「な！ 貴様もか！」

――黒い人影が数十体も現れ、フウカの槍を止めようと殺到した。その影、召喚魔^{フアミリア}へ二重身^{ダブル}を操るのはもちろん――

「キース会長！」

――生徒会長にして、高度な剣術スキルを持つ召喚士^{サモナー}――キース・クルーゼ。

キース会長がカイに駆け寄ると、彼の体を起こした。

「謝罪は後でさせて欲しい……本当にすまなかった……。君が、僕の中の蟲を殺してくれたおかげで、モ二力やりツツも、蟲の支配から逃れることができたんだ！」

カイが目を見開く。

「そ……そうか……二人の親蟲だっただのですね！」
モニカとリッツが、うなずいた。

ミリアが近寄って続ける。

「みんな^{おとり}囃として出てきてるのよ！ シエルのところに
戻って！ —あの力を使うのよ、カイ！」

皆が決死の形相でうなずいた。

「あの力……？ ^{ドラゴンズンビ}腐屍竜戦のときの!? しかし！」

「行って、カイ！ そして—早く戻ってきて—！」

「お兄！ 早く！」

「カイ！ ^{ししやう}師匠の命令が聞けないのか！」

ミリアが、クロエが、ヴィーが、□々に叫ぶ。

み、みんな！

カイの顔が歪んだ。

囧になるなど、正気の沙汰さたではない。

相手は王宮聖騎士ロイヤルパラディンなのだ。敵が本気を出せば、数瞬で

――全滅する。

しかし、カイは――

目を固く閉じ、歯を食いしばった。そして――

覚悟を決める。

「わかった！　すぐに戻る！　それまで――耐えてくれ！」

皆が声を上げ、うなずき――槍遣いと対峙たいじした。

恐怖に震える体で、フウカの行く手を阻はばむ。

熱を持った体が燃えるように熱い。彼女の体は絶え間なく震えていた。

ああ……！

カイはシエルを――抱きとめる。

その折れてしまいそうなほど細い体を、優しく包み込んだ。

「すまない……すまないシエル！　俺がもつと気をつけていればこんなことには――」

シエルは、カイの胸に顔を埋めると、首を振った。

「……いいえ……カイが無事で……よかった……ほんとに……よかった……」

カイは思わず奥歯を噛みしめる。

こんなときにまで、シエルは、カイのことを思っているのだ。

―カイに怪我がなければいい。

―カイが無事ならそれでいい。

カイは改めて思う。

俺は、シエルに守られてばかりだ―

そして―いまからまた、シエルの力を借りることに
なる。

生命力を吸収することになるのだ。

治療師^{ヒーラー}モニカの魔法で、幾分回復したシエルだったが、

それでも―

シエルの体が持ちこたえられるのか、わからない。

カイは、シエルの肩にそつと手を置き、体を離す。

彼女の蒼白な顔を見て、我知らず眉根を寄せた。

カイの顔を見て、シエルは、そつと口を開く。

「カイ……私を見て……」

「……シエル……」

シエルは微^{かす}かに口元を上げた。無理やり、笑みを見せた。

「こう見えて……私……強いのだ……だって――」

彼女は誇らしげな表情で、カイを見つめる。

「だって私は……カイの……^{となり}隣に立つ……人間だもの

……」

カイは思いきり唇を噛んだ。

シエルが続ける。

「私も戦うわ……カイと一緒に……戦う！」

ああ――

カイは思う。

シエルは――ほんとうにすごい人だ。

強い人だ。

カイは唇を噛み締め、シエルを見つめた。

そして――心の底から、ありったけの想いを込めて――
□を開く。

「わかった……シエル。お前の――命をくれ」
シエルがうなずいた。

「カイ――私の命を使って」

瞬間——彼女の体から光がほとばしり、カイの中へと吸い込まれていく。

「くくうううううっ！」

シエルが辛そうにうなり、眉根を寄せた。

それは暗黒騎士スキル——〈吸収^{アブソーブ}〉。

相手から生命力を譲り受けるスキル。純度の高い神聖力が溶け込んだ、清^{きよ}らかな生命力が、一気に、一息に、カイの中へと吸い込まれていく。

カイの中に強烈な光が流れ込む。カイの中に命の奔流^{ほんりゅう}が溢^{あふ}れかえる。

カイの体内の魔力経路が輝くと——神聖力と暗黒力が互いに速度を増しあい——落ちていく。深く、深く、深く、深

くー落ちていく。

相反する二つの属性力が、混じり合い、溶け合い。
光と闇の二つの力が、絡^{から}み合い、繋^{つな}がつていく。
それはまるで、カイとシエルの二人が、手を取り合っ
ているようー

シエルは震えながら、うめきながら、目の前の大切な
人を見つめる。

彼女にとって、自分の苦しみなど、辛さなど、なにほ
どでもなかった。

シエルはカイの姿を見て、溢れそうになる涙を懸命に
堪^{こら}える。

ああ……カイ……

こんなにぼろぼろになつて――

こんなにひどい怪我を負つて――

こんなに疲れ果てて――

彼女が眉根を寄せ、辛そうにカイを見た。

剣を無くし、装備も壊れ、体力も、気力も、魔力も、生命力も、属性力も、ぜんぶ失った、こんなひどい状態なのに……あなたは……あなたはそれでも――

シエルは唇を噛み締めた。

――私を助けようとしてくれたのね。

――私を守ろうとしてくれたのね。

堪えきれず、彼女の目から、涙が溢れる。

ありがとう……ありがとう、カイー

私は……あなたに守られてばかりだわ……

彼女は目を閉じ、うつむいた。

ーでもー

シエルが目を開け、顔を上げる。

だからー

彼女の瞳ひとみに、力が宿る。

今度はー私が守るー

シエルの体が、輝きを帯びはじめた。

私のすべてでー私のありっただけでー

カイをー絶対にー守るー！

彼女は切に願う。彼女は心から望む。彼女は深く祈る。

だからーカイ！

シエルが両腕を広げた。

わたしの！

ぜんぶを！

ー受け取ってええええええっ！

瞬間ーシエル王女の体が、目もくらむほどの強烈な光に包まれた。

いったい、何が起こったのかー彼女自身にもわからない。

しかしシエルの願いはーカイを守るという望みはー天に届いた。

この極限の状況で、シエルの中の「何か」が、発動し

たのである。

彼女から発せられた光が、柱となつて空に放たれ、雲を貫いた。その光の柱が回転しながら太く広がると、その先端が花がほころぶようにゆつくりと、おごそ厳かに開いていく

縁が波のように揺れ、次第にノコギリの歯のような形へと変化していった。

その途端、とたん辺りの森がいっせい一斉に静まり返る。それはまるで、動物たちが、植物までもが、高貴なる者の御前ごぜんで頭こうべを垂たれたかのような――いふ畏怖の混じった静寂せいじやくであつた。

せいひつ静謐の中、辺りを圧倒する、すいこう崇高なる輝き――
遠くから見れば、その光は、こつ見えただらう。

空に浮かぶ、巨大な――王冠^{おうかん}。

シエル王女から放たれた、光の柱が花開いた瞬間――

ぐーぐおおおおおおおっ！

強大^{じんだい}にして甚大^{そうだい}、壮大^{そうだい}にして膨大^{ぼうだい}な力が、一気呵成^{いつきかせい}に、怒涛^{どとう}のごとく、激流のように、カイの体に流れ込んだ。

ううう！ うううううううっ！

膨大な力が、溶け合い、混ざり、らせん状に絡まり、その下の未知の領域へ――急速に、急激に、急流となつて、落下し――降下し――落ちて、落ちて、落ちて――

強烈な衝撃が――強力な衝動が――強大な力が――いま――カイの中で――

ツツツ!!

―弾ける―!

「があああああああああっ!!」

カイが体をかくかくと震わせ、叫び声を上げた。

「がっ! がはっ! ぐっ! ぐはっ! がはああああ

ああっ!」

苦しそうにうめき、叫び、体を硬直させ、拳を握りしめる。

カイの髪の毛がぶわあつと逆立つと、その髪が―
気に伸びていった。黒かった髪は次第に色が抜け、黒銀こくぎん
の輝きを帯びはじめ。制服が吹き飛び、傷だらけの上
半身が頭あたまになつた。

そして――体を覆うように、武装が形成されていく。
その途端――

「ぎゃあああああああああ！」

想像を絶する激痛にカイが叫んだ。その武装は体を覆うというよりむしろ――カイの皮膚^{ひふ}を侵食するように形作られていく。ぎりぎりとかイの肉を削り、骨に喰い込む。

暗黒騎士のものではない、ましてや聖騎士^{パラディン}でもない

――異質異様な^{まがまが}へ全身武装錬成^{フルアームズアルター}。

禍々^{まがまが}しくも、神々^{こうこう}しい、その黒銀の武装は――まるで、

カイの第二の皮膚のようであった。

「ぐー！　　がー！　　ぐぐぐぐっ！」

目を固く閉じ、苦しみにうめき、のたうち回る。

侵食される。侵入される。巨大な力が、カイの体を、カイの意識を、カイの魂をこじ開け、蹂躪じゆうりんしていく。そして――

「があああああああああ！」

武装が全身を侵食すると、カイは激しく震え――カッと目を見開いた。

その瞳の色は――青みがかった銀。その輝きは、さながら月光である。

カイは歯を食いしばり、体を大きく震わせた。

こ……これは――！

カイの体内に、触れれば大爆発を起こすような強大な

力が渦巻いている。皮膚のすぐ下を蠢く膨大な力の気配に、カイは唇を思いきり噛み締めた。

意識はある。記憶はある。意志もある。だが――力を……制御……できない！

体の内側から溢れてくる力に振り回され、その有り余る衝動に突き動かされる。

目の前で倒れているシエルに、手を伸ばそうとするが――

だ……駄目だ――やめろおおおお！

――その腕のあまりの速さに、自分の手首を懸命に掴んで手を止めた。

力加減が――できない！

この状態でシエルに触れようとすれば、きっと彼女を――壊してしまう！

力を抑えろ――押さえ込むんだ――

ぐぐぐ……ぐぐぐ……！

膨大な力の噴出を抑えるため、カイは思いきり、体を硬くする。力を入れ過ぎるあまり、目の血管が破れ、血の涙がにじんだ。

カイは奥歯を思いきり噛みしめると――強烈に震える体で立ち上がり、横たわっているシエルに目をやる。

すまない……そのままにしておくことを許してくれ――みんなが……待ってるんだ――

カイは戦場の方向を睨むと――

行ってくる！

カイは爆発的な勢いで地面を蹴ると、驚くべき速度で戦場へと舞い戻る――

そして戦場では――

「離れて！ 離れてええっ！」

ミリアの叫びに、キース会長が辛うじて槍遣いから距離を取る。

戦場は、すでにフウカが支配する領域と化していた。

回復役のモニカが早々に狙われると、アーチャー聖射手リッツが

彼女をかばい、二人とも土まみれで地面に倒れていた。

まだ息があるだけ奇跡である。

ミリアとキース会長が、槍遣いに対し、無謀な近接戦を挑んでいた。

「この戦場に立ち入るならば――このフウカ、容赦せ
ん！」

槍遣いフウカが豪快ごうかいに槍を振るう。聖騎士ミリアとキース会長は、その槍を「くくうつ！」体勢を低くして辛うじてかわすと、フウカの間合いに飛び込んだ。

「ひゅっ！」はああああっ！」

ミリアと会長が、決死の覚悟で、連続刺突を繰り出す――が――

フウカの周囲で火花が散り、二人の剣が阻まれる。即席の連携攻撃など彼には効かなかった――だが――

狙いはそこではない。

ミリアが叫んだ。

「クロエっ！」

ミリアたちの攻撃はただの誘導。槍遣いの後方でクロエが立ち上がると――

「へ食屍鬼グール――捕まえてええええっ！」

「む！」

槍遣いの足元からへ食屍鬼グールたちの手が伸び、彼の足を我先にと掴む。クロエは最後の支配力を振り絞り、
へ食屍鬼グールを地下に召喚しょうかんしていたのだ。すべては――

今度はクロエが必死の形相で叫ぶ。

「頼んだーチビれったああああっ！」

「なに！」

フウカが初めて、警戒態勢を取った。槍遣いは、いつの間にか、自分が、光の球に囲まれていることに気づく。あらゆる場所に浮かぶ、無数の光球。

小柄^{こがら}な天才賢者^{セイジ}が口元をにやりとさせた。

ヴィーは、モニカの治癒魔法で、少量ではあったが魔力を回復させていたのである。

一連の攻撃は、すべてこのための布石^{ふせき}――

それは光属性攻撃魔法――その名も――

ヴィーがフウカに狙いを定め、手を振り下ろす。

「ぶち抜け！――〈閃光^{スパークル}〉ッ！」

無数の光球が光線状に変化すると、フウカ目掛けて――

斉に放たれた。それは敵を貫く光の槍。逃げ場などどこにもない。

「おっしや……もらったあああっ！」

ヴィーが叫ぶ。ミリアが、会長が、固唾^{かたず}をのみ、クロエが眩^{まぶ}しさに目をそむける。

左右から、前後から、上下から、あらゆる方向から迫る〈閃光^{スパークル}〉が、槍遣いを串刺しにする――その瞬間――

「な……なにいいいいいつ!？」

ヴィーが大声を上げ、皆が信じられないという顔をしていた。

槍遣いフウカは、体幹をわずかに逸らすだけで――

「う……嘘だろ……」

すべての〈閃光^{スパークル}〉をかわしていた。

皆は息をのみ、思い出す。必死で忘れようとしていたことを思い出す。

彼は最強の中の最強——王宮聖騎士^{ロイヤルパラディン}。

全員が束になってかかっても——到底敵うはずのない別格の相手なのだ。

槍遣いの背後に浮かぶ巨大な眼。その眼を見ることができる者は、ほんの一握りである。

フウカに匹敵するほどの才能ある戦士にしか、そのスキルを視覚^{しかくぞう}像として捉えることはできないからだ。

そのスキルは——〈達識達観〉。

未来を識り、未来を観る——予知予見の心眼^{しんがん}である。

槍遣いがヴィーに目をやった。

「なるほど……君が賢者^{セージ}か」

ヴィーが歯を食いしばり、フウ力を睨む。

「君から先に、片付ければよかったーな！」

「ヴィー！ 逃げてえええええ！」「チビれったあああ

っ！」

ミリアとクロエが叫んだ。

フウ力が放つ神速の槍が、ヴィーを襲う。天才賢者^{セージ}は

――

「賢者^{セージ}を――舐めんなあああっ！」

アンチ・マテリアルシエル
へ対物障壁――展

開！」

極小の〈障壁〉を一瞬で展開した。しかもその数――

七枚。青白く輝く七重の盾。グイーー渾身の絶対物理防御である。しかし――

「な……馬鹿な!？」

槍の一閃に、〈障壁〉が次々と砕けていく。五枚目、六枚目が砕かれ――ついに最後の〈障壁〉が――パリンッ！――硬質な音を立て――砕け散る。その瞬間、グイーは――

「がつ！」

――凄まじい勢いで飛ばされ、向かいの木に激突し、そのまま――動かなくなつた。

「グイ……グイイイイイッ！」「チビれつたああああああ！」

ミリアが、クロエが、壮絶に顔を歪める。しかし、助けに行く間などない。フウカが槍を豪快に振るうと――

「きゃああああ！」「ぐはあ！」「いやああああ！」

まだ辛うじて立っていた全員が吹き飛び、地に倒れた。フウカは槍を戻すと、再び静かに構える。

これが王宮聖騎士――

ロイヤルパラディン

彼女たち全員が死力を尽くしても、敵う相手ではなかったのだ。

「勇気ある若者たちよ――君たちに敬意を表し、痛みのないよう――撃で屠^{ほふ}ろう」

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士が槍を振りかざす。その槍の先に倒れているのは――

ミリアが顔を歪める。

―カイの妹、天才死ネクロマンサー霊術師クロエ。

「あ……あ……ああ……」

クロエが泥だらけの顔を上げ、体中を震わせた。それを見て聖パラディン騎士ミリアは―

「させ……ない！」

―ぶるぶるとあり得ないほど体を震わせ、切れるほど固く唇を噛み締め、ぼろぼろの体で―立ち上がった。盾もなく、レイピアは折れ、全身は傷だらけ。生命力はほとんど残されていない。

彼女の自慢の髪は土にまみれ、勝ち気な青い瞳は輝きを失っていた。でも―

それでも――

ミリアは槍遣いの前に立ちふさがる。最強を前に一歩も引かない。

槍遣いフウ力が、驚きに眉を上げた。普通なら、彼女の状態で、立ち上がれるはずがないからだ。

ミリアは大きく震えながら、フウ力の前で両腕を広げる。

もう剣すら握れない。

これはただの――時間稼ぎ。

「……ミ……ミリア……」

泥まみれの顔を涙でくしゃくしゃにして、クロエが声を上げた。

ミリアは一度クロエを振り返ると、目を細める。

この子を、絶対に、私より先に死なせない――

だってクロエは、私の――可愛^{かわい}い妹だもの！

槍遣いが小さくうなずくと、ミリアに穂先を向け――

「よからう、気高き聖^{パラディン}騎士。その心意気に――応えよう！」

――槍を振り下ろす。

「ミ……ミリアああああっ！」

クロエの悲痛な叫び。ミリアはすつと目を閉じると――

私はここまで……あとは……任せたわよ――

カイ！

ミリアの頬を涙が伝う。

そのときである――

「な――なんだああああ!?!」

槍遣いフウカの直上から、凄まじい速度で急降下してきたのは――黒銀の輝き。

ロイヤルパラデイン

王宮聖騎士が顔を歪め、大きく後方へと飛び退った瞬間――その輝きは地面に直撃し――

「がはあああああつ!」「きやあああああ!」

辺り一帯を――吹き飛ばした。

ごうおん

地響きのような轟音が響き渡る。地面がえぐれ、土が吹き飛び、大量の砂煙が舞い上がる。

それはまるで、爆裂魔法の直撃だった。

砂や小石が降り注ぐ音が、ひっきりなしに聞こえる。皆が土にまみれ、地面に転がっている。槍遣いフウ力だけが距離を取り、油断なく槍を構えていた。

砂煙が徐々に薄れ、落ちてきたものが、次第に、姿を現す。

大きくえぐり取られた大地、その穿^{うが}たれた大穴の中心に立っていたのは――

皆が息をのみ、目を見開き、凍りつく。

――黒銀の長い髪を振り乱した男。

その体は、黒々とした外骨格^{がいこつかく}のような武装で覆^{おお}われていた。

得体の知れない圧迫感。逃げ出したくなるような絶望

感。禍々しさと神々しさを併せ持つ奇怪な存在感。その場にいた全員が、身震いする。

ミリアが恐る恐る、尋ねた。

「力……カイ……なの……？」

震えながら振り向いた彼の顔を見て――ミリアが、ク
□エが、目を見開き、顔を歪めた。

これは――

見たこともない青黒く輝く瞳と、目の端から流れる赤
い涙。

ああ……！

これは――私の知ってるカイじゃない――

これは――私のお兄じゃない――

これは――カイ・ブラッディアでは――ない。

神々の持つ純粹さと――悪魔の持つ残忍さ。

二人はそこに――カイの形をした――神魔しんまの姿を見た。

カイが強烈に震え、自らの力を極限まで抑えながら、
喉のどから絞り出すような声を上げる。

「……離れて……いろ……ぜったい……近づく……な
……」

ミリアとクロエが、息を飲み込んだ。

「な……なんだ……なんなんだお前は！」

槍遣いフウカが、震える声で問うと――カイが――ぎり
りと振り返る。

その目、その顔、その姿――振り返ったカイを一目見

た瞬間――

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士は息をのみ、後ずさりした。体が芯から震え、髪が逆立ち、顔が恐怖でこわばる。

「う……うぐ……ぐぐう……」

喉からこぼれる、悲鳴の出来損ないできそこないのような音。

彼は本能に従うべきだったのだ。

すぐに逃げだすべきだったのだ。

ロイヤルパラディン

だが――誇りある王宮聖騎士には――殉じるじゅん信念のある

男には――逃げるという選択肢はなかった。

カイが、青黒く輝く瞳で、槍遣いを睨む。

もう、自分の力を、抑えられない。

力が――暴走する！

「うおおおおおおおおおっ！」

カイの黒銀の髪が、一気に逆立った。

「騎士殿——お覚悟おおおっ——」

「く！ このフウカ、受けて立つまで！」

槍遣いフウカが叫び、覚悟を決めると槍を構えた。彼は最強の中の最強。いままで数々の戦場を駆け、修羅場しゆらばをくぐり、数多あまたの敵を滅ぼしてきたのだ。

逃げることはもちろん、立ちすくむことさえ——許さ
れない。

「せい！」

フウカが神速の槍を放つ。その鋭さも速さもいまだ健
在。

「しゃっ！」

カイは恐るべき速度で、敵に襲い掛かった。そのさまはまるで銀の弾丸^{だんがん}。無数の槍の攻撃をぬるりと避けながら、見る間にフウ力に迫っていく。その動きの凄まじ^{すさまじ}さに気づいたのは、相対する槍遣いだけだった。槍遣いが、震える。

カイは空中で――軌道を変えているのだ。

「ば、馬鹿^{ばか}な！　あり得ん！」

その動きは、空中機動を可能とする高度な魔法を使わなければ、成しえないものだった。

しかし、フウ力とて百戦錬磨の王宮聖騎士――
ロイヤルパラディン

「ふっ！」

すかさず槍を引き寄せると、空間を刈り取るように薙^なぎ払い攻撃を放った。点攻撃を面攻撃へと瞬時に切り替えたのである。その卓越した技の冴^さえ。横薙ぎの攻撃がカイに迫る。

だが――驚くのは、またもや槍遣いの方だった。次の瞬間――

「な――」

フウカが思いきり、息をのむ。

カイは――薙ぎ払った槍の上に――立っていた。

「なんだとおおおお!?」

カイは槍の上を滑ると、一気にフウカの懷に飛び込む。しかしカイは得物^{えもの}を持っていない。剣を装備してはいな

いのだ。

「剣もなく、どう攻めるつもりだ！」

フウカが槍を払い、カイを振り落とそうとするが、もう遅い。カイが槍を足場にして跳躍ちようやくすると、すれ違いざまに腕を振るい――

「ひゅう！」

「ぐくううつ！」

――フウカの肩口を斬った。

飛び散る鮮血せんけつ。衝撃に体勢を崩す王宮聖騎士ロイヤルパラディン。彼は辛

うじて踏ん張ると、信じられないという顔で傷口を睨む。

カイは――

「ば……化け物があああ！」

―貫^ぬ手^{きて}で、フウ力を、斬ったのだ。

カイが手を振り、指についた血を払い落とす。

カイは膨大な力に飲み込まれ、敵を倒すという衝動に突き動かされ、戦闘機械と化していた。意識はあつたが、自分を抑えることができない。力を制御できない。

ミリアとクロエが、恐怖に震えながら、その尋常ならざる戦いを見ていた。

あれは……人の動きじゃない―

二人は人間離れた戦いに興じるカイに、戦^{せん}慄^{りつ}する。

槍遣いフウ力は、一度槍を振るうと―再び構えた。

ふうと静かに息を吐き、心を落ち着かせる。

「たとえ敵がなんであろうと―神魔の類^{たぐい}であろうと！

私の眼からは逃れられん！」

フウカの背後に浮かぶ、巨大な二つのまぶた。

「〈達識達観〉——開眼！」

ぎろりと、二つの眼が開く。未来を識り、未来を観る——予知予見の心眼。

「さあ——勝負だ、暗黒騎士！」

ロイヤルパラディン

王宮聖騎士が槍を構える。カイが彼の正面に立った。

二人の最強が——再び対峙する。

一瞬の静寂。そして——

「ッ！」

先に動いたのはカイ。一步踏み出したその瞬間——がちり——時間は止まり、フウカの〈達識達観〉が発動する。

見開かれた眼が、カイの未来の動きを見る、観る、視る。
しかし――

「な……どうということだ!？」

槍遣いがたじろいだ。

〈達識達観〉は確かにカイの未来を観た。

観たはずだった。

しかし、カイの未来像は――今と何ら変わりがない。

静止したままである。

その意味は――

「み、未来が――ないだと!？ 馬鹿な！ そんなはずが

――ない!」

フウカの背後の眼がさらに見開かれ、彼はさらに深く、

さらに遠く、カイの未来を観る。

そこで槍遣いが観たもの――それは――

「……な……なんだ……なんだこれは！」

カイの未来の動きがぼんやりと観えてくる。しかしその動きは――無限の足さばきに、無限の体さばきに、あらゆる種類の動作に分岐し、収束しない。

フウ力には、無限に分岐したカイの残像が観えるだけだった。

「嘘だ！　ぐぐ……まだだ……もつと……もつと深く！

〈達識達観〉――大開眼！」

槍遣いの後ろに浮かぶ眼が――カツと見開かれた。極限まで見開かれた眼で、フウ力は〈達識達観〉を発動さ

せる。

確定する未来を求め、収束する将来を欲し、へ達識達観〱がカイの未来を観測する。カイの動作を感覚する。

カイの可能性を探索する―だが―それでも―

観えるのは、無限に分岐した、カイの残像―

「な……なぜ……なぜ未来が確定しない！」

無理なのだ。無駄なのだ。無茶なのだ。無謀なのだ。

カイの動きは誰にも予想できない。神ですら予測できない。悪魔でさえ推定できない。

なぜなら―

カイは、無限の可能性へと分岐する、その一歩手前に留まっているからだ。

無限に「いま」を引き伸ばし、未来の動作を極限まで遅らせる——カイは敵の攻撃が皮膚に届く寸前まで動かない。相手の刃が原子一個分の距離に近づくまでそのまま留まる。限界ぎりぎりまで、判断を保留するのだ。カイは限界まで「いま」とどまり、極限まで自身の行動を決定しない。

これが、カイの未来を予測できない理由。

無理やり観ようとすれば、その未来は無限に発散し、決して収束しない。

そう。カイの動きは——未来は——絶対に——確定しないのだ。

「……うそだ……うそだあああああ！」

確定しない未来の事象を捉えることは、〈達識達観〉にもできない。

フウカの背後に浮かぶ巨大な眼から――どろり――血の涙が溢れ出る。その途端――

「ぐわあああああ！」

フウカが目を押さえ、叫んだ。負荷を掛けすぎたスキルが崩壊したのである。

〈達識達観〉――破れた。――

がちり――時間が動き出す。

速度を超越した予知予見の攻防が終わりを告げた瞬間――カイの強烈な貫手が、蹴りが、フウカのあらゆるところに叩き込まれ――「が！ がは！ ぐ！ がはああ

あ！——彼は吹き飛んだ。

二度、三度と地面を跳ね、壊れた人形のように、彼は地面に転がる。

ロイヤルパライディン
王宮聖騎士になつて以来、このように地に倒れ、空を見上げるのは初めてのことだった。もはや動くことさえできない。フウ力が苦しげに口を開いた。

「ぐぐ……見事、とは……言わんぞ……。剣を捨て、力に溺れ、^{おぼ}騎士であることを忘れた、哀れな暗黒騎士よ……」

だが――

「……な……」

カイは忘れていなかった。騎士であることを、剣士で

あることを、決して忘れてはいなかったのだ。カイの剣は――

フウカがうめく。

「あ……ああああ……あああああああ！」

――遥か上空にあった。

巨大な剣が、空に、浮かんでいる。

その巨大さに、壮大さに、荘厳さに、フウカが、皆が、目を見開いた。

カイが空を見上げると――

「おおおおおおおおおっ！」

――大声で吠え、手を思いきり振り下ろした。

大剣がフウカ目掛けて、恐るべき速度で落ちてくる。

雲を斬り裂き、空気を突き刺し、衝撃波で辺り一帯を震わせながら落ちてくる。

その剣の名は――^{ゼロ}「零」。

究極の生命力を供物^{くもつ}に創り出された、究極の剣――
剣が迫る。空気が裂ける。大地が震える。木々がなぎ倒される。地面が吹き飛ばされる。赤熱した空気をまとう。――^{ゼロ}「零」が目前まで迫ると――槍遣いフウ力は――最後の叫びを上げた。

「ぐぐぐぐぐううう！ おのれ……おのれええええええ！ やはり我が眼^{まなこ}は曇^{くも}っていなかった！ 間違^{あだ}つていなかった！ おまえは危険だ！ 王国に仇^{あだ}なす者だ！
それどころか――おまえはいずれ、人に、世界に、仇な

す者となるだろう！　―忘れるな！　そのこと、ゆめ忘れるなああああ―」

巨大な刃に貫かれ、強大な衝撃波と高熱にさらされ―フウカが一瞬にして消滅した。

衝撃に轟音が鳴り響き、大地が裂け、土が吹き飛び、大きな砂煙が上がる。

そして―やがて―

轟音が収まり、雨のように振ってくる石礫^{いしつぶて}が止み、砂煙が収まってくると―辺りの様子が顕^{あらわ}になっ^{こつり}ていく。

戦場は大きな穴の穿たれた、荒涼とした大地と成り果てていた。

その中心に、巨大な剣が刺さっている。

巨大で無骨で異様で、同時に、繊細せんさいで可憐かれんで精巧せいこうな、その剣。

究極の剣――〈零ゼロ〉。

それはまるで、激戦を繰り広げた強敵を弔とむらう、墓標ぼひょうのように見えた。

そして――その墓標の傍かたわらに立つ男の姿。

ミリアが、クロエが、身じろぎせずに彼を見つめると――

巨大な剣が光の粒子となつて崩れはじめた。もう形を維持するだけの力がないのだ。

男の長い髪が輝く粒子となつて溶け、全身の武装が剥がれ、消えていく。

禍々しい気配も、神々しい感触も、まるで最初から無かったように、消え去っていった。

「……カ……カイ……？」

ミリアの問いに、男が振り向く。その瞳は――いつもどおりの深い藍色^{あい}に戻っていた。

カイは一度大きく震えると――

「がはっ！」

大量の血を吐き、体の至るところから出血して、そのまま、どうと倒れた。

「カイ！ カイイイイッ！」「お兄iiiiiiii
っ！」

どのような力だったのか、なぜこうなったのか、誰に

もわからない。

それでもカイは――暴走状態になりながらも――
ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士を倒したのだ。

カイ・ブラッディアー――

最強の中の最強、ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士序列十二位・槍遣いのフ
ウ力をついに――撃破す。

エピローグ

その後、転移^{ポーター}してきた学園の先生たちに保護され、シエル王女やカイたち、生徒会の役員も、無事に帰還した。王女の腕^{うで}に取りついていた魔法蟲^{まほうちゅう}は、親蟲^{おやむし}が殺されたことで活動を停止していたが、すぐさま剥離^{はくり}処置が施された。生徒会役員たちの体内の蟲も、無事に体外に摘出された。された。

全員、重度の肉体的、精神的疲労により、数日間の安静を言い渡されることとなった。

それは当然である。あれほどの激戦をくぐり抜けたのだ。

この程度で済んだのはまさに奇跡と言えた。

カイは全身の傷と極度の衰弱^{すいじゃく}で、治療院に即刻入院させられた。

魔法蟲は、生徒会書記のモニカが購入したお茶に、卵の状態で含まれていたという。

購入店で調べても、輸入先しかわからず、どのような経路で持ち込まれたのかはわからない。

神聖近衛騎士団^{このえ}は、序列十二位・槍遣^{やりつか}いのフウカの死

亡を確認した。表向き、騎士団に動きはないが、彼を倒した暗黒騎士^{あんこくきし}カイ・ブラツディアの名前は、各騎士団と王室上層部に広く知れ渡ることとなった。

入院から二十日ほど経ってから、カイは目を覚ました。皆が無事な姿を見せ、生徒会の役員たちも正式に謝罪を申し出た。彼らは蟲に操られていた被害者であり、シエルもカイたちも、彼らを快く^{こころよ}許した。その後、役員たちも御見舞^{おみまい}がてら、気軽にカイの病室を訪れている。目を覚ましてから二週間。カイは、いまだ療養中である。

今日も、シエルやミリア、妹のクロエ、魔法^{まほう}院のヴィ

レッタが病室に顔を出していた。

クロエとヴィーは顔を合わせれば文句を言い合ったが、一緒にいることが多くなった。いつの間にか仲良くなっていたようだ。そして――

「……すごい事件だったわね。生きているのが奇跡みたい。――全部、カイのおかげよ」

シエルの言葉に、皆が改めてうなづく。

カイは皆を見て、唇をくちびる噛むかと首を振った。

「いや、皆がいてくれたおかげだ。それに――あれは俺の力じゃない……。力を制御できずに、騎士殿も葬ほうむる結果になっちゃった……。俺がもつとあの力を使いこなせていれば……」

悔しそうにうつむくカイの周りに、皆が寄り添うように集まる。

シエル王女が口を開いた。

「それでもよ……カイ」

カイが顔を上げると、皆が彼を見つめていた。

「それでも、カイがいなければーみんな、あの戦場から帰ってこれなかったわ」

「シエル……」

カイにうなずき、ミリアが続ける。

「そうよ、カイ。こうやってまたみんなが集まれたのは、あんたのおかげだわ」

そう言うってから、ミリアは肩をすくめた。

「……まあ、もちろん、^{パラディン}聖騎士であるこの私の功績は大きいけど？」

ミリアが言うのに、クロエやヴィーも声を上げる。

「それをいうならこの天才死^{ネクロマンス}霊術師のおかげじゃないの！　ねえお兄！」

「あ？　なに言ってるんだ？　オレさまがいなかったら、今ごろみんなここにいねーぞ！」

騒がしくなる病室。皆が笑い、カイも微笑^{ほほえ}んだ。

「そうだな……みんな、ありがとう」
しかし――

本当は笑ってなどいられない。
みんなにもわかっていた。

事態はすでに学生レベルの話ではない。敵として
ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士が現れたのだ。

もはや王国を巻き込んだ重大事件に発展しているのは
間違いない。

グイーがむーつと唸^{うな}ると、言いにくそうに口を開いた。

「あのな……お前らに言っと言った方がいいことがあつて
……シエルのことなんだけど」

「私の？」

シエルが首をかしげると、グイーは腕組みをしてうな
つた。

本当に言いにくいことなのだろう。

「グイー。お願い、話して」

王女に目をやり、ヴィーが深い息を吐いた。皆も、ヴィーの言葉を待つ。

シエルのことは、もうみんなの問題なのだ。

「これを聞いたらーもう降りられないぞ？」
皆が目を見合わせると、力強くうなずいた。誰も降りる気はない。

ヴィーがゆつくりと口を開いた。

「オレさまが学園に来たのは、元々、カイの力を調べるためだけどーあれはカイとー」

ヴィーがシエル王女に目をやる。

「ーシエルの属性力が合わさって起こるものだとわかった。カイの魔力経路もかなり特殊だから、もっと調べ

ないといけないんだけど……オレさまは、シエルの方にも秘密があるんじゃないかって睨^{にら}んでたんだ」

皆が静かに、続きを待った。

「だからオレさまは、シエルが療養中に^{ジャッジメント}〈鑑定〉を使っ

てみた」

^{ジャッジメント}

〈鑑定〉はヴィーが持つ、探索用の固有スキルである。

「……そうだったんだ。知らなかったわ……。それで？

なにかわかったの？」

ヴィーはしばらくシエル王女を見つめると、唇を噛んだ。

「ああ……シエルは——固有スキルを持ってる。それもレア中のレアだ」

「固有スキル……それは？」

ヴィーが続ける。

「〈王の器〉だ」

「王の……器……え？ 王の器!？」

シエルが思わず立ち上がり、□元を押さえ、息を飲み込んだ。その目が大きく見開かれていく。

「……やっぱ知ってたか……」

「……なんなんだ、それは？」

カイの問いに、ヴィーが答えた。

「〈王の器〉は――精霊の力を完全に引き出せる、超一級の固有スキルだ」

「な……精霊の力を……?」「完全に……? す、すごい

……」

カイとミリアが驚きの声を上げる。ヴィーが首を振った。

「それだけじゃない。こっちの方が重大だ。いいか？
この国で〈王の器〉を持つ者は――」
シエルが唇を噛み、顔を伏せる。

「継承順に関わらず――王位につける」
王位に……つける……

その言葉が皆に染み込むまで、しばらくかかった。そして――

皆がその意味に戦慄せんりつした。
ヴィーが言葉を継ぐ。

「わかったか？ 理解したか？ シエルは――王になれ

る！ 第四王女だろうが、王位継承けいしょう第六位だろうが関係ない！ いいか、よく聞けよ。今までのシエルを巡る――連の事件は――」

皆を見回した。

「この中央大陸随一の大国、神聖アストレア王国の――王位継承争いだ！」

皆が息をのみ、シエルが体を固くする。

「オレさまたちは、この国の継承争いに巻き込まれたんだよ！」

病室が静まり返った。無理もない。話の規模が大きすぎ、そして――危険すぎた。

今までの事件の背後にいるのは、間違いなく――王族である。

ヴィーがようしゃ容赦なく続けた。

「これで王宮ロイヤルパライディン聖騎士が出てきたわけがわかったろ？

〈王の器〉による王位継承争いのことももちろんあるんだけど――シエルの〈王の器〉で創り出された高純度な神聖力を、カイは膨大ぼうだいな力に変換できるんだ。どんな力なのかまだわかんないけど、二人の属性力が合わさると、すげー力が生まれるのは間違いない……」

皆が目を見開き、ヴィーの言葉を待つ。

「その力を、あの槍遣いは――王国を脅かす危険なものだと判断したんだよ！」

病室に重苦しい沈黙が降りた。

シエル王女が唇を噛み、クロエが泣きそうな顔でミリアにすがりつく。

カイは歯を食いしばって、拳を握りしめた。

事態は、皆が考えるよりも、遥^{はる}かに大規模で、ずっと危険なものであった。

カイが悔しそうに言う。

「……俺たちだけでは……もうシエルを守れないのか……？」

その言葉が、沈黙の底へと消えていくころ――

『子どもたちよ。聞きなさい』

突然の声に、皆が窓際に目を向けた。そこにいたのは

「な……猫^{ねこ}!？」

真っ白な輝くような毛並みの猫が、するりと、窓の隙間から病室に入ってくる。

「その猫がしゃべったの!？」

ミリアがシエルを守るように前に出ると、カイが素早く体を起こし、ヴィーがすかさず攻撃魔法を準備しはじめた。そこで――

『静まれ、子らよ。驚かしてしもうたな。これは、わ^{メッセンジャー}の伝達者である』

猫がしゃべっているのか、頭の中に直接響いてくるのかわからない声に、皆が目を見合わせ、息をのむ。

『そなたらの事情は承知している。まずは名乗ろう。わらわは――』

猫がしつぽを優雅に揺らすと、皆を見上げた。

『ロイヤルパラデイン王宮聖騎士・序列五位――無剣むけんのドロテ』

□、ロイヤルパラデイン王宮聖騎士！

カイが驚きに目を剥き、シエルが、皆が、息を飲む。猫が続けた。

『首輪に地図がある。すみやかに、誰にも見られることなく、指定の場所に参加せよ』

カイたちが目を見合わせ警戒を強めると、それがわかつたかのように猫は□を開く。

『案ずるな、子ら。わらわは、シエルファ―王女とそな

たらをー』

猫の瞳孔どうこうがきゆうと細くなつた。

『ー擁護ようごするものである』

病室に別の種類の沈黙が降りる。誰も動けない。声すら出せない。

猫がベッドに飛び上がるとー

『わらわは去るゆえ、よく話し合つて決めるがよい。ただしーあまり時間の猶予ゆうよはないと知れ』

ーカイの膝ひざの上でことんと眠り込んだ。

皆が身じろぎもせず、丸くなつた猫を見つめる。ドロテなる人物が猫を操り、伝言を届けにきたのだ。その人物はすでに、その猫から去つたようである。

ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士を名乗り、シエルたちを守るという謎の人

物――無剣のドロテ。

しかも序列は五位――本物ならば、
ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士の中で
も上位に位置する騎士である。

シエル王女の固有スキルへ王の器へ。

そのスキルを発端とした王位継承争い。

カイがシエルとともに生み出す膨大な力。

そして――敵か味方かわからない
ロイヤルパラデイン
王宮聖騎士。

対応次第で、みんなの未来が決まる――

事態は複雑で、状況は切迫していた。

沈黙のなか、皆が顔を見合わせ、混乱と戦慄に震える。

カイは一度唇を噛むと、苦しげにつぶやいた。

「……俺たちは……これからどうすればいいんだ……」
そのつぶやきが、重く、病室に沈んでいく。
カイたちは、すでに――後戻りできない場所に立っ
ていたのだ。